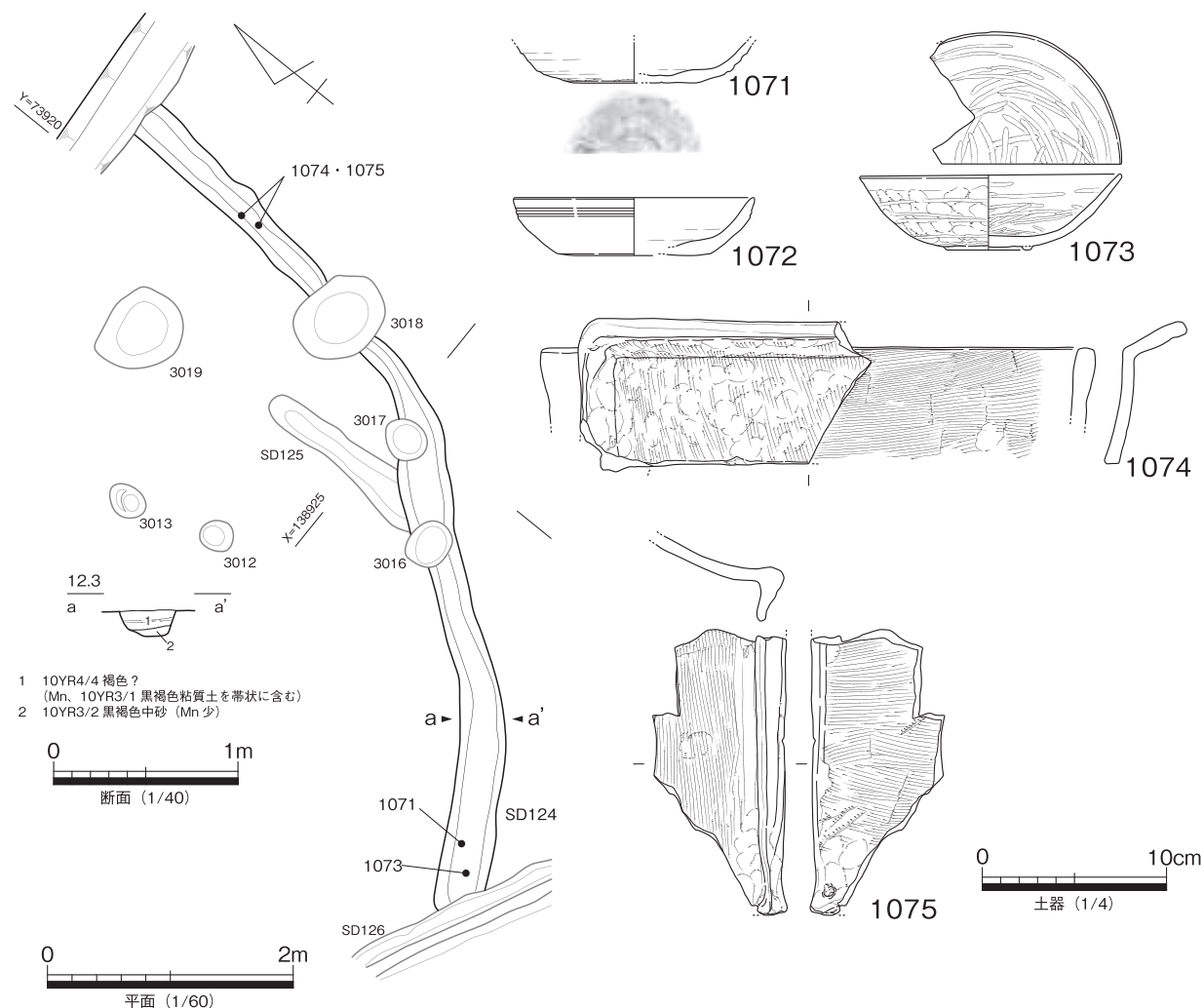


第182図 SG02・SD084 出土遺物実測図5

面右側を上、下方は同左側を上それぞれ綴じられている。籬の綴じ方は、いずれも3列で外面の端に近い前列は内3段、中列内1段、後列内2段綴じである。籬の樺皮は幅約8mmと、やや細いものを用いられている。内面のケビキは縦平行線のみで、間隔は1cm前後である。底板との結合は釘結合で、下



第 183 図 SD124 平・断面・出土遺物実測図

段箍の上から釘穴が 14 箇所穿たれており、間隔はランダムで規則性に乏しい。一部に木釘の頭部が残存している。側板にはヒノキ科ヒノキ属 (第 4 章第 1 節参照) を用いる。

出土遺物より本遺構は、12 世紀後葉には開削され、14 世紀代まで機能したと考える。

SD124 (第 183 図)

3 区 1 面北西隅付近で検出した南北溝で、緩やかに東に弧を描いて配される。北端は調査区外へ延長し、南端は SD126 と SD127 に切られ、両溝の南側で延長溝は確認していない。南北長約 7.3 m を調査した。溝は、検出面幅 0.19 ~ 0.38 m、残存深 0.15 m 前後で、断面形は逆台形状を呈する。埋土は 2 層に細分され、褐色系中砂等が水平堆積していた。溝底面の標高は、南端付近で 12.3 m 前後で一定する。

遺物は図示した以外に、器種不詳の弥生土器や須恵器、土師器カマド、土師質土器皿、瓦器等の小片が 30 点程度出土した。**1071** は土師質土器杯の底部片。底部回転ヘラ切り後ナデ調整を加える。**1072** も土師質土器杯とした。底部ヘラ切りで、口縁部下に 2 条の沈線を施す。外面を中心に 2 次的被熱の可能性ある。**1073** は和泉型瓦器碗。炭素の吸着は弱い。見込みに平行線状のミガキを施す。**1074**・**1075** は土師器カマドの焚口部の破片である。**1074** は焚口上部、**1075** は正面より見て焚口の左下端部に位置する。色調や焼成、胎土より同一個体の破片である可能性が高い。出土遺物より本溝は、12 世

紀後葉～13世紀前葉に位置付けられよう。

SD167 (第184図)

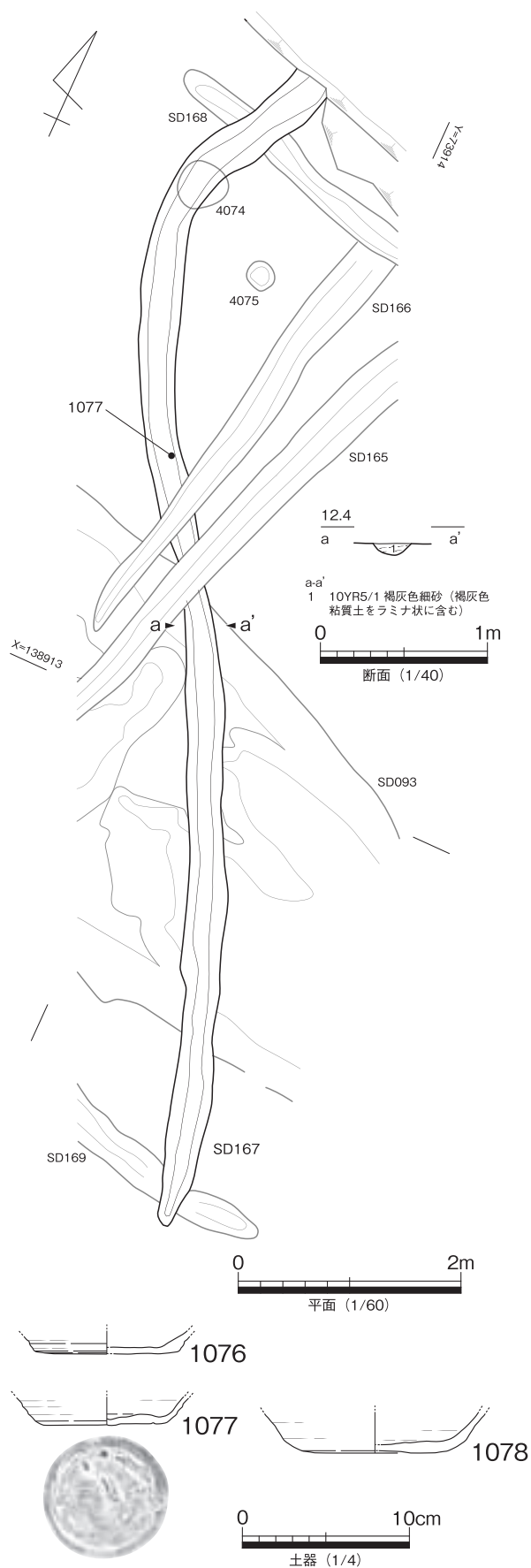
4区東端付近で検出した南北溝である。SD165、SD166、SD168と重複し、平面記録上はSD165、SD166より先行し、SD168より後出する。しかし、同時にSD168はSD166より後出することが記録され、溝間の重複関係に矛盾が生じている。SD167は、西にくの字状に屈曲して配され、南端は調査区内で途切れ、北端はトレンチに切れ、トレンチの北側で延長溝は確認していない。南北長約10.9mを調査した。検出面幅0.28m前後、残存深0.08m前後、断面形は皿状を呈する。埋土は、溝機能時の堆積層とみられる褐灰色細砂の単層であった。溝底面は、標高12.0～12.2m前後で顕著な起伏が認められ、高低差より流下方向と特定することはできなかった。

遺物は図示した以外に、器種不詳の弥生土器や土師質土器皿、杯等の小片20点程度と焼土塊小片1点が出土した。**1076**は平高台の土師質土器碗、**1077・1078**は同杯の底部片である。底部はいずれもヘラ切りである。なお、**1076**と**1077**は内面を中心に炭素が付着し、黒色土器のように黒化している。

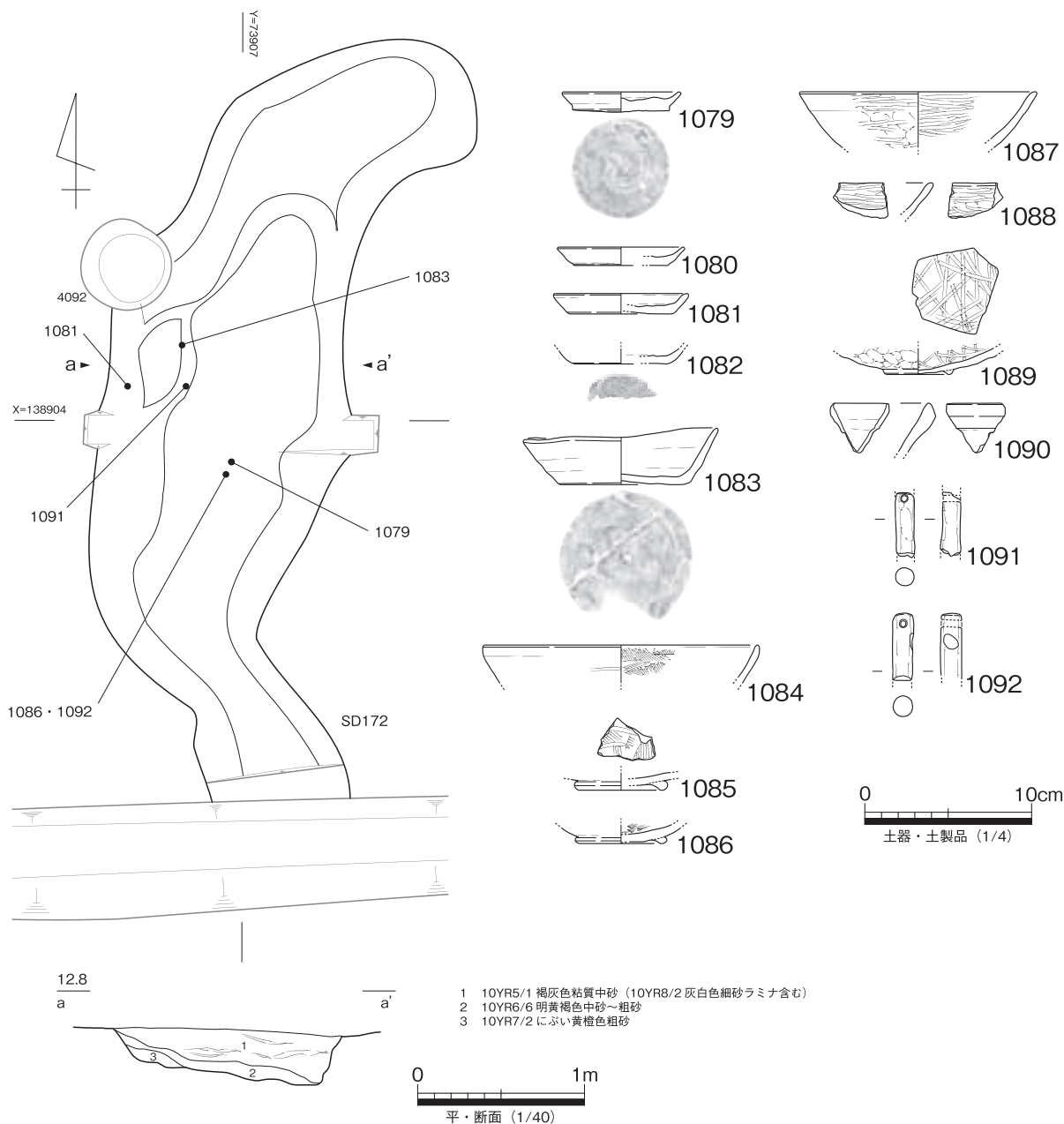
出土遺物には若干の時期幅がみられるが、**1077**より本遺構は、12世紀後葉～13世紀前葉を中心とした時期に位置付けられると考える。

SD172 (第185図)

4区中央南端付近で検出した溝で、緩やかに西に弧を描いて南北に配される。北端は調査区内で途切れ、南端は調査区外へ延長する。南北長約5.2mを調査した。溝は、検出面幅0.73～1.41m、残存深0.35m前後、断面形は箱形ないし逆台形状を呈する。埋土は、黄色ないし褐色系の中～粗砂がレンズ状に堆積していた。



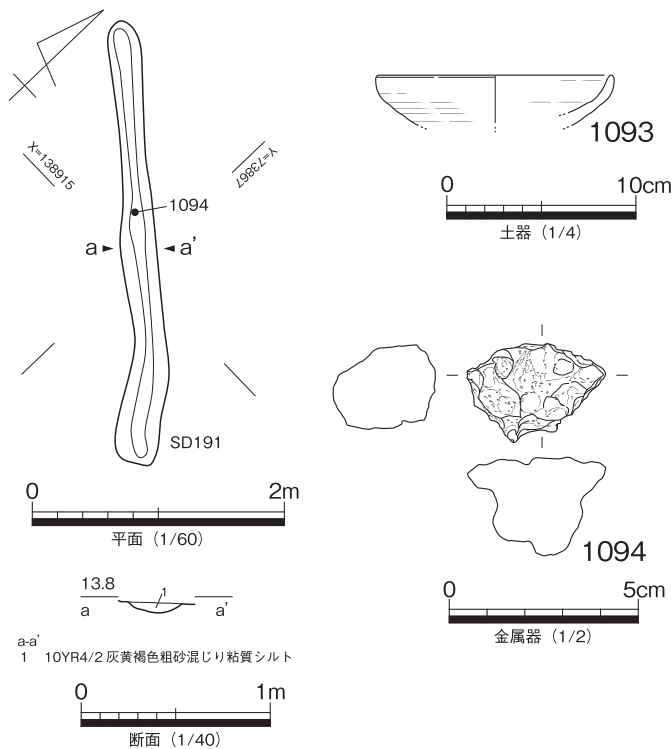
第184図 SD167平・断面・出土遺物実測図



第 185 図 SD172 平・断面・出土遺物実測図

上位層には細砂のラミナ堆積がみられ、溝機能時の堆積層と考えられる。溝底面は、中央部付近が標高 12.25 m 前後と最も深く、南北で若干浅くなっていた。

遺物は図示した以外に、器種不詳の弥生土器や須恵器、土師質土器足釜等の小片約 100 点が出土した。1079～1082 は土師質土器皿。1079 は、口縁部の一部を欠損するのみで、完形に近い状態で出土した。底部は 1082 のみ糸切りで、その他は回転ヘラ切りである。1083 は同杯。口縁部の歪みが大きい。底部は回転ヘラ切りである。本資料もほぼ完形に復元される。1084～1086 は十瓶山周辺窯産の須恵器碗。1085 の内面見込みには、ハケ調整後一定方向のミガキ調整を施す。1087～1089 は和泉型瓦器碗。1089 の見込みには、斜格子状のミガキが施される。Ⅱ-3～Ⅲ-1 期を中心とした時期に位置付けられよう。1090 は東播系須恵器鉢の口縁部小片。端部は上方へ小さく摘み上げて拡張し、端面は凹線状に浅く窪む。



第186図 SD191 平・断面・出土遺物実測図

Ⅲ-1類か。1091・1092は土師質の棒状土錘である。いずれも胎土中に角閃石細粒を含み、搬入資料の可能性が高い。

以上の出土遺物には若干の時期幅が認められるが、概ね遺構の埋没は13世紀前葉を中心とした時期と考えられる。

SD191 (第186図)

6区1面東半部で検出した東西溝である。東西両端は調査区内で途切れ、東西長約3.5mを調査した。流路方向N48.88°Wに配される。検出面幅0.26m前後、残存深0.05m、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は灰黄褐色粘質シルトの単層であった。溝底面の標高は、東端部で13.73m前後、西端部で13.68m前後をそれぞれ測り、高低差より西へ流下していた可能性が考

られる。

遺物は図示した以外に、土師質土器皿・杯等の小片が15点程度出土した。1093は土師質土器杯。外面体下半部にはロクロ目がみられる。1094は鍛冶滓の小片である。理化学的な分析(第4章第8節参照)の結果、熱間での鍛打加工に伴う鍛錬鍛冶滓と推定された。

出土遺物より本遺構は、13世紀中葉を中心とした時期と考える。

SD192 (第187図)

6区第1面南東隅付近で検出した東西溝である。重複関係より、SX010より後出し、柱穴2基が上面より掘り込まれる。南岸は平面図に記録されておらず、また調査区南壁の土層図(第22図)に、本遺構に該当する堆積物の記録が認められないことから、壁面の土層観察位置より北側で、本遺構の南岸が存在した可能性が考えられる。東西両端は調査区外へ延長し、里道を挟んで東に隣接する4区で延長溝が検出されなかったことから、里道下で北へ屈曲してする可能性を考える。また西側では流路方向が酷似する9区SD238が一連の溝となる可能性が考えられたが、出土遺物に明確な時期差が認められることから、別遺構と判断した。東西長約14.1mを調査した。流路方向N87.06°Wと、概ね正方位に配される。検出面幅0.68m以上、残存深0.10m前後、断面形は皿状を呈するとみられる。埋土は2層に細分され、いずれにもぶい黄褐色粘質シルトが水平堆積していた。流路底面の標高は、断面図に記録された数値と、平面記録に約20cmの誤差があり、確たる数値は不詳だが、東へ流下していたことは間違いのないようである。

遺物は、器種不詳の須恵器や土師質土器杯・播鉢・足釜・鍋、龍泉窯系青磁碗等の小片40点程度が出土した。図化した遺物はない。出土遺物やSX010より後出する点から、本遺構の埋没時期は14世紀後半代を中心とした時期と考える。

SD217 (第 188 図)

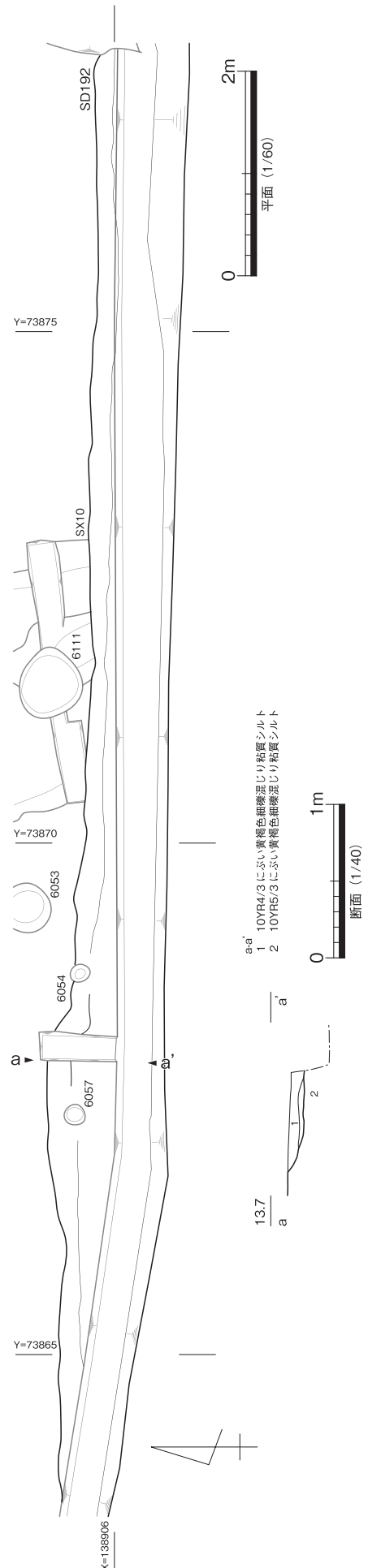
6 区 2 面東端付近で検出した東西溝である。調査区東壁の土層記録 (第 20 図) より、第 2 面包含層下より掘り込まれていることが確認されるが、包含層下で検出したにも関わらず残存深は 0.1 m 以下と浅いことや、後述するように 12～13 世紀代の遺物が一定量出土していることは、それら遺物が本遺構に伴う蓋然性が高いことを示しており、本来は第 1 面に帰属する遺構であった可能性を考える。東端は調査区外へ延長し、西端は調査区内で途切れ、東西長約 7.7 m を調査した。なお、東に隣接する 5 区で延長溝は確認していない。検出面幅 0.32～0.55 m、残存深 0.08 m、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は黒褐色粘質シルトの単層であった。底面の標高は、東端部で 13.30 m 前後、西端部で 13.40 m 前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下していた可能性が考えられる。

遺物は図示した以外に、弥生土器甕や 7 世紀代の須恵器杯、土師器甕、和泉型瓦器碗等の小片が 40 点程度出土した。**1095** は土師質土器皿。底部は回転ヘラ切りとみられる。**1096** は須恵器杯の底部片。9 世紀中葉前後に位置付けられ、重複する SD093 からの混入の可能性が高い。**1097** は、和泉型瓦器碗の底部片である。内面見込みには斜格子状のミガキ調整を施す。**1098** は、角礫凝灰岩製の九輪の破片である。凝灰岩中に含まれる岩石や鉱物種等より、石材はさぬき市火山産の可能性が高いと考える。

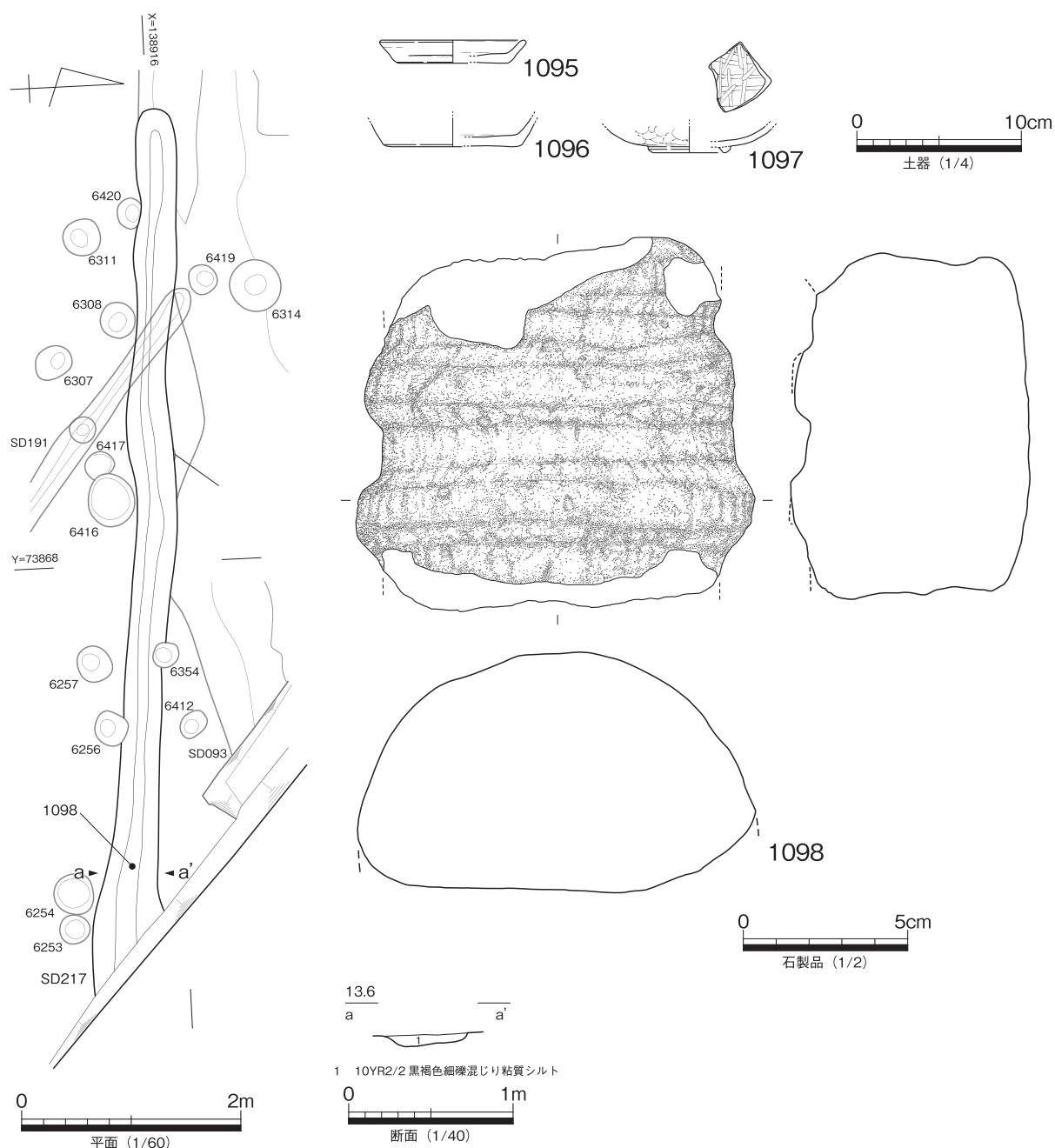
出土遺物より、本遺構は 12 世紀後葉～13 世紀前半代を中心とした時期に位置付けられると考える。

SD228 (第 189 図)

9 区中央部付近で検出した溝である。緩やかに西に弧を描いて南北に配される。南北両端は調査区外へ延長し、南北長約 6.1 m を調査した。北側に隣接する 6 区で検出された SD195 が延長溝となる可能性が考えられるが、埋土は大きく異なり、SD195 から遺物は出土しておらず、断定が困難なため異なる溝として報告する。重複関係より、SD229～SD231 より先行する。検出面幅 0.37～0.73 m、残存深 0.17 m 前後、断面形は一部で小規模なテラス面を伴うものの、概ね皿状を呈する。埋土は 2 層に細分され、黄色系の細砂～シ



第 187 図 SD192 平・断面図

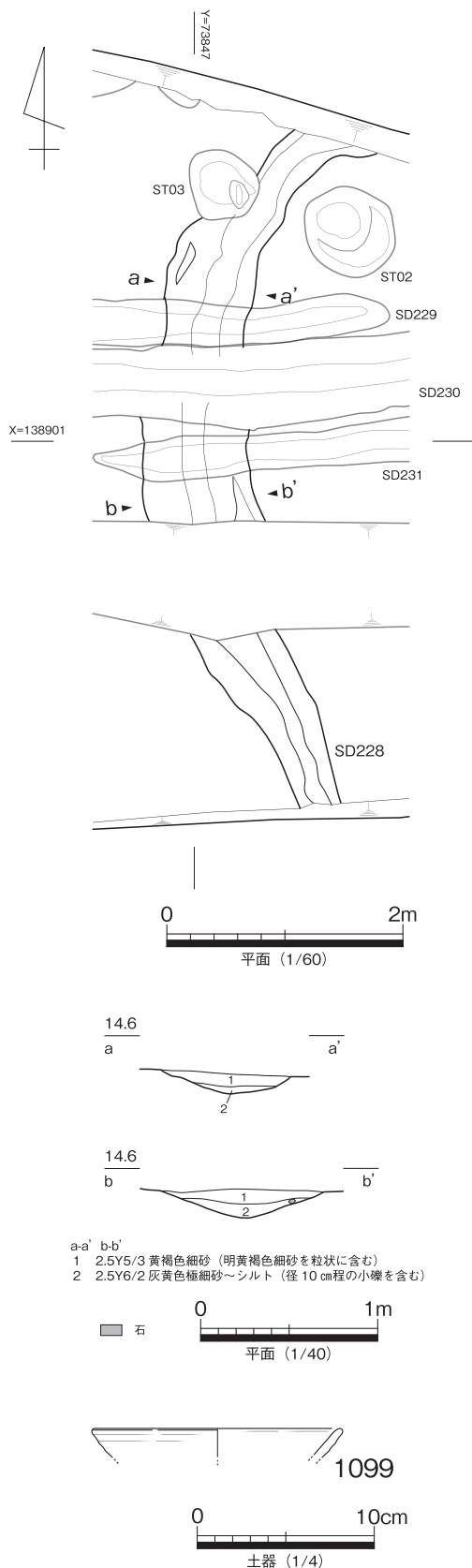


第188図 SD217 平・断面・出土遺物実測図

ルトが水平堆積していた。溝底面の標高は、南端で 14.45 m 前後、北端で 14.38 m 前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していた可能性が考えられる。

遺物は、図示した以外に、器種不詳の弥生土器や須恵器、土師質土器皿等の小片が 40 点程度出土した。1099 は吉備系土師質土器碗。ミガキ調整の有無は確定できないが、口径から山本編年Ⅱ～Ⅲ-1 期（山本 1993）を中心とした時期に位置付けられる。

出土遺物より、本遺構は 12 世紀後葉～13 世紀前葉を中心とした時期と考えるが、遺物量が乏しく、より詳細な時期については隣接地での調査の進展を待つて判断したい。



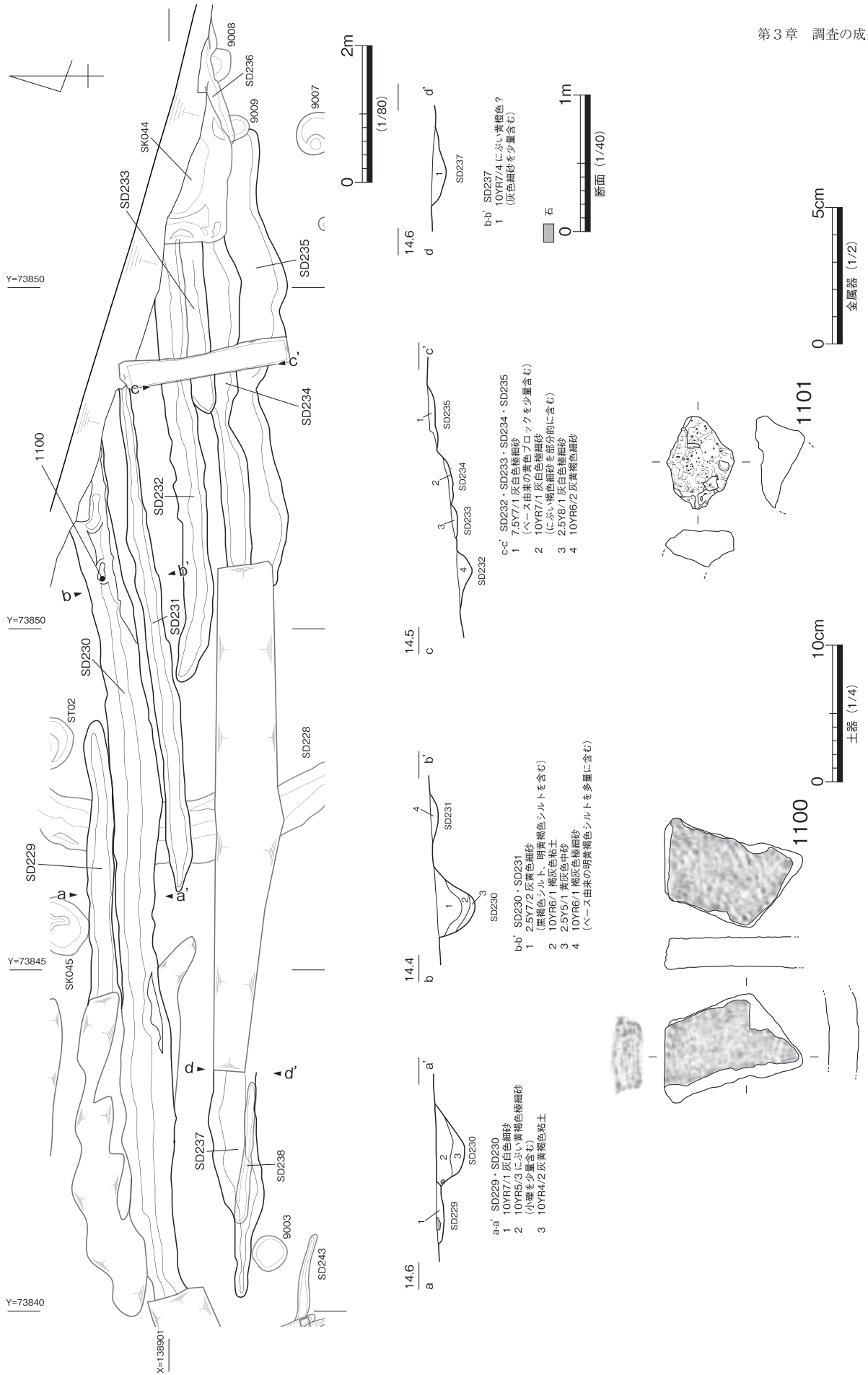
第189図 SD228 平・断面・出土遺物実測図

SD229～SD235・SD237 (第190図)

9区中央南半で検出された溝群である。いくつかの溝は細かな蛇行や屈曲がみられるが、概ね流路方向 N 82° E と東西に配される。平面や断面記録から考えられる溝の開削順序については、SD230 → SD229 と SD235 → SD234 → SD233 → SD232 が確認され、同時期に併存した可能性のある溝の最大数は、重複関係にない3条となる。また、SD235 と SD237 は、流路方向や規模等が近似しており一連の溝である可能性は高いと考えるが、試掘トレンチによる攪乱により確証が得られないため、別の遺構として報告する。東端は調査区外へ延長する溝が多いが、里道を挟んで東に隣接する6区で延長溝は確認していない。また西端は調査区内で途切れるものが多くみられる。後述するように、出土遺物の面から、詳細な時期を特定できない溝も含まれるが、近接して開削され、流路方向や規模等が概ね合致することから、近接した時期の溝群として報告する。また、鋤溝等の耕作痕の可能性も考えられるが、他の調査区で検出された同時期の鋤溝と考える遺構よりも規模が大きく、調査区内で南北への拡がりが見られないことから、区画溝や給排水溝としての用途を考えたい。上述したように、3条以上の溝が併存しえないことから、おおよそその位置を踏襲しながら繰り返し開削され、比較的長期にわたり維持された溝群と考えられる。

検出面幅は、狭い SD229 や SD231、SD232 等で 0.35 m 前後、広い SD230 や SD237 等で 0.67 m 前後、SD230 以外の残存深は 0.06 ～ 0.10 m、断面形は浅い皿状を、SD230 は残存深 0.28 m、断面形はU字状をそれぞれ呈する。埋土は、浅い SD229 等では灰色系細砂等がみられ、SD230 は灰色系細砂や褐色系粘土がレンズ状に堆積していた。溝底面の標高は、例えば SD230 では東端で 15.1 m 前後、東端で 14.7 m 前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下していた可能性が考えられ、他の溝も概ね同様に東へ流下していたようだ。

遺物は、SD229 より器種不詳の弥生土器や土師質土器、瓦質土器のほか、十瓶山周辺窯産須恵器碗の小片が 20 点程度が、SD230 より図示した以外に、器種不詳の弥生土器や瓦質土器、備前焼のほか、須恵器杯、土師質土器杯・足釜等の小片が 20 点程度が、SD231 より器種不詳の弥生



第 190 図 SD229 ~ SD235・SD237 平・断面・出土遺物実測図

土器や土師質土器、須恵器の小片 4 点が、SD232 より器種不詳の弥生土器や須恵器、土師質土器、瓦器等の小片 5 点が、SD237 より器種不詳の須恵器小片 1 点が、それぞれ出土した。なお、SD233 から遺物は出土していない。図示した遺物は、いずれも SD230 出土資料である。**1100** は、須恵質焼成の布目平瓦片。凸面には縄目タタキを施し、凹面には 5 条/cm の粗い布目痕を認める。端面は横方向の板ナデを施し、5 条の板目痕が弧状に残る。**1101** は鍛冶滓の小片である。

各溝より出土した遺物は、弥生土器や須恵器等の混入とみられる資料が少数出土しているものの、12 世紀後葉～13 世紀代に位置付けられる資料が主体を占めている。溝それぞれの詳細な時期を特定することは困難だが、概ね上述した時期幅の中で、溝が継続して開削、埋没したものと考えられる。

SD274 (第 191 図)

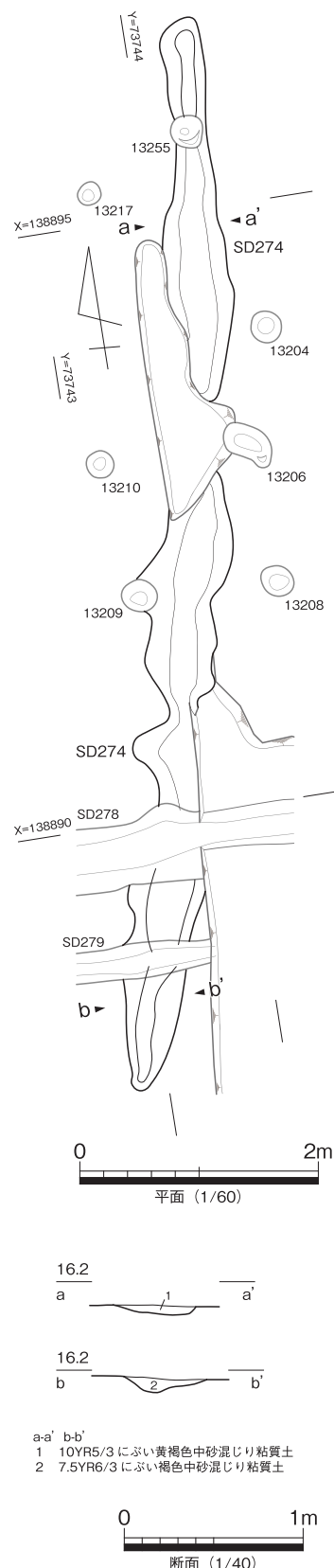
13 区南東隅付近で検出した南北溝である。緩やかに東に屈曲するが、概ね流路方向 N 11.33° E に配される。SD278、SD279 と重複し、いずれよりも先行する。南北両端は調査区内で途切れ、延長約 8.9 m を調査した。溝は、検出面幅 0.29 ~ 0.55 m、残存深 0.06 m 前後、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は、褐色系粘質土の単層であった。溝底面の標高は、北端付近で 16.00 m 前後、南端付近で 16.08 m 前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していた可能性が考えられる。

遺物は、器種不詳の弥生土器のほか、土師質土器皿・杯等の小片が 30 点程度出土した。図化した遺物はない。出土遺物や SD278 等より先行することから、12 世紀後半代を中心とした時期に位置付けられると考える。

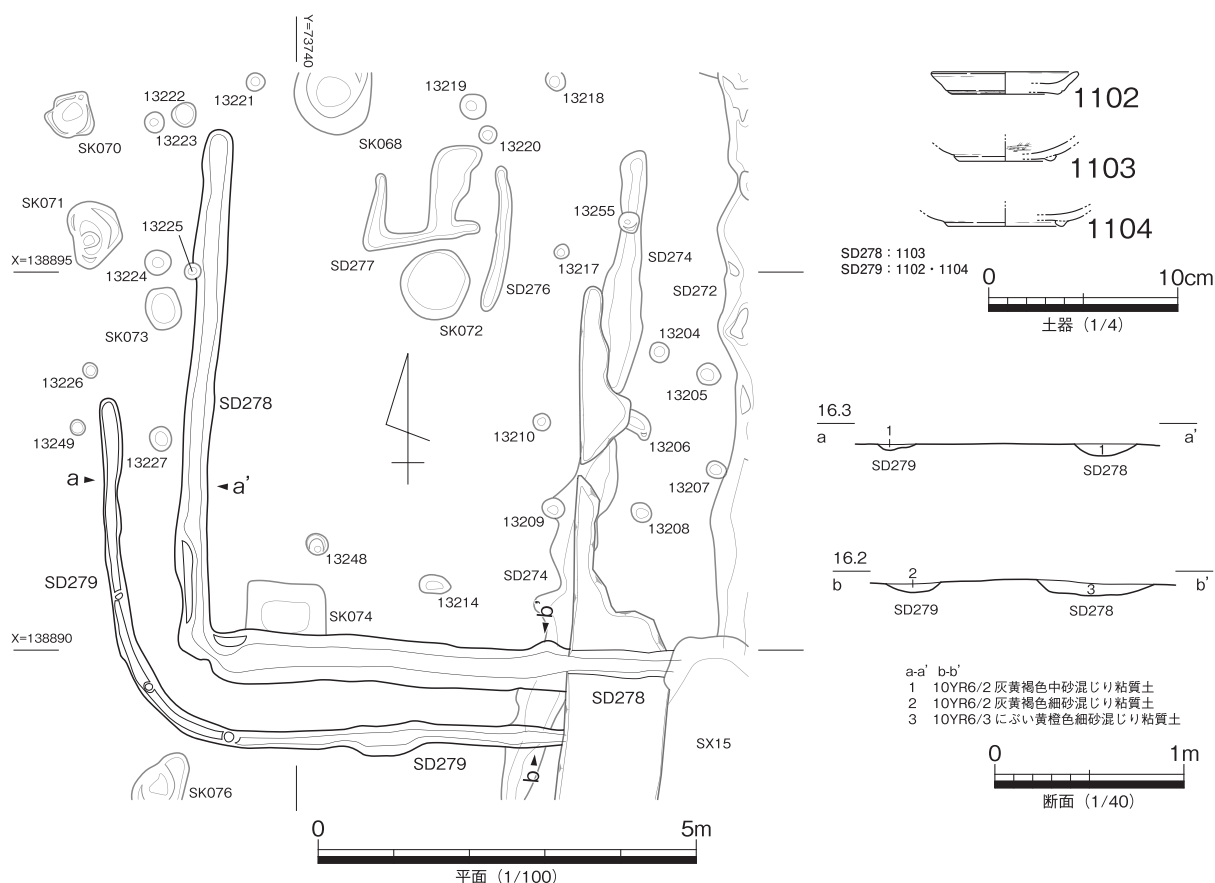
SD278・SD279 (第 192 図)

13 区南東隅付近で検出した、いずれも平面 L 字状を呈する溝である。北側に SD278 が、南側に SD279 が、溝芯々間で約 1.0 m 離れて配される。形状より、建物の雨落ち溝や区画溝の可能性が想定されるが、溝北側に建物は復元されず、検出範囲が限られるため、性格については不詳である。いずれも北端は調査区内で途切れ、東端は SX15 に切られ、SX15 の東側で延長溝は確認していない。なお SD278 は、SK074 より後出する。

SD278 は、南北溝の流路方向 N 4.0° E、東西溝は N 88.72° W と、概ね正方位に直交して配される。検出面幅 0.33 ~ 0.55 m で、東西溝が南北溝よりやや広い。残存深 0.06 ~ 0.09 m、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は黄色系粘質土の単層であった。溝底面の標高は、南北溝で 16.15 m 前後、東西溝で 16.07 m 前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下し



第 191 図 SD274 平・断面図



第192図 SD278・SD279 平・断面・出土遺物実測図

ていた可能性が考えられる。

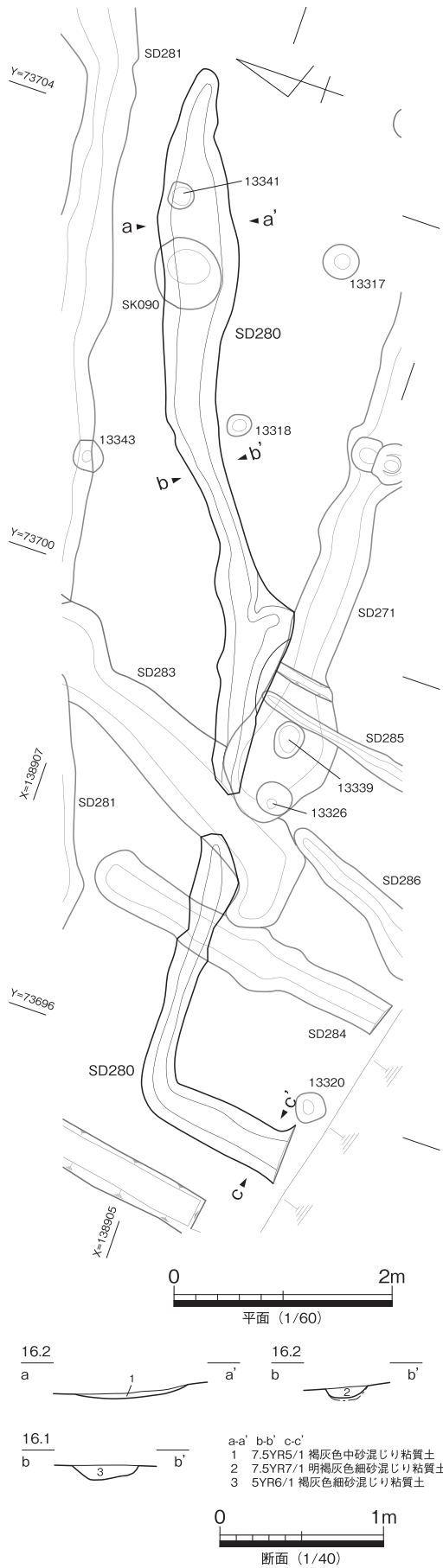
SD279 は、南北溝の流路方向 $N 2.39^\circ W$ 、東西溝は $N 89.65^\circ E$ と、本溝も正方位に直交して配される。検出面幅 $0.19 \sim 0.35$ m で、SD278 よりやや狭い。残存深 $0.03 \sim 0.05$ m と浅く、断面形は皿状を呈する。溝底面の標高は、 16.17 m 前後で概ね一定する。

遺物は、SD278 より図示した以外に、器種不詳の須恵器や黒色土器碗、土師質土器皿皿・杯・鍋等の小片が 20 点程度、SD279 より器種不詳の須恵器や土師器甕、土師質土器皿等の小片が 10 点程度、それぞれ出土した。**1103** は、十瓶山周辺窯産須恵器碗の底部片である。小片だが、内面見込みは板ナデ調整のみでミガキ調整はみられない。**1102** は土師質土器皿である。底部は回転ヘラ切り。**1104** は同碗の底部片である。マメツのため調整等は不明である。出土遺物より両溝は、概ね 13 世紀前半代を中心とした時期に位置付けられると考えられるが、両溝の前後関係等のより詳細な時間的な位置付けについては不詳である。

SD280 (第193図)

13 区北西隅付近で検出した、平面 L 字状を呈する溝である。重複関係より、SK090 より後出し、SD271、SD283、SD284 より先行する。東西溝東端は調査区内で途切れ、南北溝南端は調査区外へ延長するが、南側の調査区で延長溝は確認されていない。東西溝約 9.5 m、南北溝約 1.2 m を調査した。東西溝は緩やかに蛇行し、両溝の内角は約 107° と鈍角に交わる。

溝は、検出面幅 $0.21 \sim 0.67$ m、残存深 $0.06 \sim 0.09$ m、断面形は皿状を呈する。埋土は、褐色系粘質



第 193 図 SD280 平・断面図

土の単層であった。溝底面の標高は 15.92 ~ 15.98 m 前後を測り、若干の起伏が認められる。

遺物は、器種不詳の弥生土器や土師質土器皿等の小片が 20 点程度と、棒状土錘片 1 点が出土した。図化した遺物はない。出土遺物より本溝は、13 世紀代を中心とした時期に位置付けられると考える。

SD283 (第 194 図)

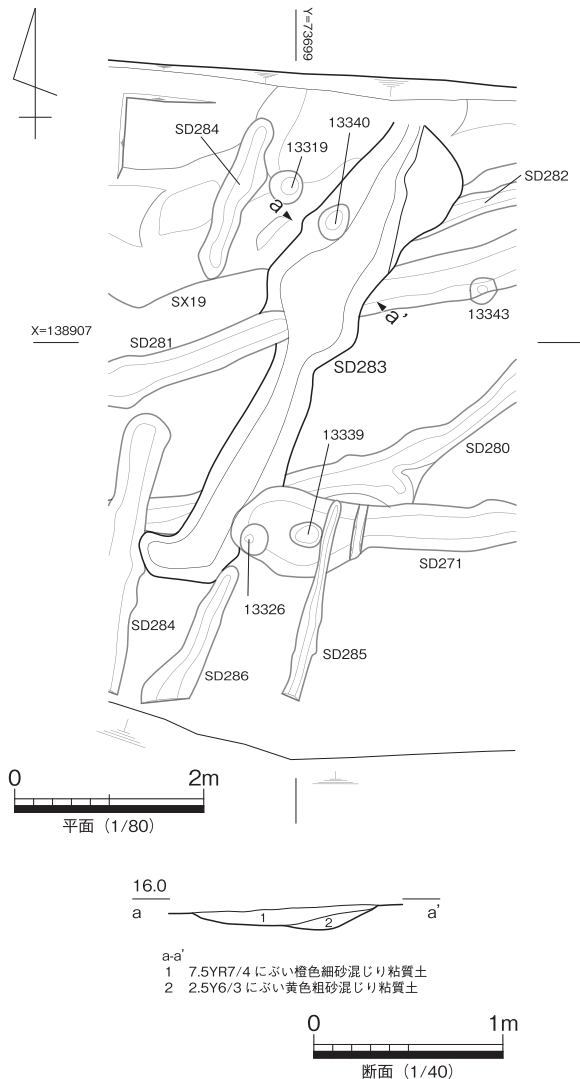
13 区北西隅付近で検出した南北溝である。溝南端で小さく西に屈曲するが、概ね流路方向 N 29.47° E に配される。SX19、SD280、SD281、SD284 より後出し、SD271 より先行する。南北両端は調査区内で途切れ、延長約 5.3 m を調査した。溝は、検出面幅 0.47 ~ 1.12 m、残存深 0.13 ~ 0.36 m、断面形は皿状ないし不整逆台形状を呈する。埋土は 2 層に細分され、黄色ないし橙色系粘質土がレンズ状に堆積しており、自然埋没した可能性が考えられる。溝底面の標高は、南端部付近で 15.97 m 前後、北端部付近で 15.74 m 前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していた可能性が考えられる。

遺物は、器種不詳の須恵器小片のほか、土師質土器皿・碗、和泉型瓦器碗等の小片が 30 点程度出土した。出土遺物より本溝は、12 世紀後葉 ~ 13 世紀前半代を中心とした時期に位置付けられると考える。

SD294 (第 195 図)

14 区中央東半付近で検出した南北溝である。流路方向 N 6.31° W に配される。北端は調査区内で途切れ、南端は SP14363 等が上面より掘り込まれ、柱穴の南側で延長は確認されなかったことから、重複位置付近で途切れるものと考えられる。南北長約 3.3 m を調査した。溝は、検出面幅 0.62 ~ 0.88 m、残存深 0.05 m 前後で、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は褐色粘質土の単層であった。溝底面の標高は 16.50 m 前後で一定する。

遺物は、図示した以外に器種不詳の須恵器小片 3 点のほか、土師質土器皿や黒色土器碗等の小片が 15 点程度出土した。1414 は石英の小礫で、稜角に敲打痕が見られることから火打石と考える。出土遺物は概ね 13 世紀



第194図 SD283平・断面図

SP14099より先行する。北端は調査区内で途切れ、南端は試掘トレンチにより攪乱を被る。試掘トレンチの南側で延長は確認していない。南北長約2.72mを調査した。溝は、検出面幅0.27m前後、残存深0.13m、断面形は概ね皿状を呈する。埋土は灰褐色粘質土の単層であった。底面の標高は、南端付近で16.64m前後を、北端付近で16.54m前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していた可能性が考えられる。

遺物は出土していないものの、重複するSP14170からは土師質土器杯や足釜とみられる土器小片、SP14099からは土師質土器皿とみられる土器小片がそれぞれ出土しており、重複する遺構の出土遺物より本遺構は、13～14世紀代を中心とした時期に位置付けられるものと考えられる。

SD300 (第196図)

14区南東隅付近で検出した東西溝で、やや北に弧を描くように配される。西端は調査区外へ延長し、東端は調査区内で途切れる。東西長約5.6mを調査した。SD301の上面より掘り込まれ、流路方向は概ね合致することから、SD301の後継溝の可能性がある。検出面幅0.24～0.98m以上、残存深は0.18mと浅く、断面形は概ね箱形を呈し、断面記録では南側縁部にテラス面が描かれる。底面の標高は、

代を中心とした時期に位置付けられるが、小片のため詳細な時期については不明である。

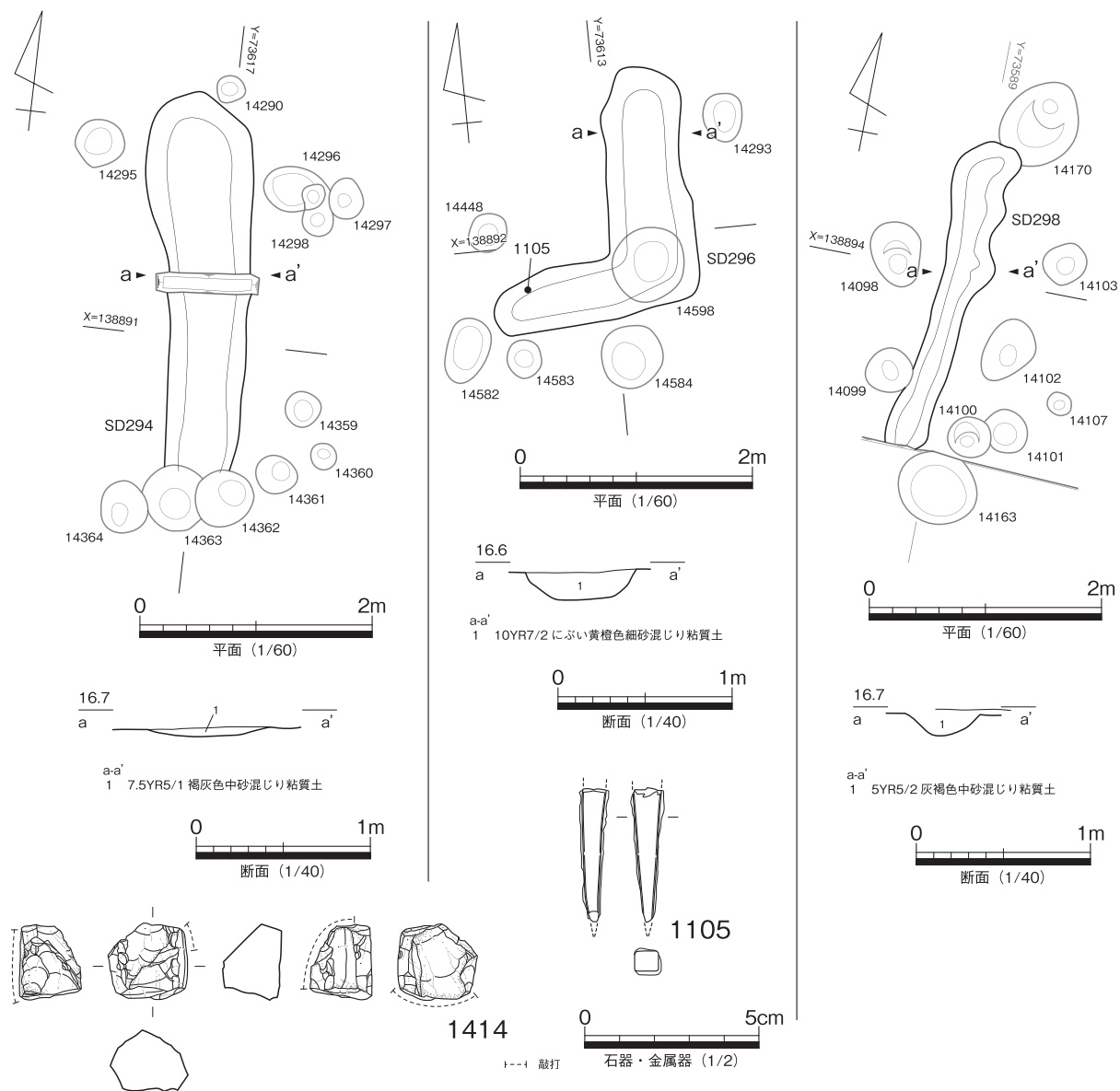
SD296 (第195図)

14区中央東半付近で検出した平面逆L字状を呈する溝で、屈曲部底面よりSP14598が掘り込まれる。北端と西端は調査区内で途切れ、南北溝2.03m、東西溝1.81mを検出した。なお両溝の内角は、99.97°とやや鈍角に交わる。南北溝の検出面幅0.65m、東西溝のそれは0.50mをそれぞれ測り、南北溝がやや幅広である。残存深は0.16mで、断面形は概ね逆台形状を呈する。埋土は、にぶい黄橙色粘質土の単層であった。溝底面の標高は、14.38m前後で一定する。

1105は、頭部を折損した6mm角の角釘である。図示した以外に、器種不詳の須恵器小片1点と、土師質土器皿等の小片10点が出土した。出土遺物は概ね13世紀代を中心とした時期に位置付けられるが、いずれも小片のため詳細な時期については不明である。

SD298 (第195図)

14区北西付近で検出した南北溝である。流路方向N6.14°Eに配される。SP14170より後出し、



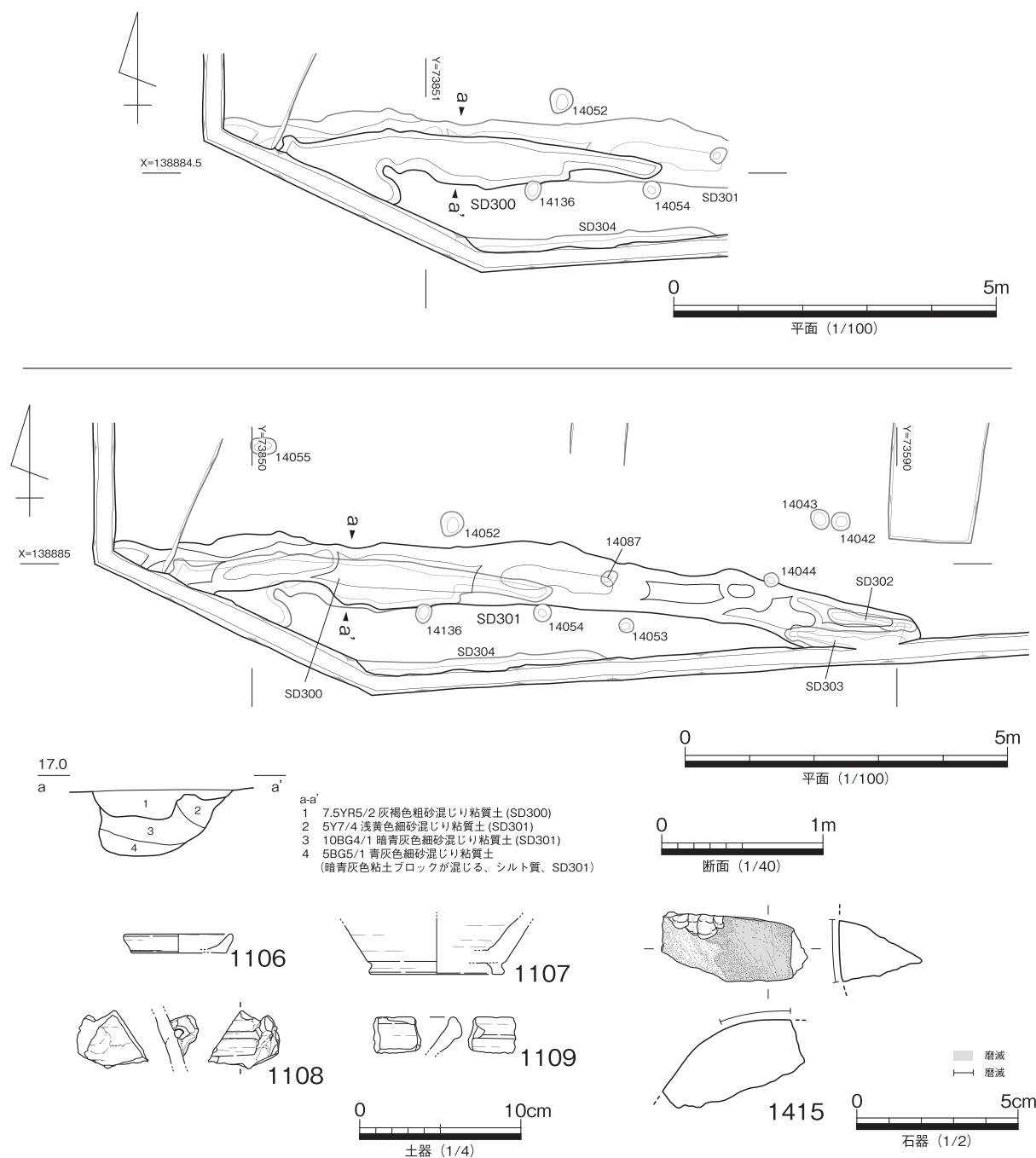
第 195 図 SD294・SD296・SD298 平・断面・出土遺物実測図

16.85 m 前後でほぼ一定する。埋土は、灰褐色粘質土の単層であった。不定形な平・断面記録より、複数の遺構が重複している可能性が考えられる。また、本溝と SD301 の堆積物の範囲は、調査区壁面での土層記録（第 43・45 図）と平面記録とでは整合しないが、調査記録のまま提示する。

遺物は、土師質土器皿・足釜、十瓶山周辺窯産須恵器碗等の小片が 20 点程度出土した。図化した遺物はない。出土遺物に SD301 と大きな時期差は認められず、本来は SD301 の堆積物の一部であった可能性も考えられる。

SD301 (第 196 図)

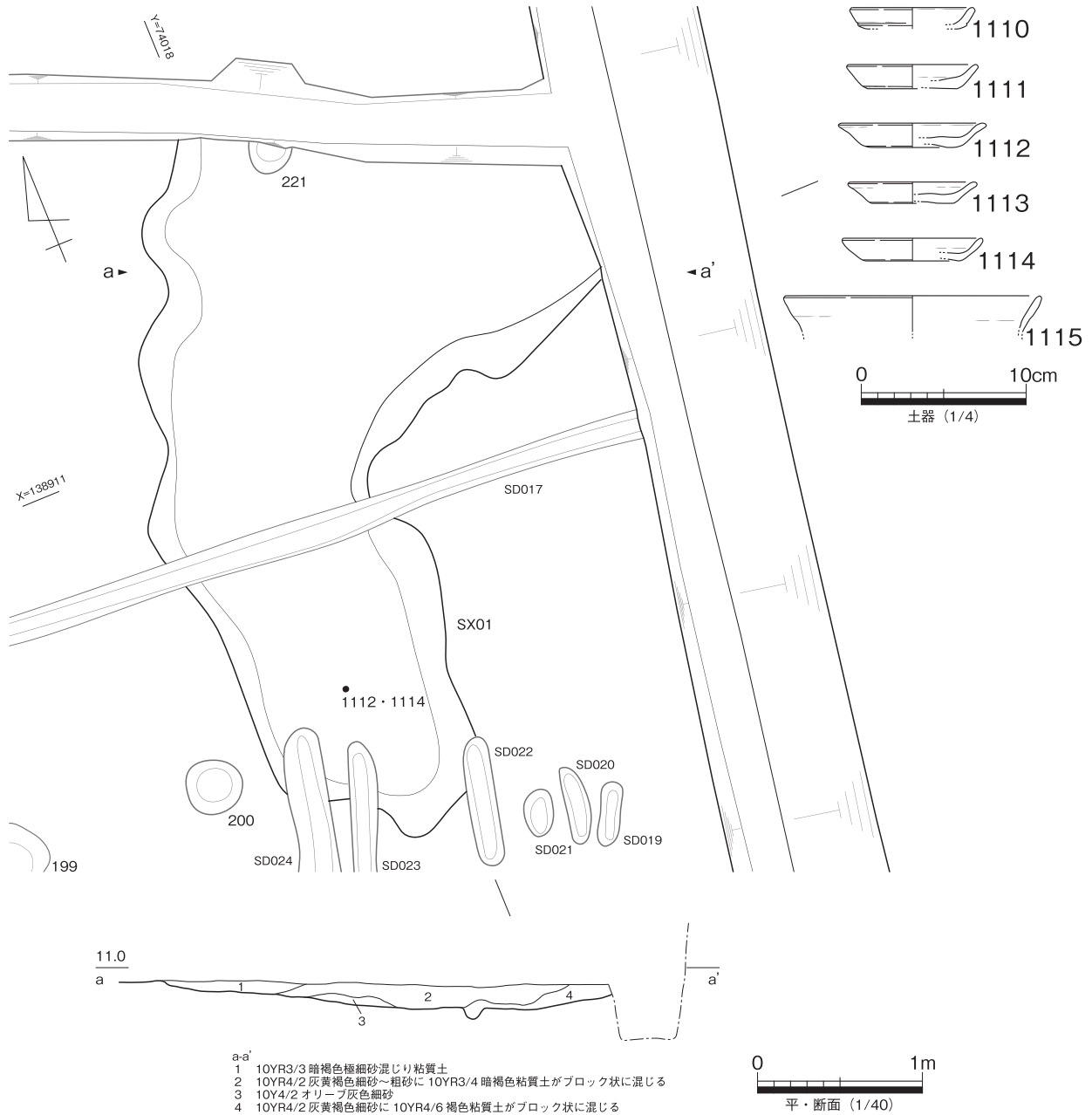
14 区南西隅で検出した東西溝で、北に緩やかに弧を描いて配される。上面よりほぼ重複して SD300 や SD302、SD303 が掘り込まれるほか、数基の柱穴が穿たれる。東西両端は調査区外へ延長し、約 11 m を調査した。溝は、検出面幅 0.62 ~ 0.96 m、残存深約 0.40 m で、断面形はやや歪な逆台形状を呈する。底面の標高は、西端部で 16.5 m 前後、東端部で 16.7 m 前後をそれぞれ測り、高低差より西へ流下する



第196図 SD300・SD301 平・断面・出土遺物実測図

可能性が考えられる。埋土は3層に細分され、下位2層はグライ化した粘質土が水平堆積していた。下層にブロック土の混入が認められ、壁面の崩落に起因するものであると考え。

遺物は、図示した以外に、土師質土器皿・杯・鍋、和泉型瓦器碗、十瓶山周辺窯産須恵器碗、瓦質土器羽釜、東播系須恵器鉢等の小片が若干量出土した。**1106**は土師質土器皿。底部は回転ヘラ切りである。**1107**は、須恵器壺の底部片である。9世紀代に位置付けられ、混入品とみられる。**1108**は、須恵器壺の肩部の小片で、縦位に長径約6mmの円孔を穿った薄い板状の耳を付す。孔の位置で、体部外面に1条の沈線を施す。本資料も混入品であろう。**1109**は、東播系須恵器鉢の口縁部小片である。口縁端部は上下に拡張し、端面は丸みを帯びる。Ⅲ-2類に位置付けられる。**1415**は砂岩円礫の小片である。一部



第197図 SX01 平・断面・出土遺物実測図

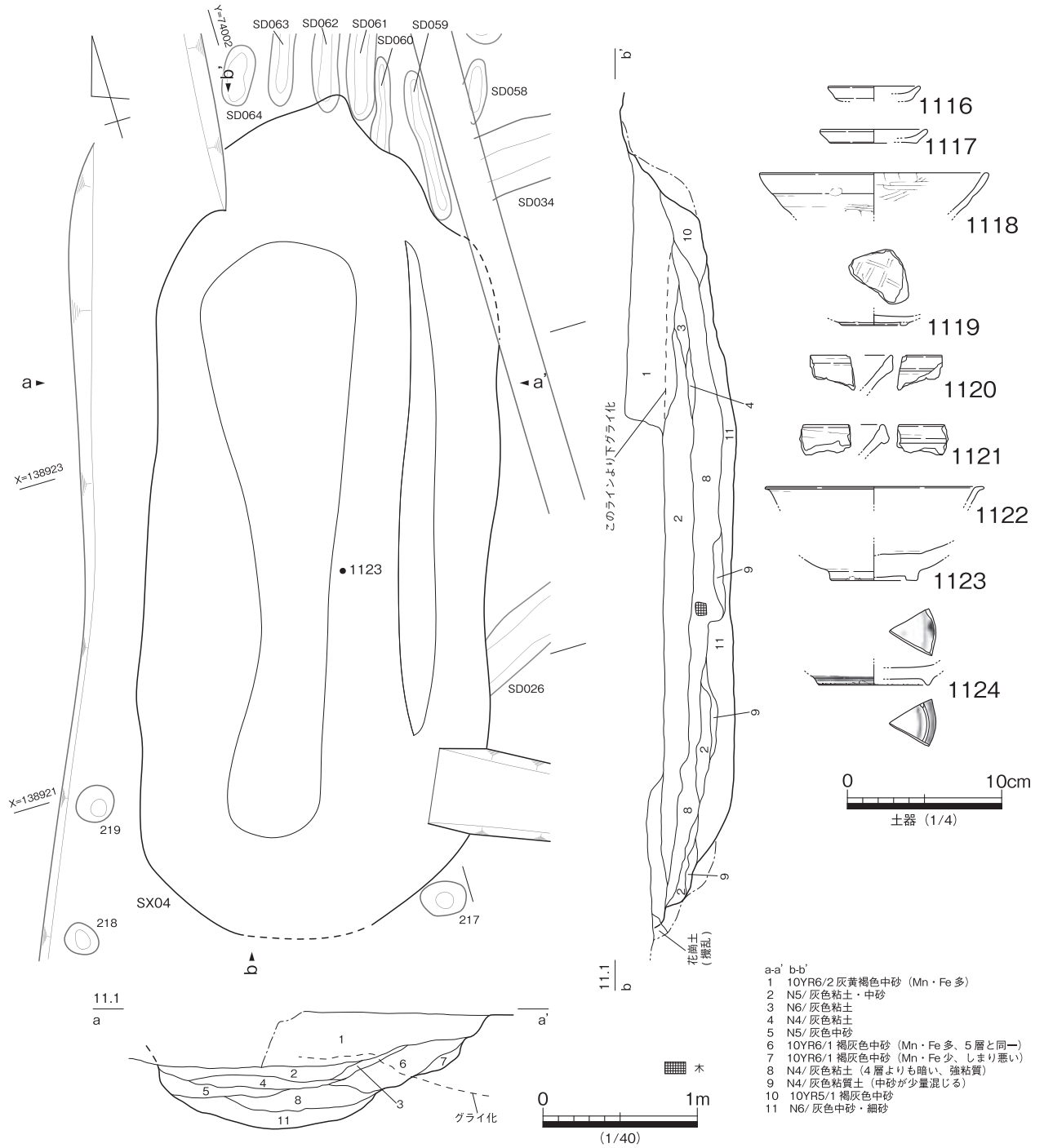
に研磨痕が見られることから、砥石として図示した。

出土遺物より本遺構は、13世紀前半～中葉を中心とした時期に位置付けられると考える。

性格不明遺構

SX01 (第197図)

1区1面南東隅付近で検出した浅い落ち込みである。緩やかに西に弧を描いて南北に配される。遺構北端に土層観察用のアゼが設定され、アゼの北側で遺構の延長は検出されていない。中央部付近上面よりSD017が掘り込まれる。南北長4.4m以上、東西幅1.4～2.4m、残存深0.17m前後、断面形は皿状を呈する。埋土は4層に細分され、褐色系粘質土及び灰色系細砂等がレンズ状に堆積していた。最上層(1層)は、下位の砂層を上面より掘り込んで堆積し、また最上層のみ粘質土であることから、重複する別



第198図 SX04 平・断面・出土遺物実測図

の遺構の堆積物である可能性も考えられる。

遺物は図示した以外に、弥生土器甕・高杯、器種不詳の須恵器、黒色土器碗、土師質土器皿・杯・碗、和泉型瓦器碗等の小片が若干量出土した。1110～1114は土師質土器皿である。1111は底部回転ヘラ切りで、その他はマメツ等のため調整等は判然とししない。1112と1114は近接して出土し、色調や器形等が近似しており、同一個体の可能性も考えられるが、接合しないため別個体として図示した。1115は弥生土器甕の口縁部片とした。重複する第2面の遺構からの混入資料であろう。出土遺物より本遺構は、13世紀前半代を中心とした時期に位置付けられると考える。

SX04 (第198図)

I区中央部周辺で検出した大型の土坑状の落ち込みである。SD026、SD034より後出し、SD060等の鋤溝群より先行する。長軸5.46m、短軸2.21mで、平面形は南北に長い歪な隅丸長方形状を呈し、主軸方向N 22.75° Eに配される。残存深は約0.7mで、横断面形は舟底状、縦断面形は底面が平坦な逆台形状を呈し、検出面より0.5m程度下がった東肩部に、幅約0.3mのテラス面を認める。埋土は11層に細分され、灰色系の砂や粘土がレンズ状に堆積していた。一部の遺物は、上下2層に大別して取り上げられているが、調査記録に該当する記載は見当たらない。また、地下水の影響からか、埋土下半部はグライ化する。

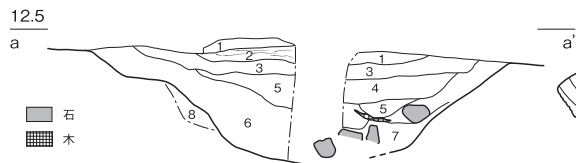
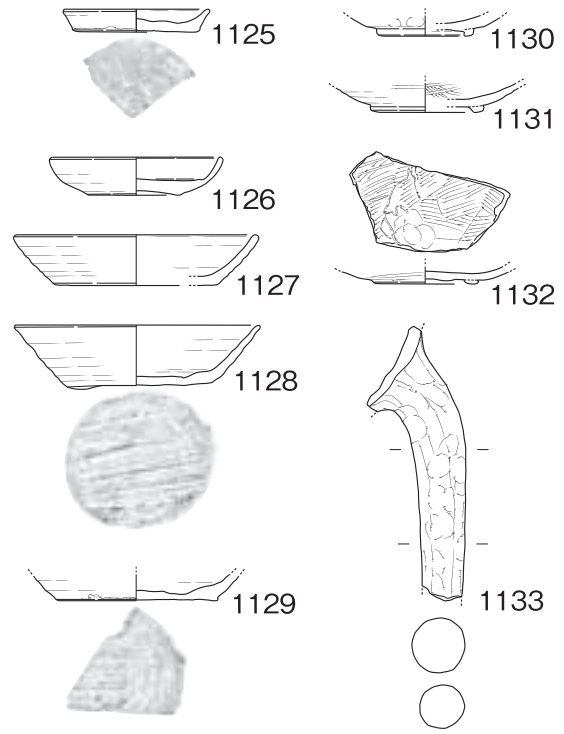
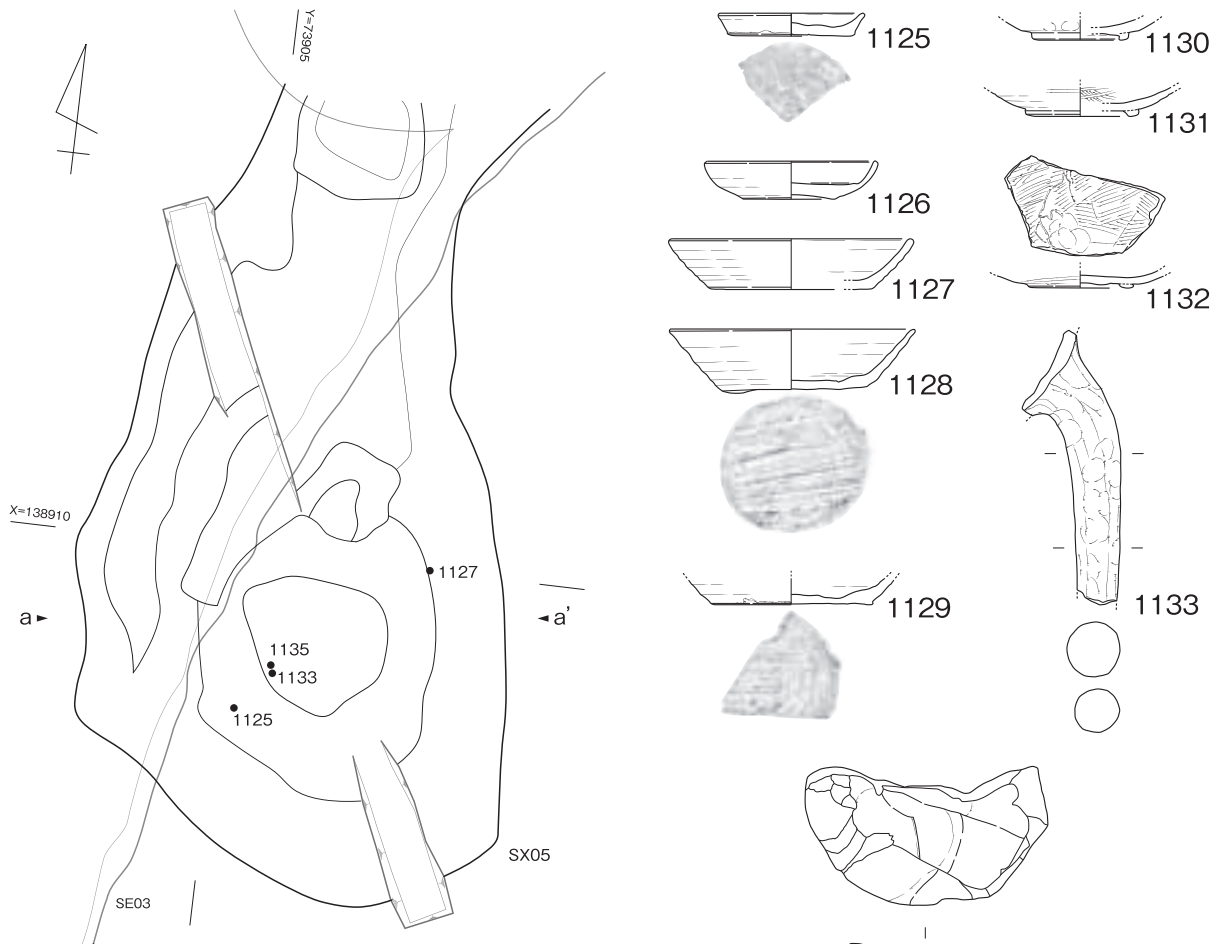
遺物は、図示した以外に、器種不詳の弥生土器や土師質土器皿・杯等の小片が若干量出土している。図示した遺物のうち、**1118**と**1122**が上層、**1123**が下層より出土した。**1116**・**1117**は、土師質土器皿。底部は回転ヘラ切りと見られるが不明瞭。**1118**は和泉型瓦器碗の口縁部、**1119**は同底部片とした。**1118**は焼成があまく、器表面はマメツする。また、**1119**はやや砂粒が目立つことから、土師質土器の可能性もある。判然としないが、内面にミガキ調整を認める。**1120**・**1121**は、東播系須恵器鉢の口縁部小片。**1120**の口縁端部は上方へ、**1121**は上下へ拡張する。**1120**はⅢ-1類、**1121**はⅢ-2類に分類されよう。**1122**は白磁碗の口縁部片。端部を強く折り返して水平に近く開く。大宰府分類碗V-4類である。**1123**は龍泉窯系青磁碗の底部片。内外面無文で、高台内の削りは浅く、高台畳付けと高台内を除いて、灰オリーブ色の釉を施す。大宰府分類碗I-1類である。**1124**は、肥前系染付磁器皿の底部片である。高台端は無釉で、口縁部内面に花文?が描かれる。

出土遺物のうち、確実に近世に位置付けられる資料は、図示した以外の遺物を含め**1124**の1点のみであり、それ以外は12世紀後半～13世紀前半代を中心とした、時期的にまとまった内容を有することから、**1124**は混入の可能性を想定する。出土遺物より本遺構は、13世紀前半代を中心とした時期に位置付けられると考える。

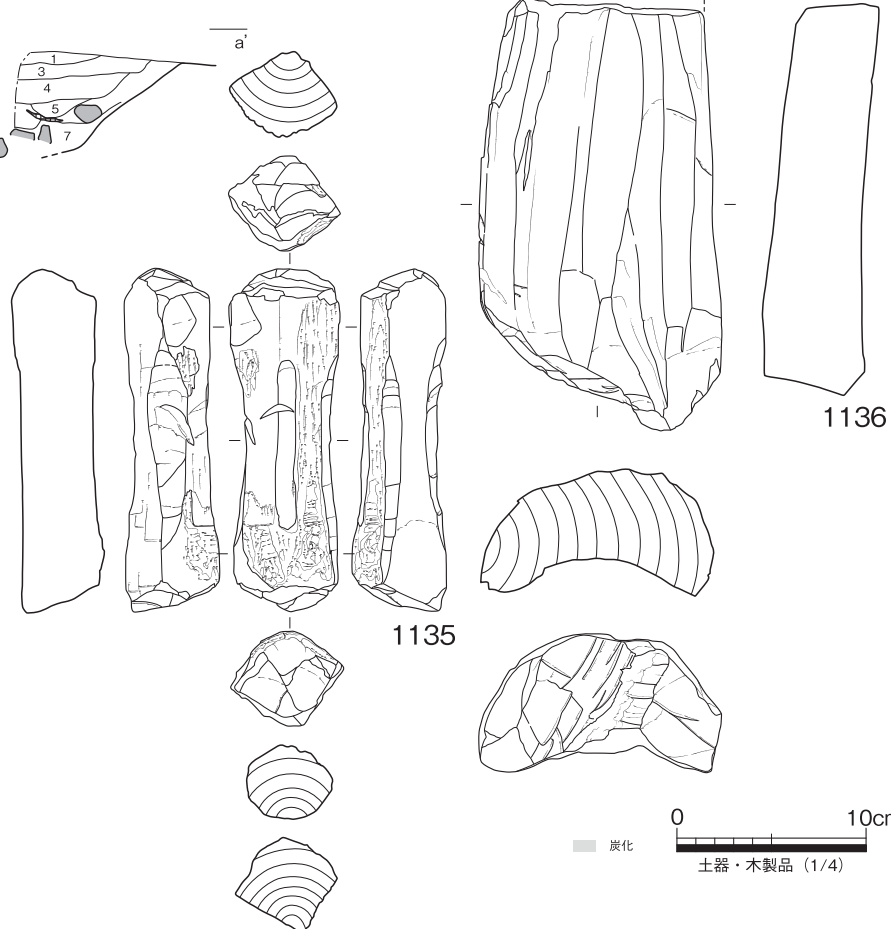
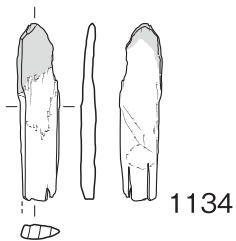
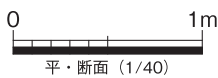
SX05 (第199図)

4区中央付近で検出した土坑状の落ち込みである。遺構の北から西半部はSE03と重複する。遺構の南端に南北2.19m、東西2.27mの歪な隅丸方形状の掘り方を有する土坑が配され、北に幅約1.5mの溝状の遺構が連続する。北端はSE03に切られ、土坑部分を含めた延長約4.26mを確認した。SE03の北側で、本遺構の延長部は検出されていない。

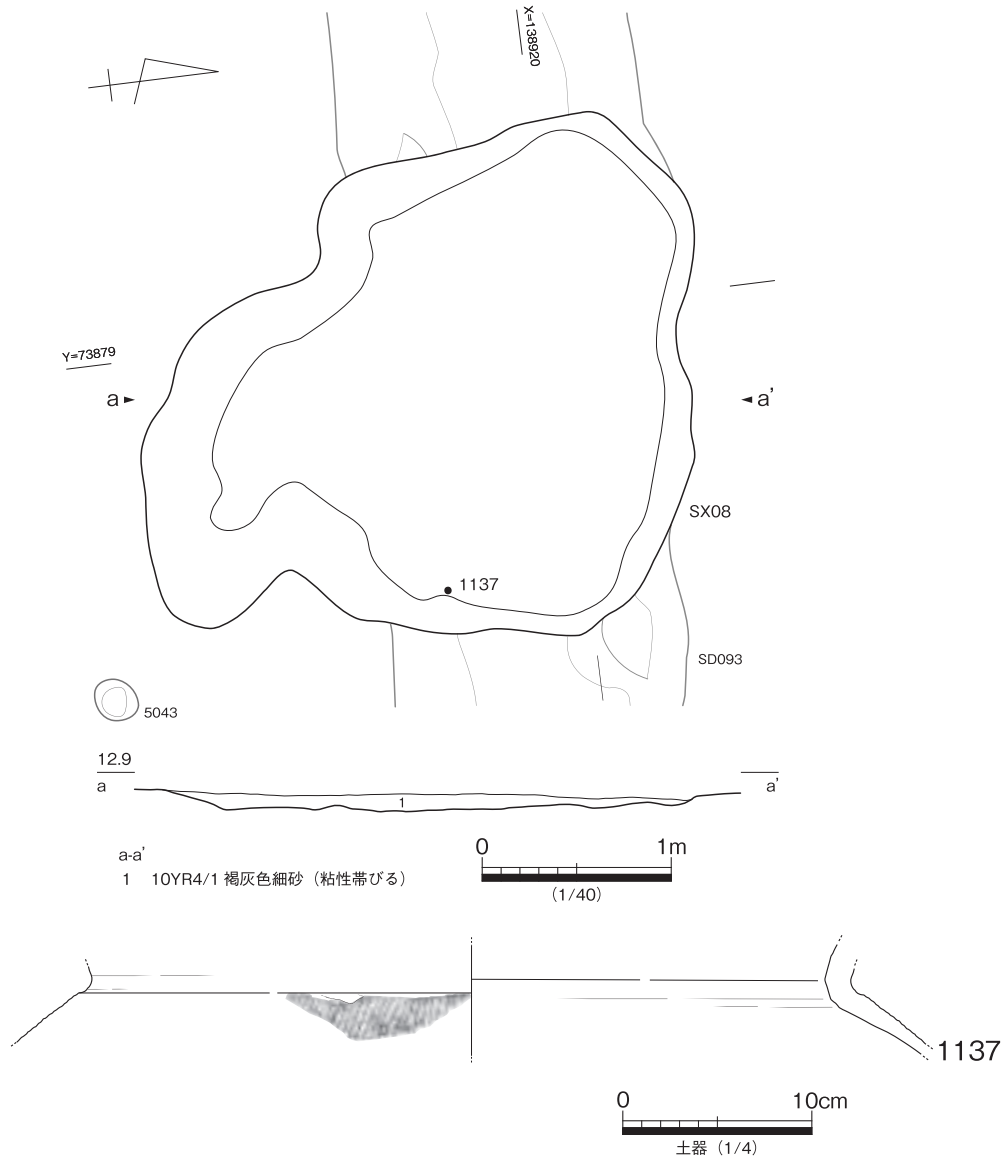
南端の土坑部分は、残存深0.66m、検出面下約0.2mで西辺に幅約0.2mのテラス面が北へ連続して確認され、東西方向の断面形は概ね逆台形状を呈する。北部の溝状部分の残存深は約0.25mであった。土坑部分の最深部の標高は11.65m前後、溝状部分のそれは12.07m前後をそれぞれ測り、高低差は約0.4mであった。掘り方底面が、透水層に達しているかどうかは不明である。しかし、下位3層(5～7層)はグライ化した粗砂層が堆積し、また後述するように木製遺物も出土していることから、遺構下半部が滞水状況下にあった可能性は高いと判断され、素掘りの井戸の可能性も想像される。最下層(7層)の上面付近で、拳大～幼児頭大程度の礫が19点出土した。ほぼ同じ深さでまとまって出土していることから、埋没が一定進行した段階で、一括投棄された可能性が高い。井戸として開削されたとしても、開削後早い段階で放棄され、後述するように多量の遺物が出土していることから、生活残滓の廃棄坑とし



- a-a'
- 1 10YR5/1 褐灰色粘質土 (Mn・Fe 多、硬くしまる)
 - 2 10YR8/4 淺黄褐色細砂
 - 3 10YR4/1 褐灰色粘質粗砂
 - 4 10YR4/1 褐灰色粘質中砂
 - 5 5B6/1 青灰色粘質粗砂
 - 6 5B3/1 暗青灰色粘質粗砂 (8層ベースブロックを含む)
 - 7 5B4/1 暗青灰色粗砂
 - 8 5B6/1 青灰色粘質土 (ベース)



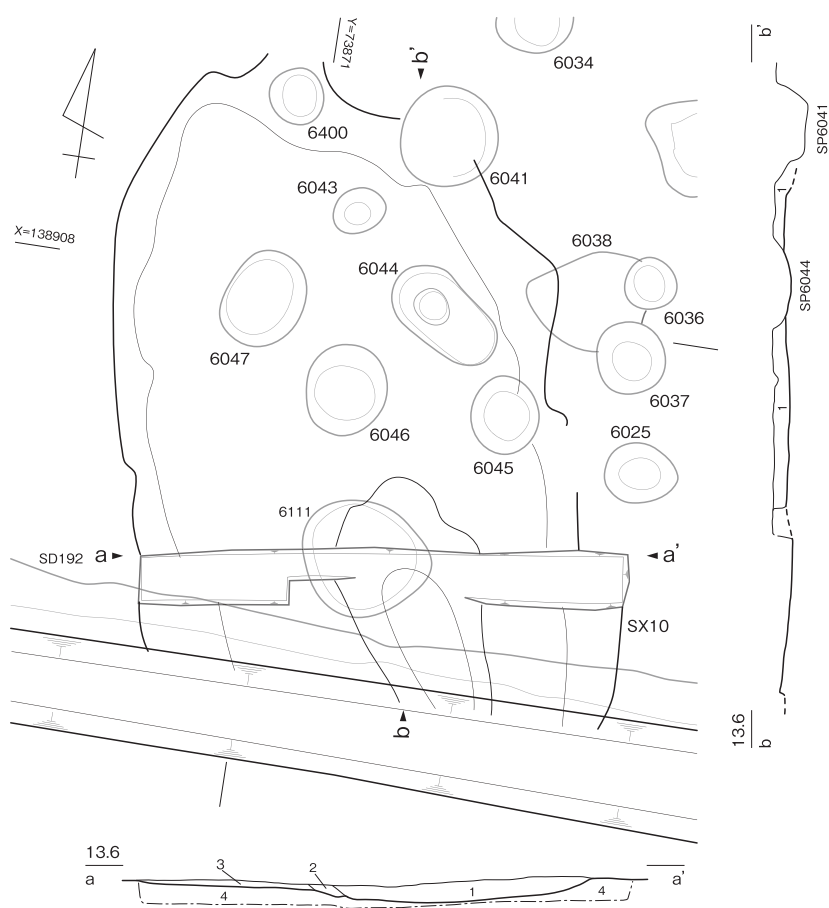
第199図 SX05平・断面・出土遺物実測図



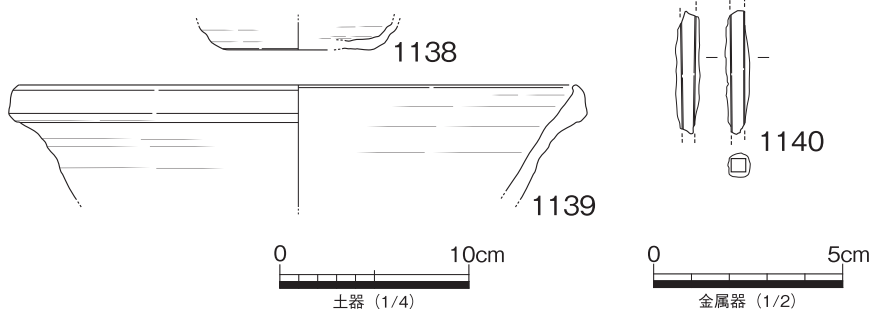
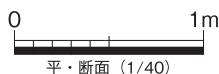
第 200 図 SX08 平・断面・出土遺物実測図

て使用されたと考えられる。上位層（1～3層）は、灰色系～黄色系の細砂、粗砂、粘質土がレンズ状に堆積しており、遺構が放棄された後、徐々に埋没が進行したものと考えられる。

遺物は図示した以外にも、弥生土器壺や器種不詳の須恵器、土師質土器皿・杯・鍋、十瓶山周辺窯産須恵器碗、瓦器碗、白磁等の小片のほか、加工木や自然木等の自然遺物が、コンテナ3箱程度出土している。**1125**は土師質土器皿。底部回転ヘラ切り後ナデを施す。**1126**は白磁皿で小型。口縁部の大半を欠損する以外は完存する。体部中位の屈曲部の内面に沈線状の段を有する。大宰府分類白磁皿Ⅷ-1a類。**1127～1129**は土師質土器杯。底部はいずれもヘラ切りで、**1128・1129**には木目圧痕が見られる。**1127**の口縁部内外面には、広く煤が付着し、灯明皿として使用された可能性がある。**1128**は、口縁部の一部を欠く以外、ほぼ完形で出土した。**1130・1131**は、十瓶山周辺窯産須恵器碗の底部片。小片のため復元値に相違を認めるものの、色調や高台形状は酷似し、同一個体の可能性は高いが、接合しないため別個体として報告する。**1131**の内面見込みにはミガキ調整を認める。**1132**は土師質土器碗の底部片。内面見込みに、モミ圧痕が見られる。**1133**は、土師質土器足釜の脚部片。脚部断面は、最大径3.0cmの楕円形を呈する。体部内面には炭化物が付着し、脚部には使用時の煤が付着する。



- a-a' b-b'
- 1 10YR4/2 灰黄褐色細礫混じり粘質シルト
 - 2 10YR2/1 黒色中砂混じり粘質シルト
 - 3 10YR4/2 灰黄褐色細礫混じり粘質シルト (4層ブロックを多量に含む)
 - 4 10YR4/4 褐色細礫混じり粘質シルト (砂質強い、ベース層)



第201図 SX10 平・断面・出土遺物実測図

1134～1136は木製品。1134は、幅2.25cm、厚さ0.8cmの板材で、図上端は強く炭化している。ヒノキ(第4章第3節参照、以下同)。1135は、幅・厚さ5.0～5.8cm、長さ18.2cmの棒状を呈する木製品。小口面は刃幅3cm程度の小型の工具で細かく調整され、側面は一部樹皮を残しつつ、長軸方向に削られる。形状より、木錘の未成品の可能性を想定する。コナラ属コナラ節。1136は、図下面側が抉れたやや厚みのある板状を呈する加工木で、木口面には刃幅4cm以上のヨキ痕が残る。側面にも不明瞭ながら加工痕を認める。サクラ属。

出土遺物より本遺構は、13世紀前半代を中心とした時期に位置付けられると考える。

SX08 (第200図)

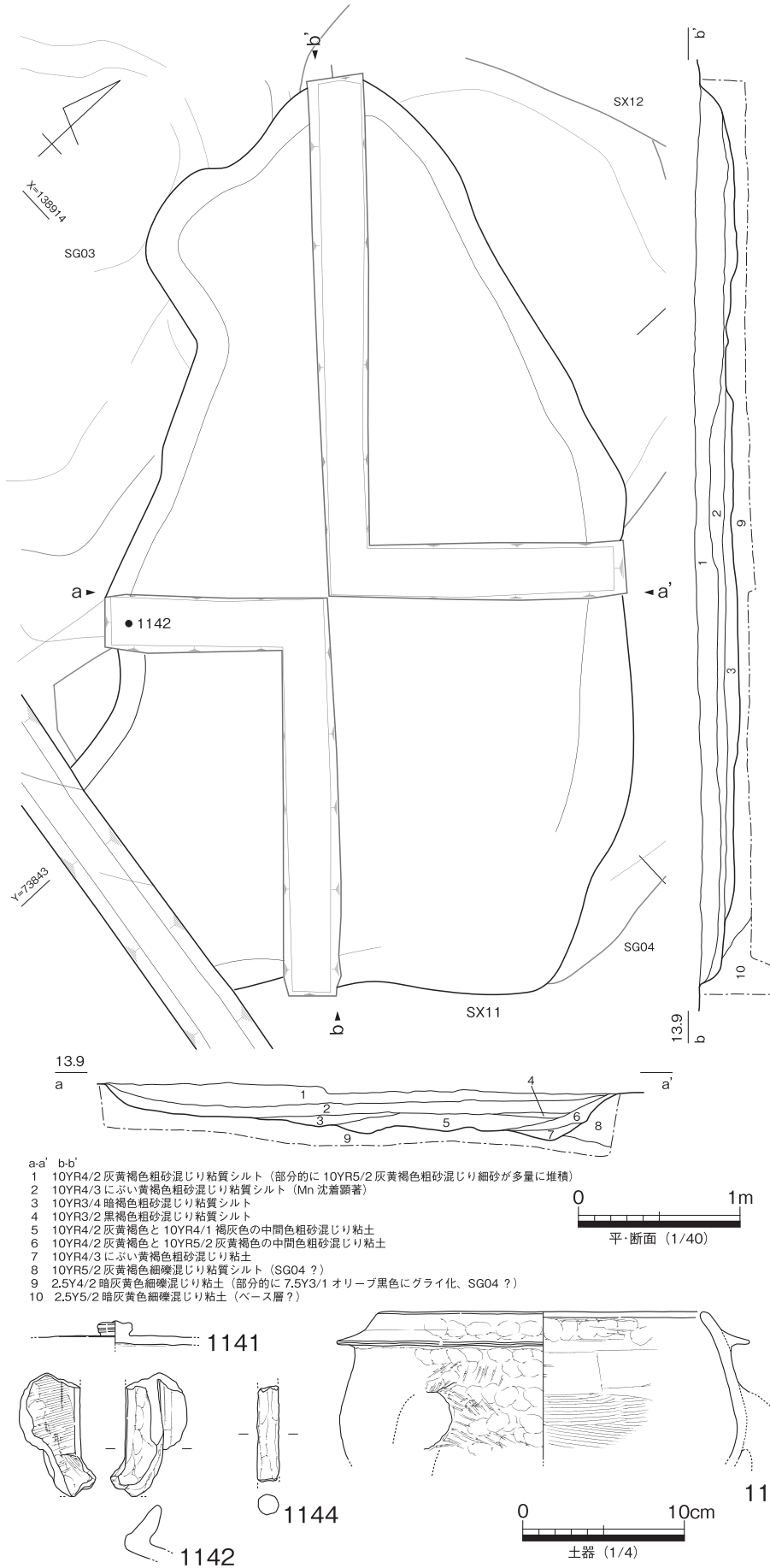
5区中央東半付近で検

出した浅い落ち込みで、SD093より後出する。南北長2.93m前後、東西幅2.71m前後を測り、平面不定形。残存深0.18m前後、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は、褐灰色細砂の単層であった。

遺物は図示した以外に、器種不詳の弥生土器や土師質土器皿、杯等の小片20点程度が出土した。1137は、須恵器甕の体部小片。体部外面に小さな格子タタキを施す。焼成はややあまく、灰黄色を呈する。口縁部形状が不詳なため、詳細な時期を特定できないが、12世紀代を中心とした時期とみておきたい。

SX10 (第201図)

6区1面南東隅周辺で検出した浅い落ち込みである。SD192のほか多数の柱穴が、上面より掘り込



第 202 図 SX11 平・断面・出土遺物実測図

まれる。北端は調査区内で途切れ、南端は調査区外へ延長するため、全形は不明。検出範囲で、南北 3.38 m 以上、東西 2.33 m 以上で、平面形はやや歪な長楕円形状を呈するとみられる。主軸方向 N 24.11° W に配される。残存深 0.12 m、断面形は概ね皿状を呈する。埋土は 3 層に細分され、主に褐色系粘質シルトが横断面で東へ傾斜して堆積していた。最下層にはベース層のブロック土を含むことから、壁面の崩落を伴いながら埋没したことが想像される。

遺物は図示した以外に、器種不詳の須恵器や瓦質土器、土師質土器皿・鍋等の小片が 50 点程度出土した。**1138** は土師質土器杯の底部片。底部は糸切りである。**1139** は、東播系須恵器鉢の口縁部片。端部は上方へ拡張し、端面は玉縁状に丸味を有する。焼成不良で、体部内外面は橙色を呈し、マメツ等のため調整等は不明。Ⅲ-3 類に分類されよう。**1140** は、3 mm 角前後

の鉄釘である。頭部と先端を折損する。

出土遺物より本遺構は、13世紀前半代を中心とした時期に位置付けられると考える。

SX11 (第202図)

6区第1面南西隅付近、SG03・SG04上面で検出した落ち込みである。後述するSX12より後出する。南端部は調査区外へ延長するが、長軸5.61m、短軸3.19m、主軸方向N49.05Wを測り、平面形は概ね北西方向に長い不整形形状を呈するとみられる。残存深は0.3m前後で、底面には若干の起伏を認め、断面形は概ね皿状を呈する。埋土は3～7層に細分され、上位に褐色系シルトが、下位に黄褐色系粘土が概ね水平堆積しており、滞水下で緩やかに自然埋没した可能性が考えられる。後述する遺物の点からも、SG04埋没後の窪地を埋める堆積物であろう。

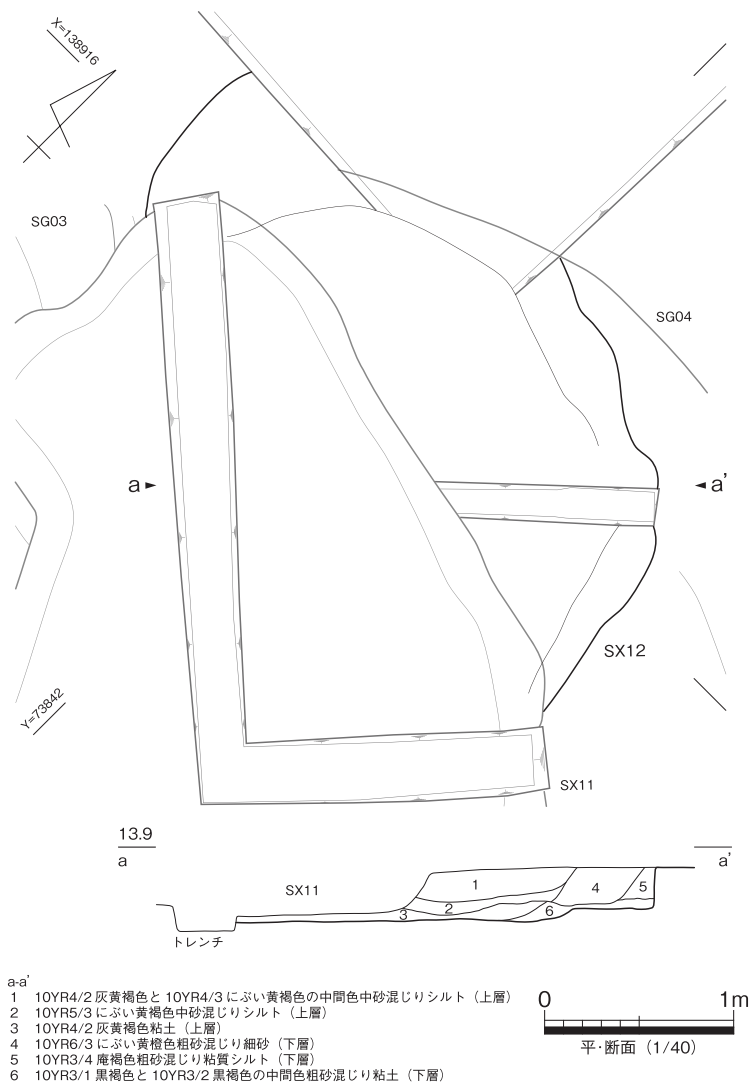
遺物は図示した以外に、弥生土器

甕や土師質土器杯、須恵器等の小片が40点程度出土した。**1141**は須恵器蓋。天井部に宝珠ツマミを付し、周囲に自然釉が残る。SG04出土の**919**と、同一個体の可能性は高いが、接合しないため別個体として掲載する。**1142**は土師器カマドの焚口部の小片である。焚口部外面に高さ2.3cm程度の鏝を貼付する。以上の資料は、SD093からの混入の可能性を考える。**1143**は土師質土器足釜。鏝部は接合法である。体部外面には使用時の煤が付着する。13世紀後半～14世紀前葉に位置付けられ、SG04からの混入資料であろう。**1144**は、形状より土師質焼成の棒状土錘の破片とした。

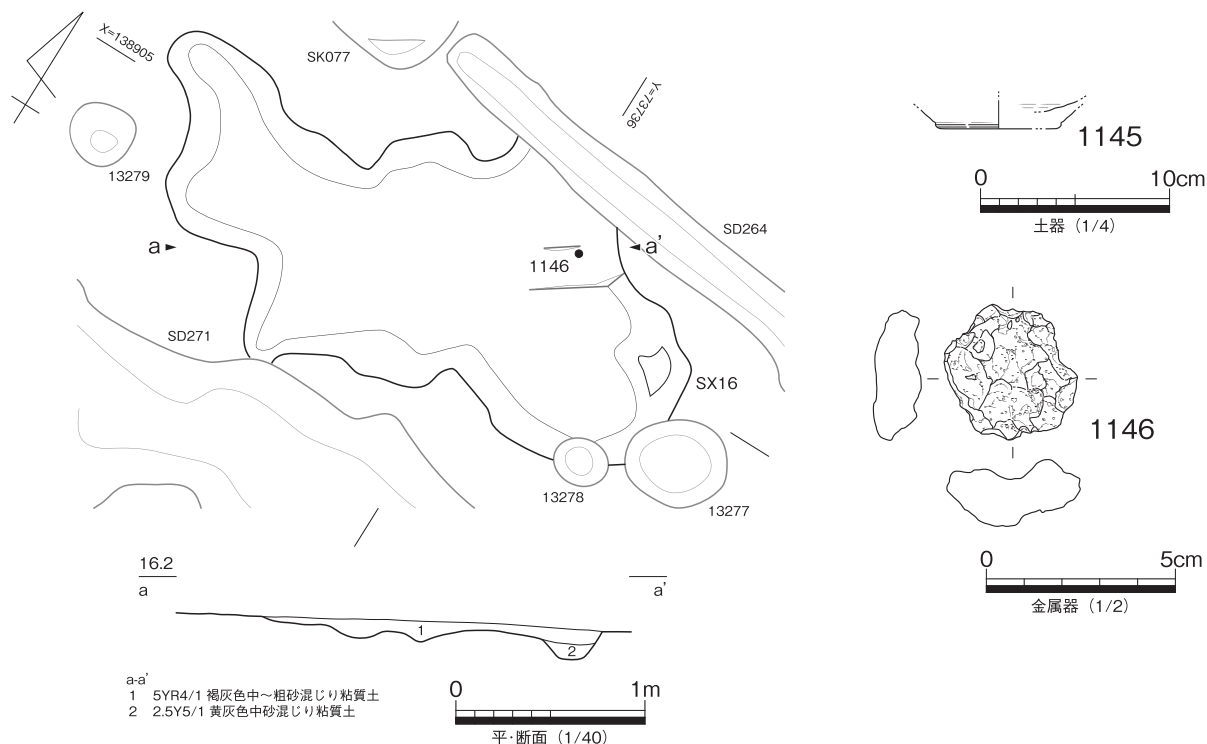
本遺構の時期を直接示す出土資料に乏しいが、SG04より後出することから14世紀代に位置付けられると考える。

SX12 (第203図)

6区1面南西隅付近、SG03・SG04上面で検出した浅い落ち込みである。南半部を上述したSX11に切られ、北部をトレンチにより攪乱を被るため、全形は不詳である。残存部で、東西3.43m、南北1.21m以上を測る。残存深0.3m前後で、断面形は、土層図実測位置で周壁がほぼ直に掘り下げられ、底面は概ね平坦であることから、人為的に掘り込まれた大型土坑の可能性も考えられる。埋土は6層に細分



第203図 SX12平・断面図



第 204 図 SX16 平・断面・出土遺物実測図

されており、大きく 2 層に大別する。下層（4～6 層）堆積後に上面から再掘削され、上層（1～3 層）が水平堆積したとみられる。

遺物は、器種不詳の弥生土器や須恵器、土師質土器等の小片が 30 点程度出土した。図化した遺物はない。出土遺物より本遺構の時期を特定することは困難であり、周辺遺構の重複関係より、14 世紀代を中心とした時期に位置付けられると考える。

上述したように、人為的に掘り込まれた可能性が考えられるものの、遺構の一部を検出したのみで、用途や機能については不明である。

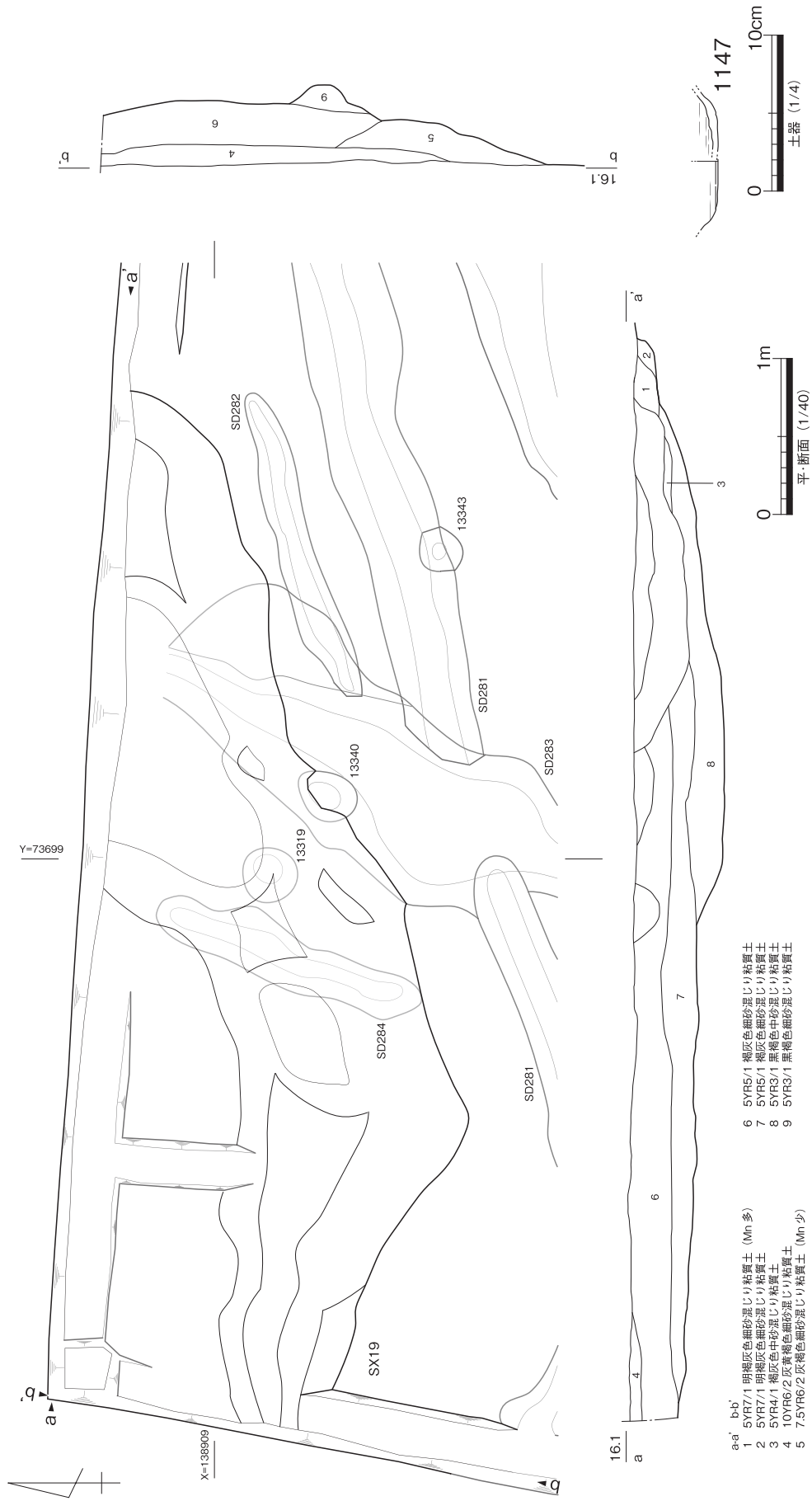
SX16 (第 204 図)

13 区北東部周辺で検出した落ち込みである。遺構北端を SD264、南端を SD271 が、それぞれ上面から掘り込まれている。長軸約 3.3 m、短軸 0.4～2.0 m、主軸方向 N 81.72° W に配された、東西に長い平面不定形を呈する。残存深 0.03～0.10 m、断面形は概ね浅い皿状を呈する。平面形が整った形状を呈さず、遺構底面には起伏が認められることから、上面を大きく削奪された複数の遺構が重複している可能性も考えられる。埋土は褐灰色粘質土が堆積し、断面図東端部に幅 0.25 m、深さ 0.1 m の落ちが記録され、上位層とは異なる黄灰色粘質土が堆積していた。

遺物は図示した以外に、器種不詳の弥生土器や土師質土器杯、白磁等の小片約 20 点出土した。**1145** は土師質土器杯の底部片。内外面マメツ等のため調整等は不明。**1146** は鍛冶滓の小片である。出土遺物は乏しいものの、**1145** より 13 世紀代を中心とした時期に位置付けられると考える。

SX19 (第 205 図)

13 区北西隅周辺で検出された落ち込みである。上面より SD283、SD284 や柱穴等の遺構が掘り込ま



- a-a', b-b'
- 1 5YR7/1 明褐色細砂混じり粘質土 (Mn多)
 - 2 5YR7/1 明褐色細砂混じり粘質土
 - 3 5YR4/1 褐色多砂混じり粘質土
 - 4 0YR6/2 灰褐色細砂混じり粘質土
 - 5 7.5YR6/2 灰褐色細砂混じり粘質土 (Mn少)
 - 6 5YR5/1 褐色細砂混じり粘質土
 - 7 5YR5/1 褐色細砂混じり粘質土
 - 8 5YR3/1 黒褐色中砂混じり粘質土
 - 9 5YR3/1 黒褐色細砂混じり粘質土

第205図 SX19平・断面・出土遺物実測図

れる。掘り方の南側部分を検出したのみで、全形は不明。検出範囲で、南に緩やかに弧を描いて東西に配される。南北長 2.5 m 以上、東西幅約 5.7 m を調査した。残存深 0.55m 前後、断面形は概ね皿状を呈するとみられる。遺構底面の標高値は、西端部で 15.51 m 前後、北端部で 15.44 m 前後をそれぞれ測り、北東方向へ緩やかに傾斜する。

遺物は図示した以外に、弥生土器壺・甕等の小片 150 点以上のほか、土師器カマドや土師質土器皿・杯等の小片が数点出土した。**1147** は土師質土器皿。底部回転ヘラ切り後ナデ調整を施す。出土遺物の大半は、弥生時代後期の土器資料が占めるが、いずれも小片であり混入の可能性を想定する。出土遺物より本遺構は、13 世紀前半代を中心とした時期に位置付けられると考える。

耕作痕(第 206～209 図)

当該期に位置付けられる耕作痕として、1 区と 3・4 区、6 区、9 区、13 区、14 区において鋤溝と考えられる遺構を確認した。このうち 9・13・14 区の遺構は、検出長が短く、まとまった群を構成せず単発的なこと、埋土に関する記録がないこと等から、付図等に平面記録のみ掲載し詳しくは触れず、以下に 1 区と 3・4 区、6 区で検出された鋤溝群について報告する。なお、いずれの調査区においても、鋤溝群に伴う耕土層については記録がなく不明である。

1 区 1 面鋤溝群

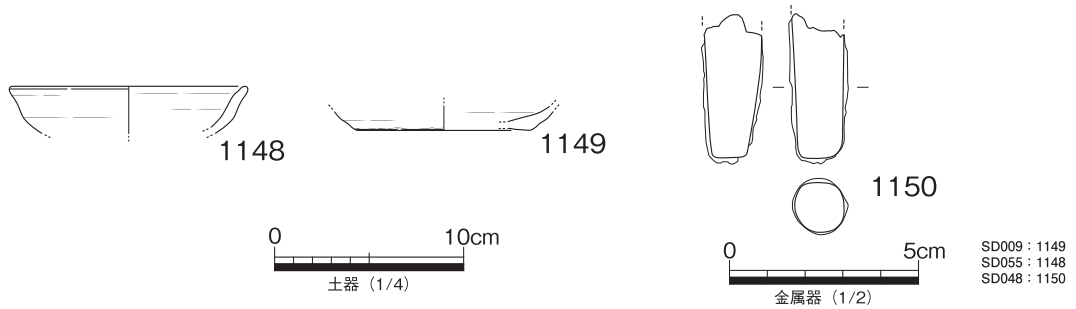
1 区では、調査区北半部を中心に計 45 条の溝を検出した。南北溝を主体に、一部東西溝が確認された。また重複関係より、既述した SD026 や SX01、SX04 等より後出する。溝は、検出面幅 0.14～0.36 m 前後と広狭があり、0.2 m 前後のものが多い。幅広の SD037 等の溝は、2 条の溝が重複している可能性も考えられる。残存深は、0.03～0.06 m 前後といずれも浅く、断面形は皿状を呈する。埋土は、灰色系ないし黄色系の粘質土や細～粗砂の単層で、遺構毎に若干の相違が見られる。

本区の鋤溝群は、溝主軸方向を基準に、いくつかの群としてのまとまりが確認される。まず、調査区北半～南東部を中心に分布する、主軸方向が概ね N 7～15° E の範囲を指向する、SD010 や SD024、SD049 等の一群(A 群)、A 群と分布が一部重複し、調査区北西部から南東部周辺に分布する、主軸方向 N 19～24° E を指向する、SD023 や SD037、SD051 等の一群(B 群)、数は少ないが、主軸方向 N 65° W 前後を指向し、北西部と南東部周辺に分布する、SD047 や SD057 等の東西溝の一群(C 群)である。重複関係より、C 群が最も古く位置付けられ、次いで A 群、最後に B 群となるが、確認される重複位置は、それぞれ 1 箇所のみである点には注意が必要かと思われる。

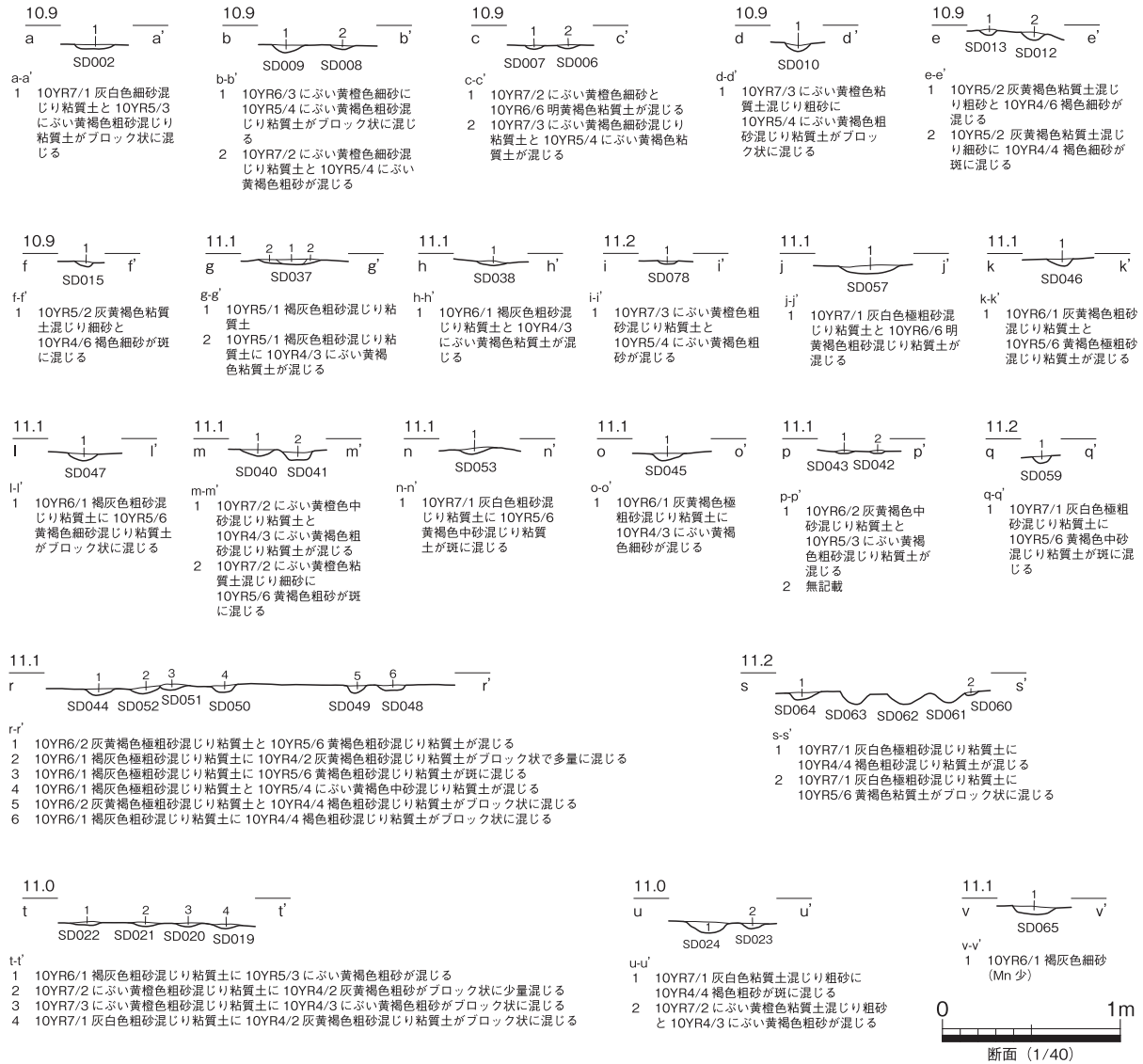
遺物は、器種不詳の弥生土器や須恵器、土師質土器、瓦器碗等の小片が、SD051 や SD065 等の各溝より 1～3 点出土した。そのうち 3 点の遺物を図化した。**1148** は土師器杯の口縁部片。口縁端部内面は、匙面状に窪む。**1149** は土師質土器杯の底部片である。底部はマメツが顕著だが、ヘラ切りの可能性がある。**1150** は中実の最大径 1.6cm の円柱状を呈する鉄製品で、図上端は折損する。用途は不明。出土した遺物より、上述した各群の時期を特定することは困難である。出土遺物は、概ね 12 世紀後葉～13 世紀代に位置付けられると考えられ、1 区屋敷地廃絶後に耕地化された可能性が考えられる。

3・4 区 1 面鋤溝群

3・4 区の 1 面で確認された鋤溝群は、総数 80 条あまりを数える。重複関係より、既述した耕作地

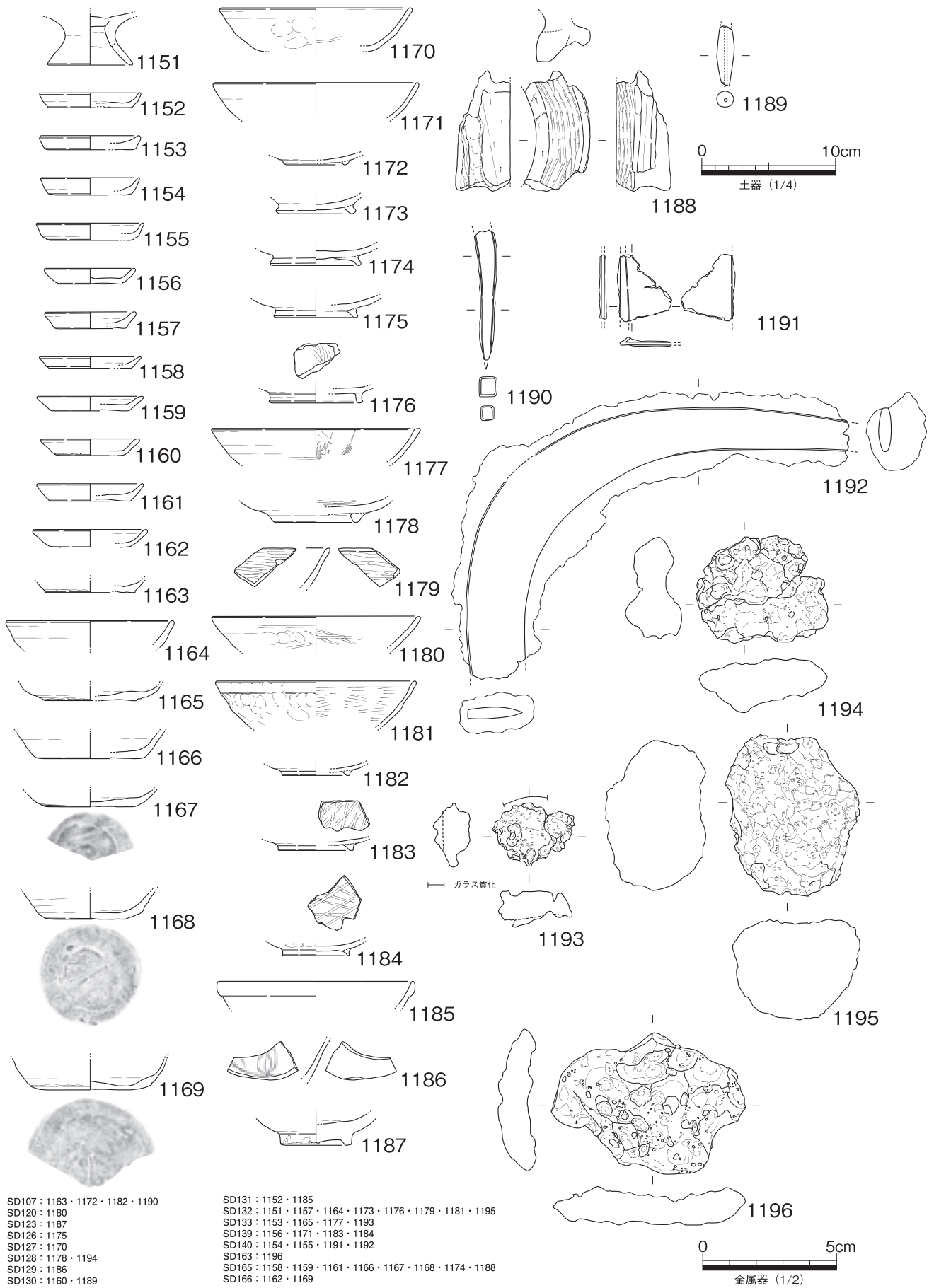


第206図 1区鋤溝群平面・出土遺物実測図



第 207 図 1 区鋤溝群断面図

への給排水路と考えられる SD084 や SD094 等より後出する。溝は、検出面幅 0.15 ~ 0.52 m 前後と幅があり、0.2 ~ 0.3 m が最も多い。残存深は 0.04 ~ 0.15 m 前後と深浅があり、0.06 ~ 0.08 m 前後が多くみられる。埋土は褐色系ないし灰色系細砂の単層で、一部に色調が微妙に異なる細砂と極細砂が水平ないしレンズ状に堆積しているものも見られる。3・4 区の鋤溝群は主軸方向の相違により次のように 5 群に分けられる。まず、3 区東~北西部にかけて分布する主軸方向が概ね N 58 ~ 64° W に配された SD107 や SD128 等の一群 (A 群)、3 区中央から 4 区北東部にかけて分布する主軸方向 N 7 ~ 13° E に配された SD110 や SD116、SD166 等の一群 (B 群)、3 区北東~4 区北東部に分布する主軸方向 N 76 ~ 81° W に配された SD111 や SD129、SD168 等の一群 (C 群)、3 区南端付近に分布する主軸方向 N 52 ~ 61° E に配された SD139 や SD146 等の一群 (D 群)、4 区南西部周辺に分布する N 69 ~ 74° W に配された SD178 や SD180、SD184 等の一群 (E 群) の計 5 群が認められる。これらと若干主軸方向が異なるものも数条認められるが、群として捉えられないことから除外しておく。上述した溝の規模や埋土の特徴と、各群との相関は認められない。溝幅の広いものは、概して残存深の深いものが多く、これらは鋤溝ではなく、耕地内の区画溝であった可能性も考えられる。なお、上述した 5 群は重複関係より、



第209図 3・4区鋤溝群出土遺物実測図

E群はB群より古く位置付けられる可能性があり、B群はA・C群より先行することが確認できる。

3・4区鋤溝群からは、SD107やSD132、SD165を中心に多数の遺物が出土している。45点の遺物を図化した。1151は、土師質土器台付杯もしくは台付皿の脚台部片である。脚端部は丸く仕上げ、面をなさない。1152～1163は同皿である。底部は、マメツ等により不明な1153等を除いて、確認できるものは全てヘラ切りである。1164～1169は同杯。1168は底部が完存する。底部は、マメツの顕著な1166を除いて、すべて回転ヘラ切りで、1169はヘラ切り後板状圧痕が見られる。1170～1175は土師質土器碗。いずれもマメツが顕著で、調整等が不明瞭である。1176は黒色土器B類碗の底部片。内面に直線状のミガキを施す。1177と1178は、十瓶山周辺窯産須恵器碗。1177は口縁部の小片で、内外面回転ナデ後内面に板ナデを施す。1178は底部片で、内面にはミガキ調整が施されているようだが、マメツ等により判然としない。1179～1184は和泉型瓦器碗。1183と1184は同一個体の可能性が高いが、接合しないため別個体として報告する。いずれも内面には、格子状のミガキ調整を施す。1185は白磁碗の口縁部片。大宰府分類碗Ⅳ類。1186は龍泉窯系青磁碗の体部片。内面に片彫りの蓮花文を描く。大宰府分類碗Ⅰ-2類。1187も龍泉窯系青磁碗の底部片。高台畳付けから高台内は露胎。太宰府分類碗Ⅰ-1類であろう。1188は土師器カマドの焚口部の小片。断面矩形の肉厚な鑊を付す。1189は最大径約1.2cmの管状土錘である。

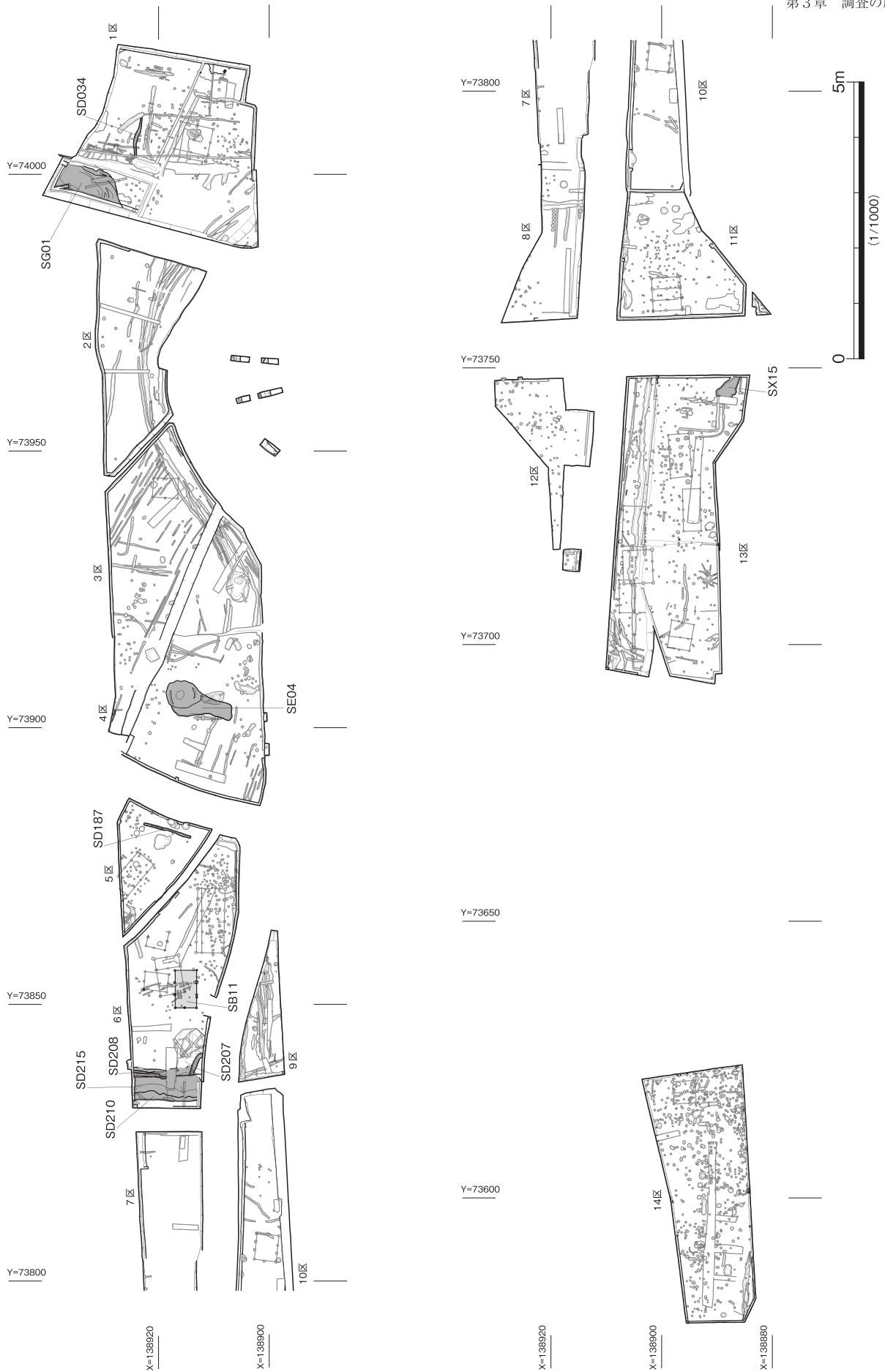
1190～1196は金属器である。1190は7mm角の角釘で、上下端を折損する。1191は、長さ5.0cm以上、幅3.8cm以上、厚さ2～3mmの板状の鉄片で、図左側縁を幅6～8mm折り返している。形状より鋤先の可能性が想定される。1192は不明鉄器片。1193～1196は、鍛冶滓の破片。うち1194について、金属学的分析を実施(第4章第8節参照)した。分析の結果、鍛錬鍛冶滓で鍛冶原料の一部に鑄造鉄器片が使用されていることが明らかとなった。

3・4区鋤溝群より出土した遺物は、1区鋤溝群のそれと大きな時期差は認められず、本調査区周辺も、1区と近接した時期には耕作地として利用されていた可能性が考えられる。

6区1面鋤溝群

6区1面で確認された鋤溝群は、調査区中央部周辺で11条を数える。重複関係より、既述したSB08より後出する。溝は、検出面幅0.10～0.25m前後と幅があり、0.15m前後が多い。残存深は0.02m前後と総じて浅く、断面形は皿状を呈する。埋土に関する記録はなく不明。主軸方向は、N17～19°Eの南北溝の一群と、N83°E前後の東西溝の一群の2群が見られる。南北溝の一群と、東西溝の一群は重複関係にはなく、先後関係は不明である。

遺物は、各溝より器種不詳の土器や須恵器、瓦器、焼締陶器、土師質土器皿等の小片が1～4点出土した。図化した遺物はない。時期を特定する遺物は乏しく、当該期の可能性を想定するにとどめる。



第210図 中世後半遺構配置図

5. 中世後半(第210図)

中世後半の遺構は、掘立柱建物が1棟確認されているが、大半が井戸、溜井、溝などの利水灌漑関係となる。

掘立柱建物

SB11(第211・212図)

6区第1面中央部で検出した掘立柱建物である。図上で建物を復元した。SD6010等の鋤溝と重複するが、建物柱穴と切り合い関係はなく、先後関係は不詳である。梁間2間(3.87m)、桁行3間(6.78m)、床面積約26.24㎡、主軸方向N 89.73°Wとほぼ正方位に配された東西棟の側柱建物を復元する。梁間東列中央穴を欠く。柱通りは概ね揃っている。柱穴は、長径0.30～0.54mの略円ないし不整楕円形を呈し、底面の標高13.25～13.52m、残存深0.25～0.43mを測る。桁行南列のSP6200とSP6118、SP6116が浅い以外は、底面の標高13.3m前後で概ね揃っている。SP6167とSP6124、SP6118において径0.15m前後の柱痕を確認し、SP6109より柱材が出土した。なお、根石や詰石は出土していない。

遺物は、SP6128とSP6200、SP6118、SP6364を除いた各柱穴より、土師質土器皿・杯、器種不詳の備前焼等の小片が各々1～7点出土した。**1197**は、SP6109より出土したマツ属複雑管束亜属(第4章第3節参照)の芯持の柱材である。側面はチョウナで多角形状に仕上げ、底面には刃幅6cm以上のヨキ痕を認める。本柱材については放射性炭素年代測定(第4章第7節参照)を実施し、15世紀前葉～15世紀中葉を前後する年代値が得られた。

出土した土器資料はいずれも小片であり、詳細な時期を特定することは困難であった。したがって柱材の放射性炭素年代測定の年代値より、本建物は15世紀中葉を中心とした時期に位置付けられると考える。

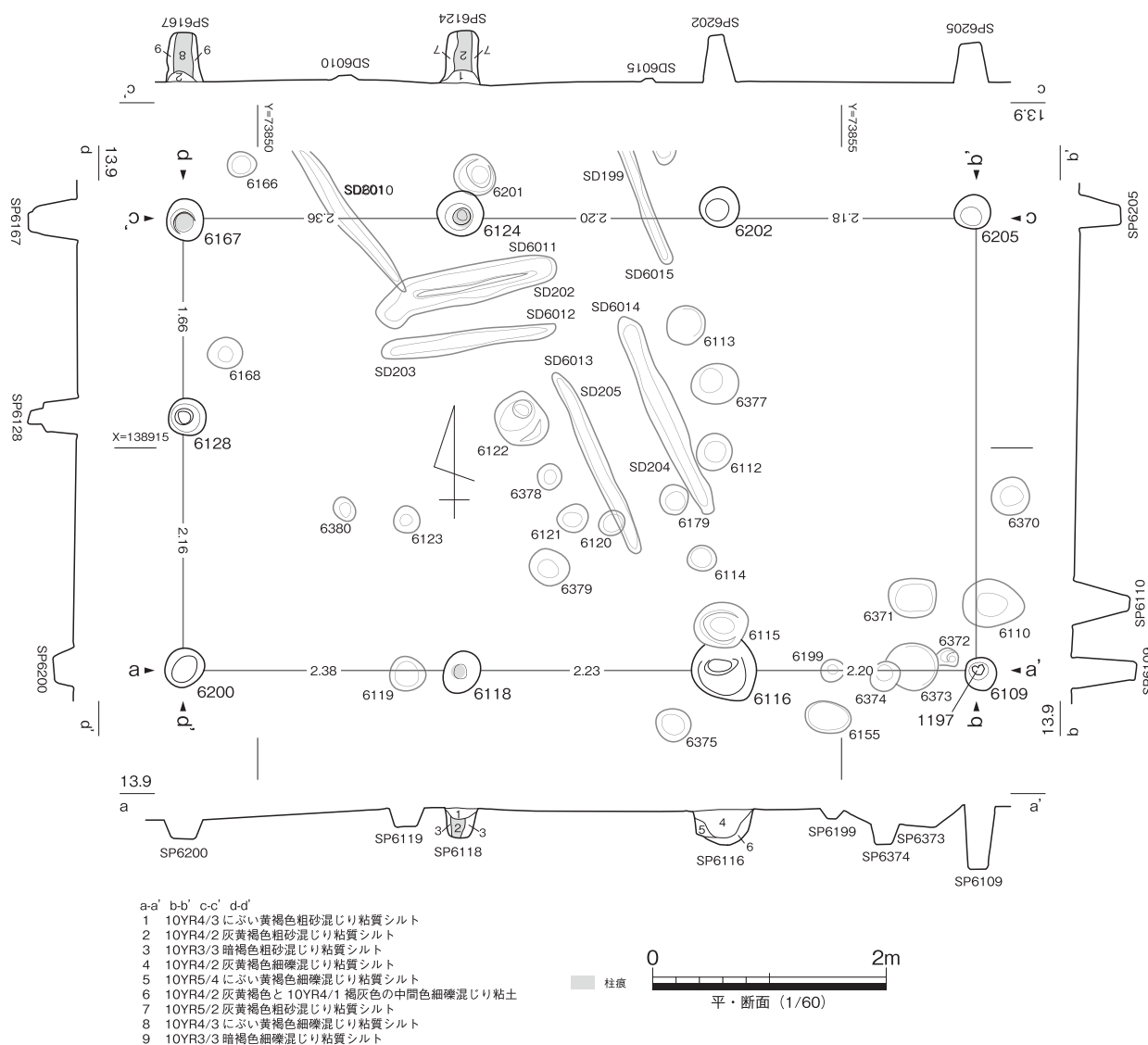
柱穴(第213図)

第201図に、建物を構成しない柱穴より出土した遺物を掲載した。**1198**は古瀬戸灰釉皿の口縁部片である。2次の被熱により、釉は変色し一部剥落している。**1199・1200**は土師質土器皿で、口径8～9cmの小皿である。**1201**は同杯。口縁部の一部を折損する以外は、完形で出土した。人為的に柱穴内に納入した可能性がある。底部は回転ヘラ切り後、ナデ調整を施す。**1202**は、同足釜。体部外面には使用時の煤が付着する。胎土や色調は、**1201**の杯に酷似する。**1203**は、芯持の柱材である。樹種はマツ属複雑管束亜属(第4章第3節参照)。図左の側面片は多角形状にチョウナで仕上げ、裏片面は未加工。底面はノコギリで斜めに切断している。底面にノコギリを使用していることから当該期の柱材の可能性を想定するが、土器資料は共伴していないため、年代的な位置付けの根拠は乏しい。

井戸

SE04(第214・215図)

4区中央部で検出した、素掘りの井戸として報告する。透水層との関係は不詳であるが、後述する埋土の様相から井戸の可能性を想定する。SX05やSD093、SD176より後出し、SD174より先行する。南北6.33m、東西4.87mの平面不整楕円形状の井戸掘り方の南西側に、南北11.14m、東西2.87mの平面不整隅丸長方形のテラス面を備える。井戸部の残存深1.63m、断面形は碗底状を呈する。テラス面



第211図 SB11 平・断面・出土遺物実測図

の残存深は0.1～0.3m前後で、北半部は井戸掘り方へ向けて、底面が緩やかに傾斜する。断面形は、概ね浅い皿状を呈する。

埋土は、7層に細分され、上～下層の3層に大別する。下層（第205図6～8層）は井戸機能時の自然堆積層とみられ、主に灰色系粗砂や粘土がレンズ状に堆積する。中層（同図3～5層）は、下層を掘り込んで堆積しており、改修後の堆積層の可能性もある。いずれもブロック土を多量に含むことから、人為的な埋戻し土の可能性が考えられる。上層（同図1層）は、埋戻しの終了した遺構上面の窪地に自然した堆積物と考える。上述した埋土の堆積状況より、改修の可能性は想定されるが、井戸枠等の痕跡は認められず、比較的短期間で廃絶した可能性を想定する。

遺物は図示した以外に、器種不詳の弥生土器や須恵器、土師質土器片口鉢や足釜等の小片が、コンテナ4分の1箱程度出土した。いずれも出土層位等に関する記録はない。1204は須恵器杯、1205は同皿である。1205は焼成不良で、器表面マメツが見られる。いずれも9世紀代に位置付けられ、重複するSD093からの混入資料と考える。1206は土師質土器皿、1207～1209は同杯、1210は同碗である。1209は糸切り底で、1207も糸切りの可能性がある。1208はヘラ切り後板状圧痕が見られる。1211

～1214は、綾川町十瓶山周辺窯産の須恵器碗。体部内外面には回転ミガキを施す個体が多い。

1215は和泉型瓦器碗の底部片。マメツが顕著で、調整等は不明瞭。1216・

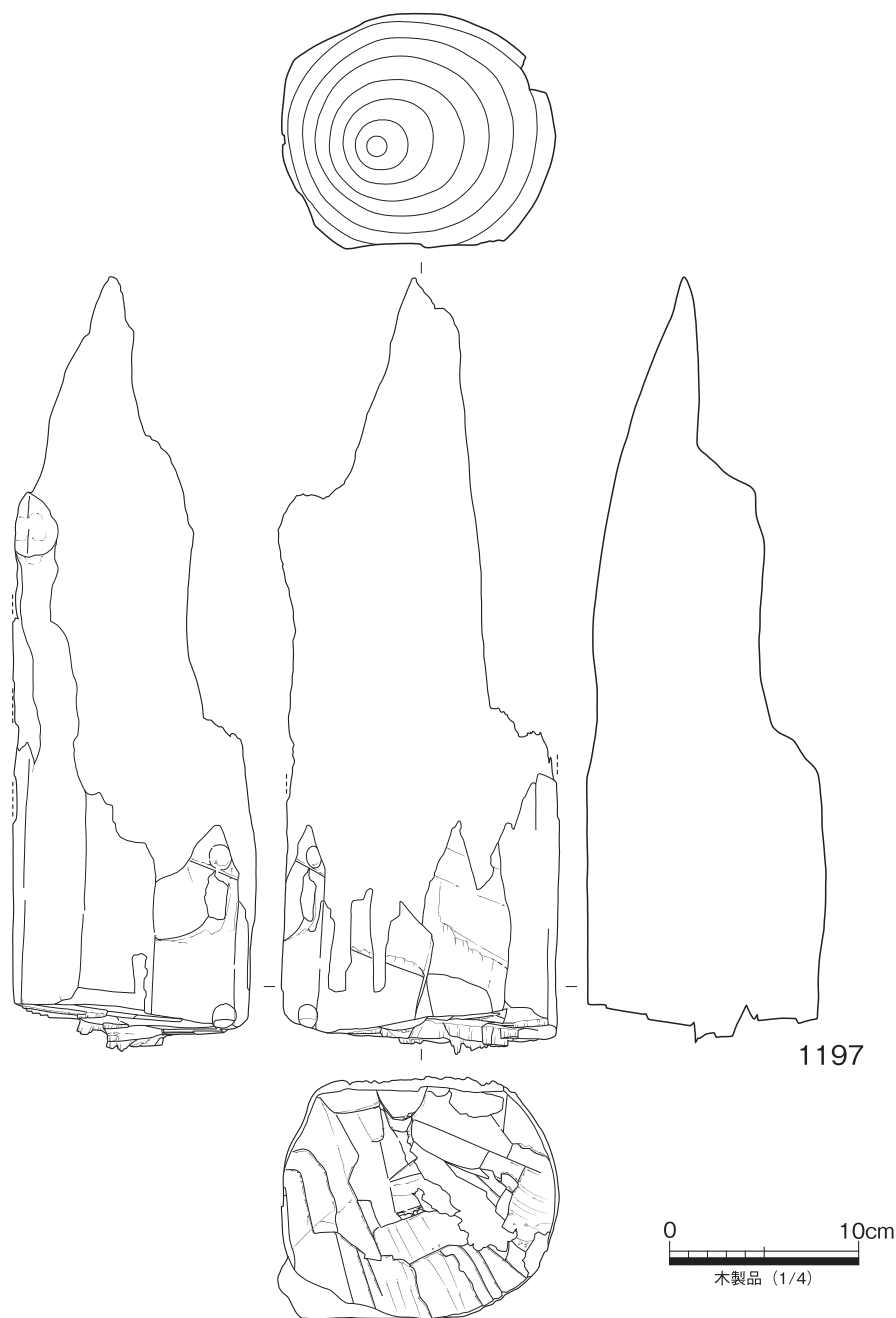
1217は白磁碗。1216は口縁部の小片で、強く折り返して開き、端部は尖る。大宰府分類椀Ⅴ-4ないしⅧ-1・3類。1217は底部の破片で、外面体部下半から高台にかけて無釉、内面見込みには浅い段が見られる。同椀Ⅳ類に分類されよう。

1218は青磁碗の口縁部片で、小さく外反して開く。釉は灰オリーブ色を呈し、内外無文。1219も青磁碗の小片で、体部外面に鎬蓮弁文を描く。

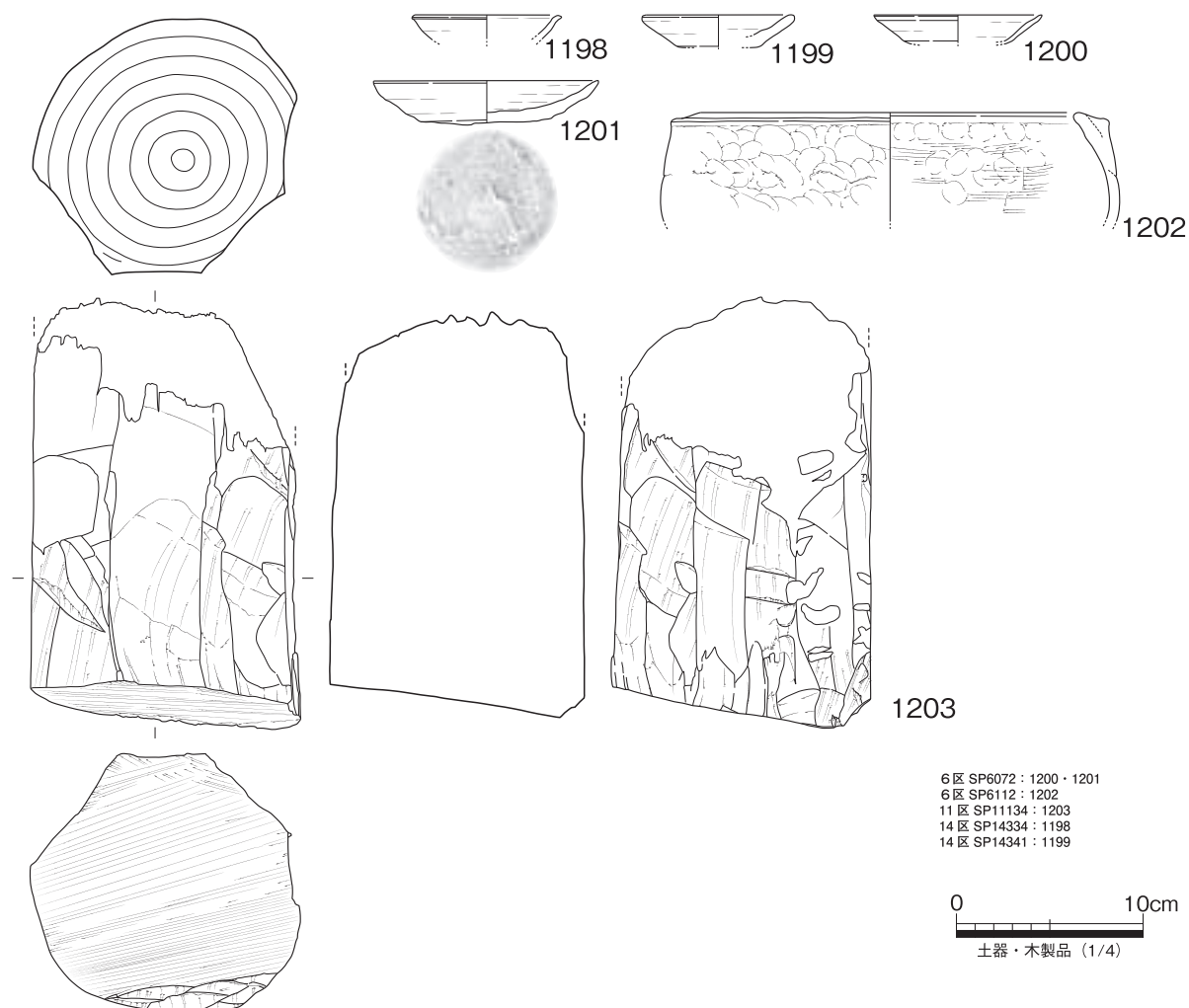
同分類龍泉窯系椀Ⅱ-b類である。1220は、瀬戸・美濃系陶器天目碗である。大窯編年(藤澤1987・1993)の第3段階を中心とした時期に位置

付けられる。1221は、瓦質土器甕の口縁部小片として図示した。やや強く外反して開き、端部は矩形におさめる。1222は東播系須恵器鉢の口縁部片。口縁端部は丸みを帯び、明確な端面をなさない。Ⅲ-1類か。1223は土師質土器鍋の口縁部片。外面には使用時の煤が付着する、1224は、径約1.3cmの土師質焼成の棒状土錘である。

1225～1228は木製品である。1225は、幅4cm以上、厚さ0.8cmの板材である。破断面を含め被熱により炭化する。樹種はツガ属(第4章第3節参照、以下同じ)。1226は、長さ25cm、幅2.9cm以上、厚さ0.2cmの薄い板材で、内外面炭化し、大きく歪む。図上下端は角を斜めに削られて平面台形状を呈し、左図左端中央付近に径2mmの紐孔を穿つ。形状より角切折敷の底板の可能性もある。樹種はツガ属。1227は、長さ25.6cm、幅9cm以上、厚さ0.4cmの板材で、左図の右辺上下端付近に、各々径2mm程度の



第212図 SB12出土遺物実測図



第 213 図 柱穴出土遺物実測図

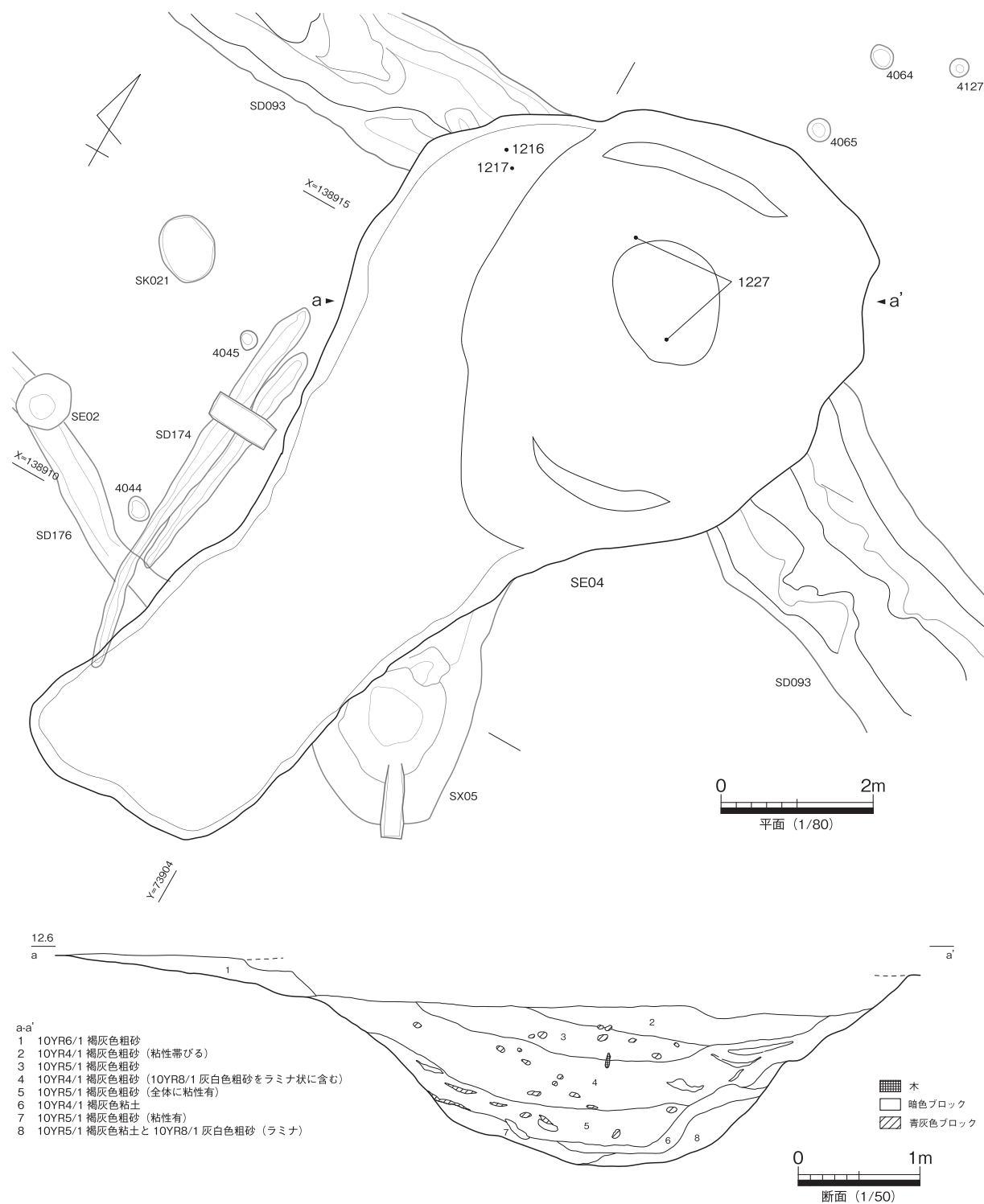
紐孔を2孔穿つ。折敷の底板か。樹種はツガ属。**1228**は、長さ10.8cm以上、幅3.9cm、厚さ2.4cmの板状の芯持材。図左正面図の上端より8mm程下に、深さ2mmの浅い段を認める。その下1.5cm程の位置にも、平行する圧痕が見られる。用途不明。本資料も破断面を含め炭化している。樹種はヒノキである。

出土遺物は時期幅が認められ、出土資料の大半を占める中世12～13世紀の資料は、SX007等からの混入の可能性を考えたい。出土状況に不明な点があるものの、**1220**より16世紀第3四半期を中心とした時期を想定する。

溜井

SG01 (第216～225図)

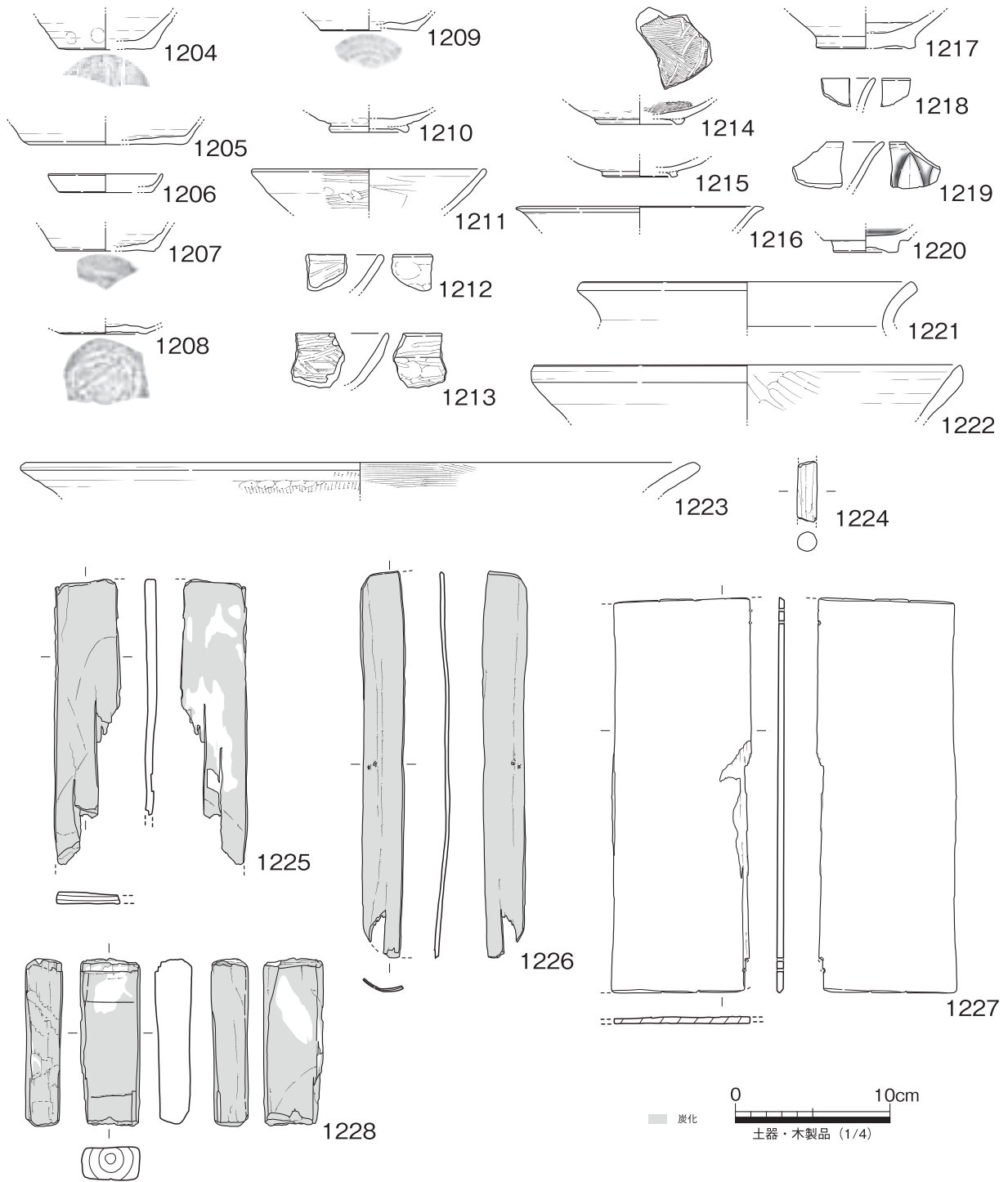
1区北西隅で検出した、溜井もしくは溜池の可能性のある遺構である。SX03、SR01と重複し、切り合い関係より後出する。遺構掘り方の南東部を検出したのみで、全形は不詳である。検出範囲で、南北13.38m以上、東西5.46m以上を測る。調査時には、自然河川の可能性を想定していたが、遺構が完新世段丘面上にあり、時期的に当該期の自然河川が流下する可能性が低い点、透水層である灰色粗砂層(第205図下71層)を掘り込んでいること、後述するように植物遺体のなかに湖沼や溜池などの止水域に生息するヒシ属が多く出土している(第4章第4節参照)ことから、溜井もしくは溜池の可能性を想定



第 214 図 SE04 平・断面図

する。

遺構南端で木杭や石礫で構築された護岸施設を検出した。護岸施設は、N 84.5° W とほぼ正方位の方向に横木 3 本を並べ、その周囲に木杭 4 本と長軸 15 ~ 35cm の石礫を配していた。横木は、長さ 1.1 ~ 1.3 m の木杭 2 本を南に並べ、北側に長さ 1.3 m の枝を払った自然木を配したもので、総長約 1.9 m であった。木杭は、東西両端付近に各々 2 本が、横木の北側に先端を南に傾斜して打設されていた。また西側



第215図 SE04 出土遺物実測図

の木杭の位置より、さらに西に横木が存在した可能性が考えられる。横木の検出レベルは10.7 m前後で、これは後述するVI層上面に相当し、遺構が一定程度埋没した後に、設置されたと考えられる。なお、横木のうち上述した自然木の樹種はヤナギで、4本の木杭のうち図化に至らなかった1点はマツ属複雑管束亜属であった（第4章第3節参照）。

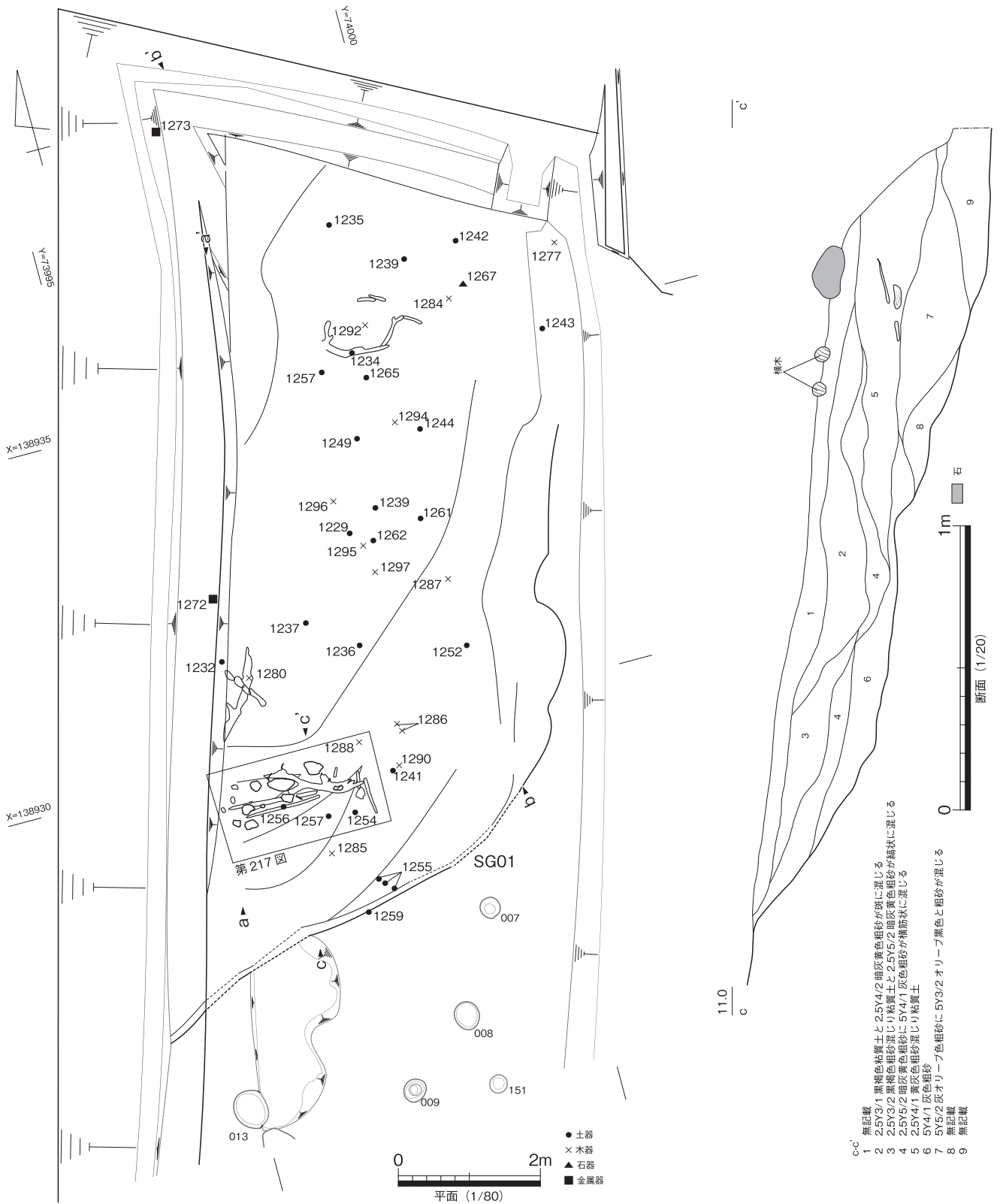
SG01の断面形は、検出面より1.1～1.2 mまでは緩やかに掘り込まれ、南東部を中心に幅2～3 mのテラス面が付設され、1.2 m以下はやや傾斜をもって掘り込まれている。緩斜面状を呈する部分は、雨

水等により壁面に露出したSR01等の堆積物である砂が浸食され、結果生じた可能性が想定され、上述したように、埋没が一定程度進捗した段階で遺構南端付近に護岸施設が設置されている点も、その傍証と考えられる。検出面下1.6mまで掘り下げたが、底面までは調査が及んでいない。

埋土は74層以上に細分され、6層に大別する。Ⅰ層(第205図下1～6層)は、遺構埋没後の窪地を埋める堆積層で、黄色ないし褐色系粘質土がブロック状に混じる。本層出土の遺物に、燻し焼成の平瓦片があり、本層の堆積時期は近世以降に位置付けられ、埋没後の耕地化に伴う整地層の可能性が考えられる。Ⅱ層(同図7～15層)は、粘質土と細～粗砂がラミナ状に斜面堆積しており、壁面の浸食による再堆積物と考えられる。遺構廃絶後に一定期間放置された可能性が考えられる。Ⅲ層(同図16～23層)は、植物遺体を含む黒褐色の泥炭層を主体とする堆積物で、滞水下の低湿地状を呈していたと考えられる。Ⅳ層(同図24～30層)もⅢ層に近似した堆積層で、埋没が進展しつつも、水源としての機能は維持されていた可能性が考えられる。Ⅴ層(同図31～35層)は、主に遺構北半部に斜面堆積しており、壁面の浸食に伴う再堆積物と考えられる。Ⅵ層(同図36～49層)は、遺構下半のテラス面以下に細～粗砂のラミナ堆積を主体とする堆積物で、遺構機能時の堆積物と考える。Ⅶ層(同図50～70層)もⅥ層と同様に、主に砂のラミナ堆積物がレンズ状ないし水平堆積しており、穏やかな環境下で埋没が進行したことが想像される。

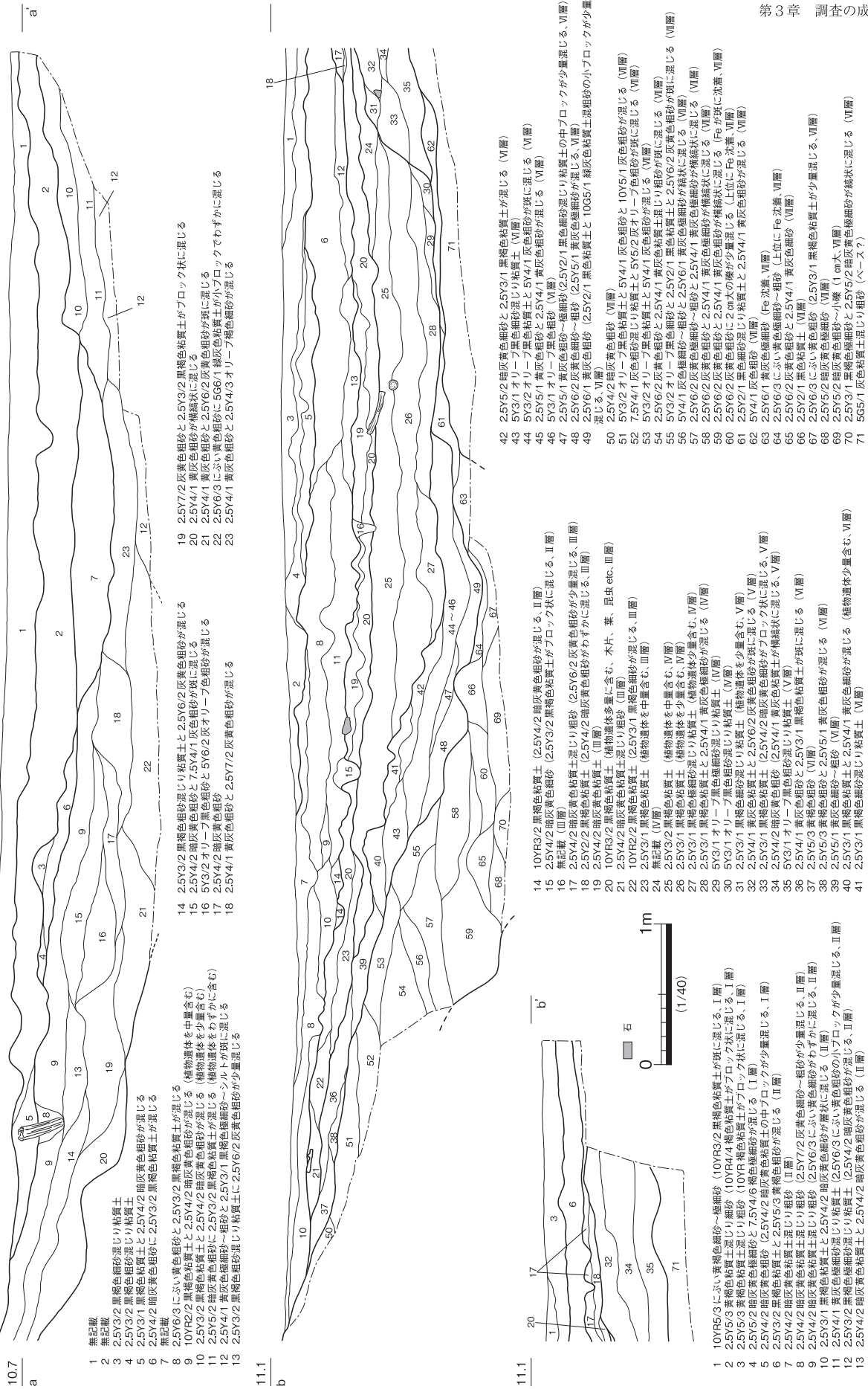
遺物は図示した以外に、コンテナ2箱程度の土師質土器を中心とする土器片が出土している。図示した遺物のうち、1233・1239・1242・1248・1250・1252・1254・1260・1268・1272・1273はⅠ層、1230・1231・1237・1240・1243・1246・1247・1249・1262～1264はⅡ層、1232・1241・1245・1253はⅢ層、1229・1234～1236・1244・1257・1261・1265・1267・1270はⅣ層、1238・1251・1255・1256・1258・1271はⅥ層よりそれぞれ出土した。

1229は須恵器高杯の脚部片。器表面はローリングを受けており、調整等は不明瞭である。1230は須恵器杯の底部片。以上の2点は、混入資料である。1231・1232は土師質土器皿。1231は器表面がマメツしており、調整等は不明。1232は口縁部の一部を欠損する以外は、ほぼ完形。底部は回転ヘラ切りである。1233～1237は同杯。1235と1236はほぼ完形で出土した。1236は、口縁部内面が玉縁状に肥厚し、直下が沈線状に窪む。本地域では類例に乏しく、搬入品の可能性がある。底部を欠損する1233を除いて、全てヘラ切りである。1235は、外面に煤が厚く付着し、内面にも何かを煮沸した痕跡が残る。特殊な用途に使用された可能性がある。その他1234や1237にも、2次的な被熱によるとみられる変色が見られる。1238は和泉型瓦器碗の口縁部片である。1239は口縁部が外反して開く白磁皿E群(森田1982)である。1240は白磁皿の底部片で、見込みに矩形の目跡が3個残る。D群(同)に分類される。1241は白磁碗で、体部外面下端は露胎、内面見込みに沈線状の段を伴う。C群(同)であろう。1242は龍泉窯系青磁碗で、内面見込みに浅い沈線を施す。高台外面まで施釉され、高台端部の釉は掻き取る。大宰府分類碗I類か。1243は青磁碗。口縁部に雷文帯を有する碗で、全面施釉後外底の釉を輪状に掻き取る。内面に印花文がスタンプされるが、2次的な被熱により釉が再溶し、不鮮明となっている。1244～1254は土師質土器足釜もしくは把手付鍋である。口縁部外面に粘土を貼付して、痕跡化した鏝部を成形する。ほぼ全て体部外面には使用時の煤の付着や被熱による変色が見られる。1255は同足釜の脚部片。1256・1257は同把手付鍋の把手部分を中心とした破片。鏝部に粘土を貼付して、矩形の把手を2対付し、把手中央付近の口縁部をやや拡張して径1.6cmの紐孔を穿つ。1258～1261は同鍋。口縁部形態が他の3点と大きく相違する1258は、上述した和泉型瓦器碗や後述する東播系須恵

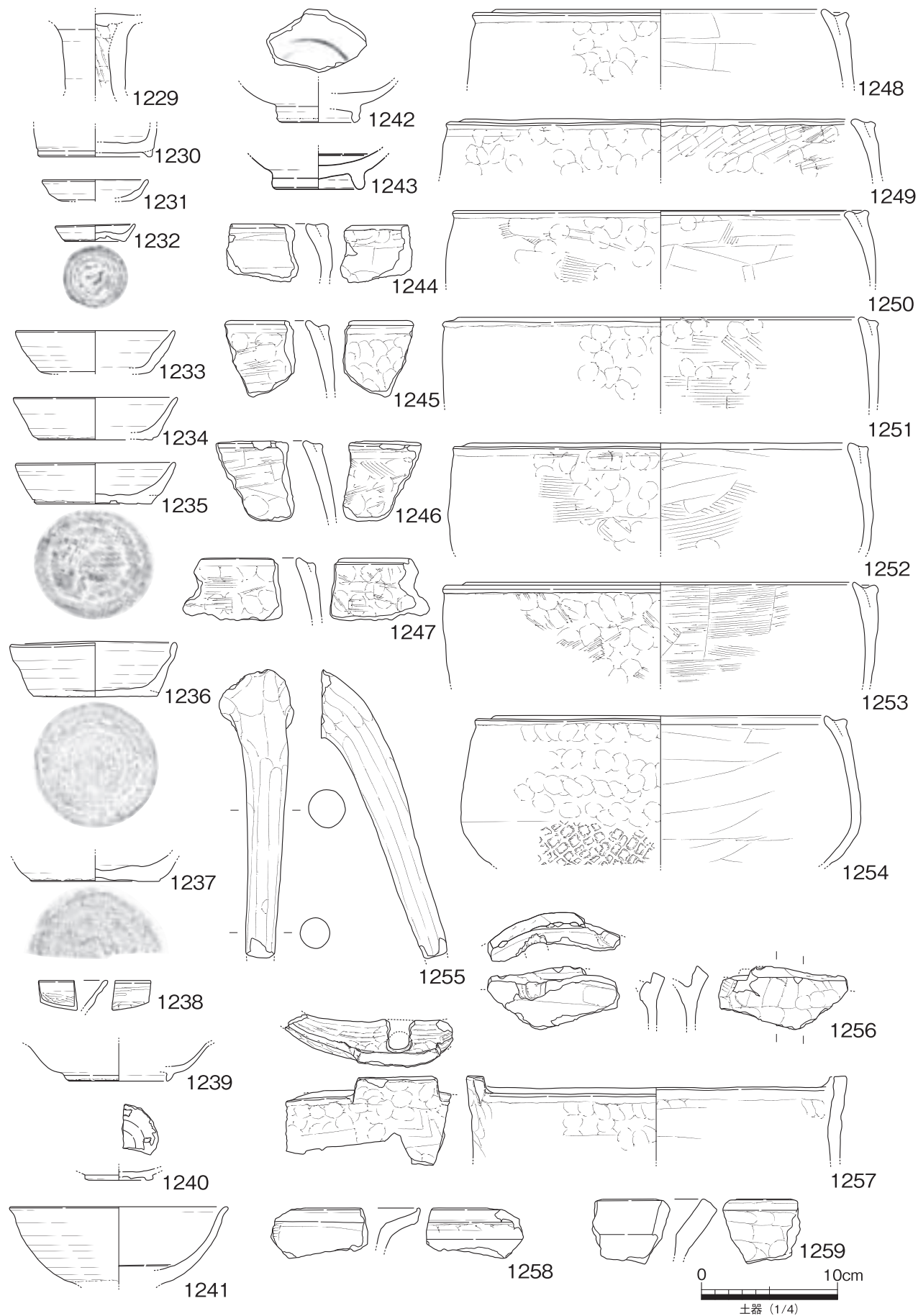


第216図 SG01 平・断面図

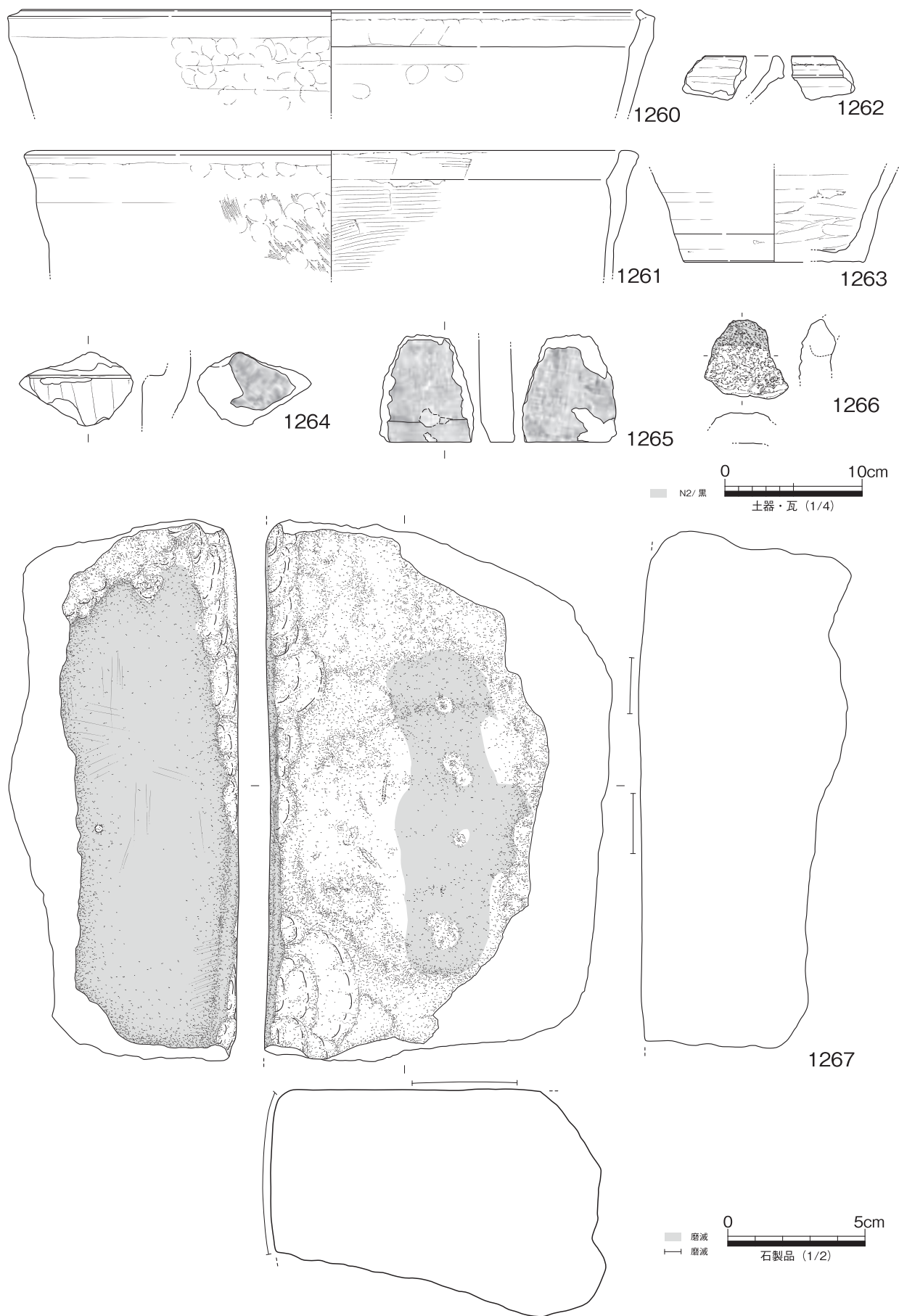
器鉢等と共に、混入の可能性を考える。1262は、東播系須恵器鉢の口縁部片である。口縁部は玉縁状に肥厚する、Ⅲ-3類か。1263は備前焼壺の底部片。体部下端にケズリ調整を加える。1264は丸瓦の玉縁部、1265は平瓦端部の小片。いずれも燻瓦である。1266はフィゴの羽口の小片。素地粘土中には



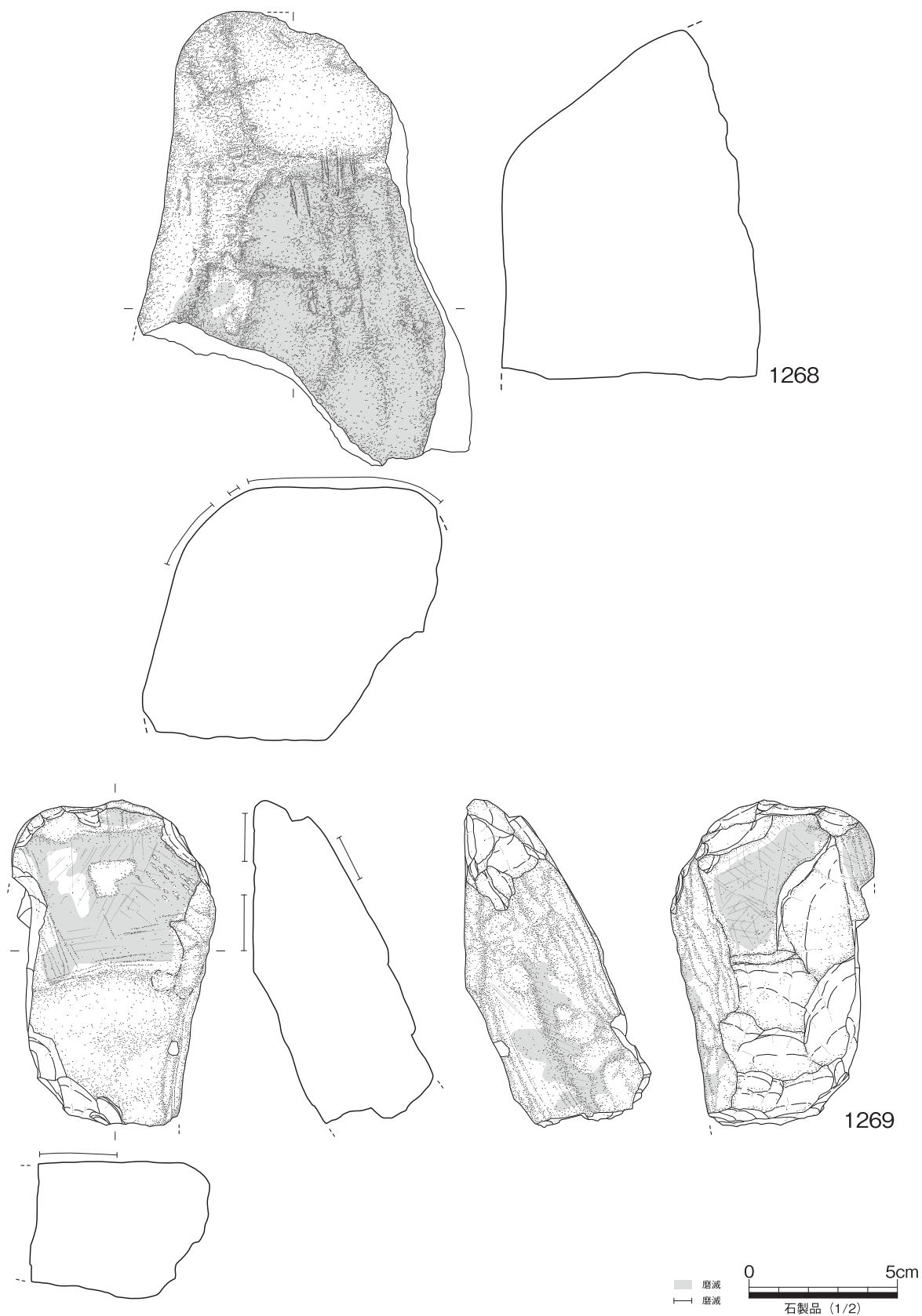
第218図 SG01断面図



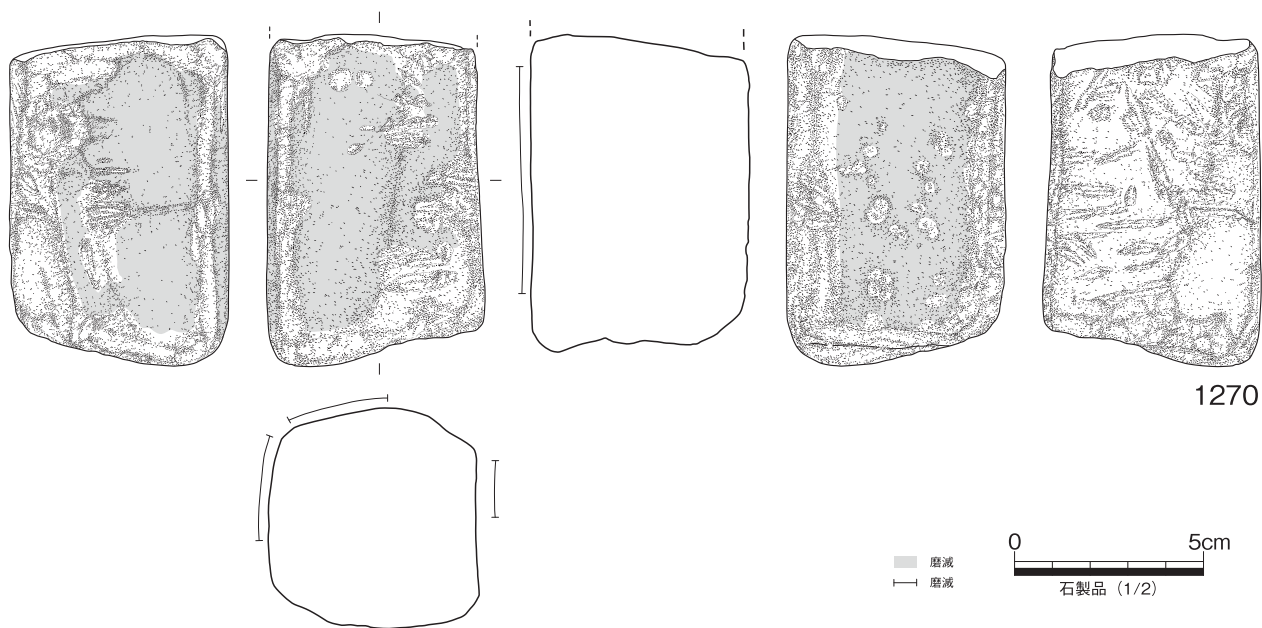
第 219 図 SG01 出土遺物実測図 1



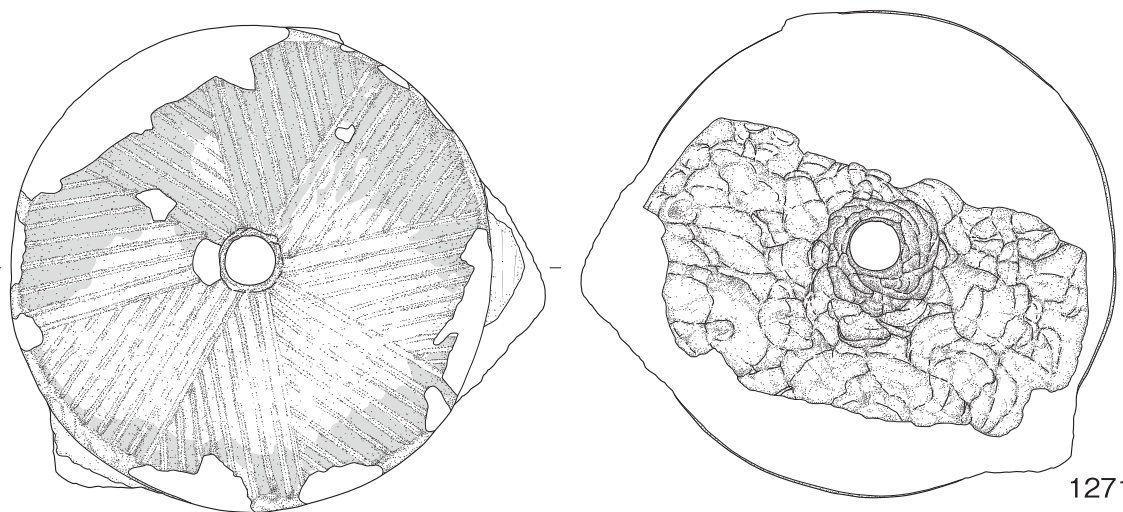
第220図 SG01 出土遺物実測図2



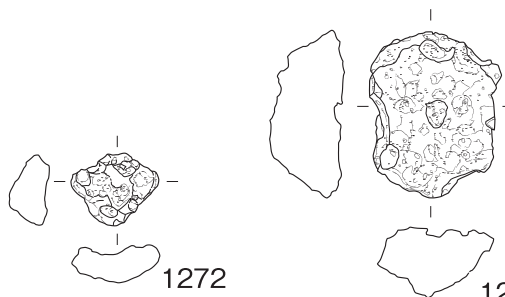
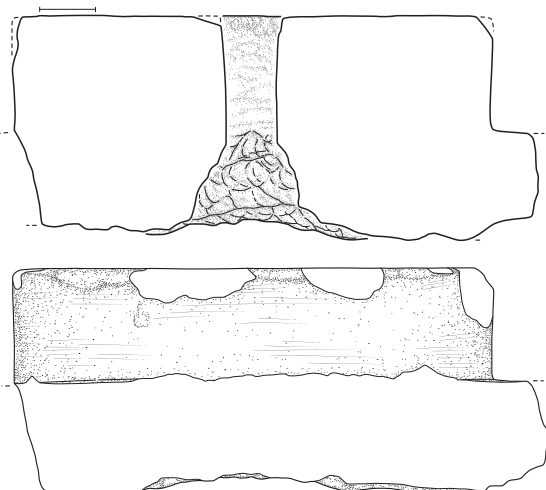
第 221 図 SG01 出土遺物実測図 3



1270



1271



1272

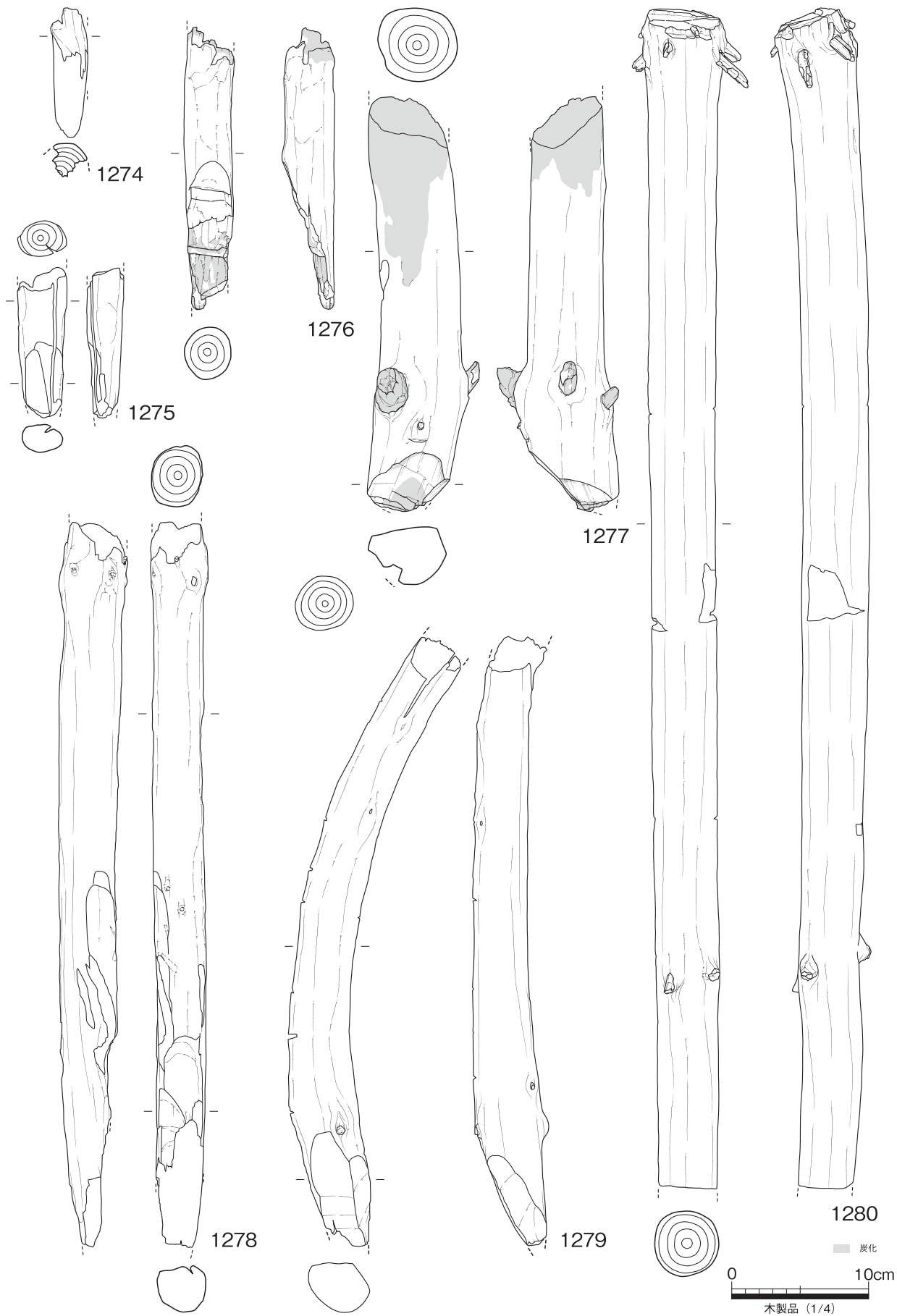
1273

■ 磨滅
--- 磨滅
- - - ツブレ

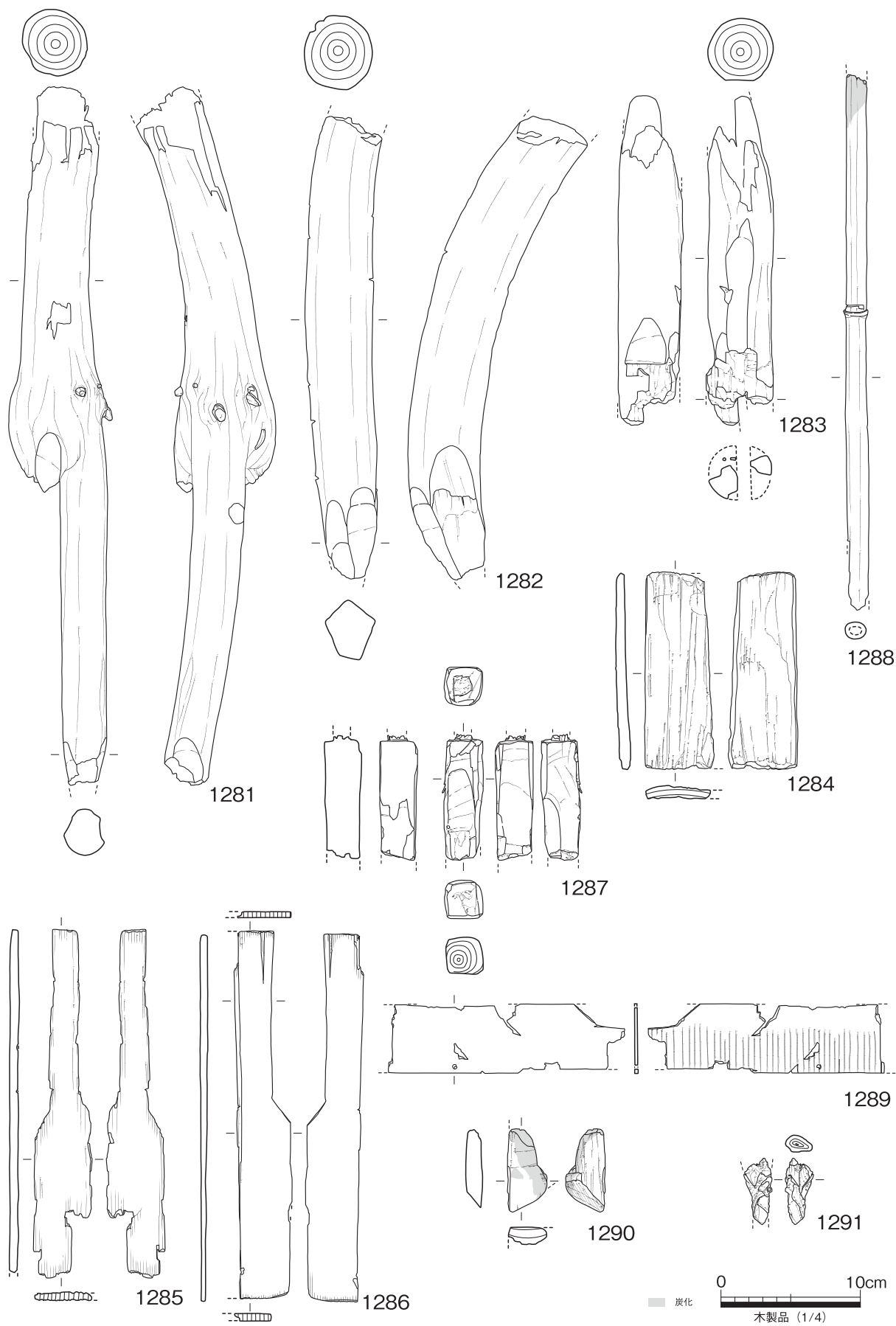
0 10cm
石製品 (1/3)

0 5cm
金属器 (1/2)

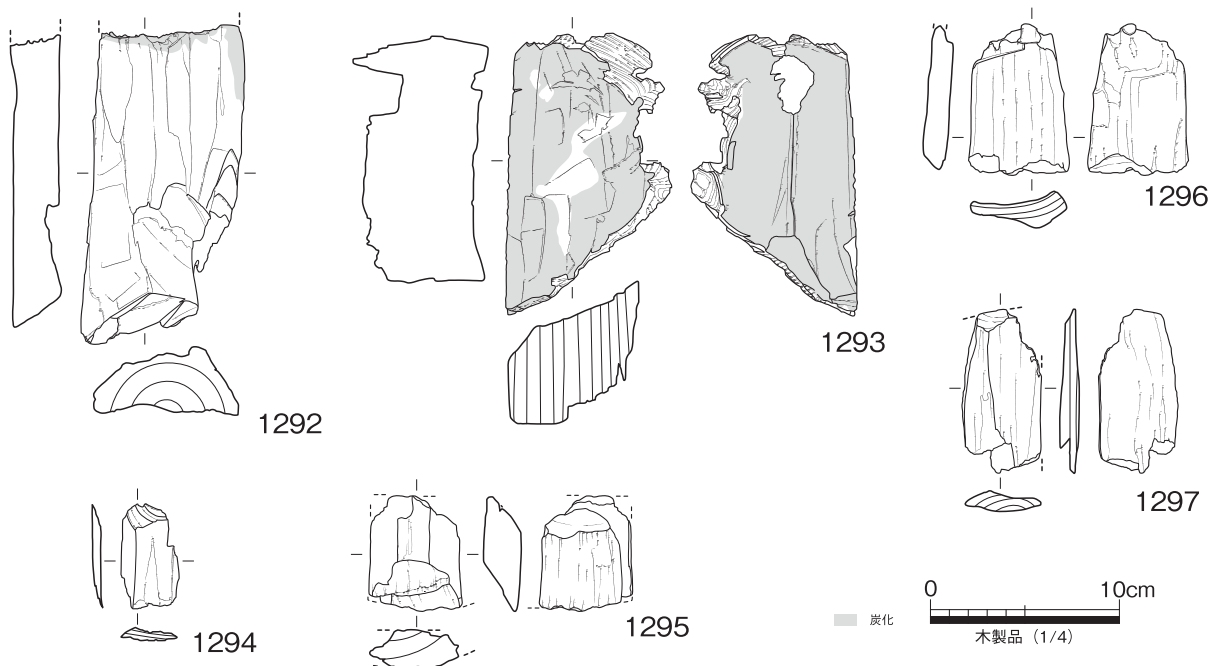
第 222 図 SG01 出土遺物実測図 4



第 223 図 SG01 出土遺物実測図 5



第224図 SG01 出土遺物実測図6



第 225 図 SG01 出土遺物実測図 7

多量の石英等の小石粒を含む。外面は径 5 mm 前後の石粒が融着し、気泡痕が見られる。図上端は幅約 2 cm 程度が黒色化し、一部がガラス化している。また破断面には、芯となる棒状のものに、粘土紐を螺旋状に巻き付けて製作した接合痕がみられる。

上述した遺物のうち、土師質土器杯や同鍋、青磁碗等より 15 世紀前半代を中心とした時期に開削され、土師質土器把手付鍋や白磁皿等より 16 世紀前半代にかけて機能・埋没した可能性を想定する。

1267～1271 は石製品である。1267 は、厚さ 8.5cm 以上の方形板状の砂岩亜角礫を使用した砥石である。残存する 2 面に使用痕が認められ、とくに図左面はほぼ全面がよく使い込まれて平滑となっている。使用後に破損し、破断面を含めて全面に 2 次的被熱による煤が付着する。1268 は、厚さ 9 cm 以上の方柱状を呈するとみられる砂岩の亜円礫を使用した砥石である。1 面のみ使用痕が残され、本資料も非常によく使い込まれている。使用後破損し、2 次的被熱による変色や煤の付着を認める。1269 は、厚さ 4.5 cm の板状を呈する砂岩亜円礫を使用した砥石である。残存する 3 面に使用痕を認めるが、他の 3 点と比して使用頻度は低い。1270 は、5.7～5.9cm 角の方柱状を呈する砂岩亜円礫を使用した砥石である。砥石として側面の 3 面が使用され、とくに図左 2 面は使用頻度が高い。図右端面は、主に横方向の線状の敲打痕が認められ、叩石としても利用されたようだ。使用後破損し、破断面を含め 2 次的被熱により煤が付着する。1271 は、細粒砂岩製の茶臼の下臼である。受皿は大きく欠損し、臼面にも一部破損が見られる。受皿は基部より欠損しており、敲打痕はとどめないが、転用等を目的として意図的に打ち欠いた可能性も考えられる。臼面は 8 分画の切線主溝型 (三輪 1978) で、1 区画に幅 0.9～1.4mm の 9 ないし 10 条の目が、図左下の区画から反時計回りに彫られている。臼面径 19.2cm、軸穴径 2.3cm、脚台部を欠く現存高 8.9cm、受皿基部から臼面までの高さ 4.4cm、臼面のふくみはなくほぼ平坦で、よく使い込まれて磨耗している。臼面の側面と受皿上面は丁寧に研磨されているが、底面は粗い研りの加工痕を残し、仕上げ加工はなされていない。なお、破断面の一部を含め、臼面の一部を残して被熱による黒色化が見られる。

1272と1273は、鍛冶滓の小片である。本遺構からは、上述したようにフイゴの羽口や砥石4点が出土しており、遺構周辺で鉄鍛冶がなされていた可能性が考えられる。

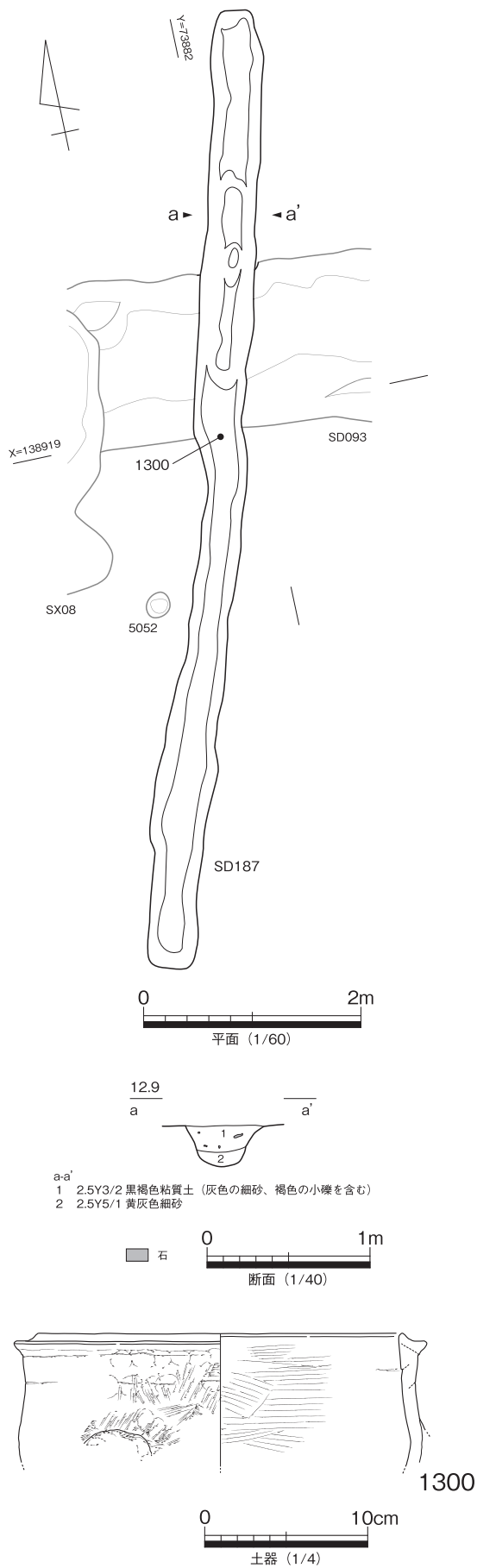
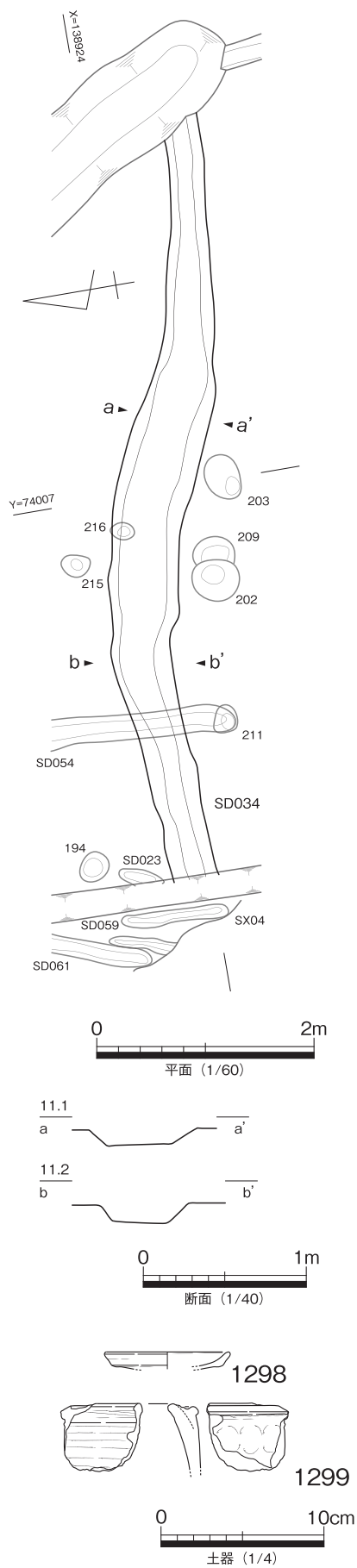
1274と1275は、護岸施設の横木として使用された径3～4cmの木杭である。いずれも乾燥し小片化していたため、先端部分のみ図示した。樹種はいずれもマツ属複維管束亜属（第4章第3節参照、以下同）である。1276は径3.5cmの木杭。下端を1方向から削る。上下端折損し、破断面を含め被熱により炭化する。マツ属複維管束亜属。1277は径4.5cmの木杭。下端を3方向から削る。上端折損し、破断面を含め被熱により炭化する。マツ属複維管束亜属。1278は、護岸施設の東端で横木に直交して出土した径4cmの木杭。下端を1方向から削る。上下端折損。ツガ属。1279は、護岸施設の東側で使用された径4cmの木杭。下端を2方向から削る。上下端折損。乾燥のため大きく変形する。1280は径6cmの木杭か。下端を折損。マツ属複維管束亜属。1281は、護岸施設の西側で使用された径5cmの木杭。下端を2方向以上から削る。上下端を折損。乾燥のため大きく変形する。1282は、護岸施設の東側で使用された径5cmの木杭。下端を5方向から削る。上端折損。乾燥のため大きく変形する。マツ属複維管束亜属。1283は径約5cmの芯持丸木材。図下端付近に刃幅3cm以上のチョウナ痕が残る。用途不明。ツツジ属。1284は、長さ14cm、幅5cm以上、厚さ0.8cmの板目板材。腐食のため調整痕は不明。ヒノキ。1285は、現存長25cm、身幅4.2cm以上、厚さ0.7cmの板材で、形状より杓子形木器として図示した。1286は、現存長26.4cm、身幅4.1cm以上、厚さ0.6cmの板材である。本資料も形状より、大型の杓子形木器として図示した。1287は、現存長9.0cm、幅2.7cm、厚さ2.6cmの芯持角柱状の木製品で、上端に1.5cm角の突起（柄？）を削り出す。上下端折損。用途不明。ヒノキ。1288は、現存長38.3cm、幅1.8cmの竹材で、図上端3.5cm程が被熱により炭化する。用途不明。1289は、幅4.9cm、厚さ0.2cmの薄い板状の材で、図右面に4～5mm間隔で縦方向のケビキが引かれ、下端に径2mmの釘穴が穿たれていることから、曲物側板であろう。出土状況より破損したものを投棄した可能性が高い。1290～1297は、端材や削屑とみられる木片である。一部にヨキやチョウナによる加工痕を残す。また、1290や1292、1293は、一部もしくは表裏面が被熱により炭化する。樹種は、1290と1292、1293がマツ属複維管束亜属、1291がヒノキ、1294がツガ属、1295～1297がヤナギ属。なお、遺構内からはⅢ・Ⅳ層を中心に、上述した種実の他に多量の自然木が出土した。出土した自然木についても樹種同定を実施し、第4章第3節に分析結果を掲載した。分析の結果、ヤナギ属、ムクノキ、クリ、サクラ属、ムクロジ、エノキ属、ニレ属といった広葉樹類のほか、マツ属複維管束亜属が確認された。広葉樹類は、遺構周辺に自生ないし植栽されていた可能性が考えられ、樹種に多様性がある点に特徴がある。針葉樹はマツ属複維管束亜属のみであり、遺構周辺で自生していた樹木以外に、杭材の破片もしくは杭等に加工するため遺跡内に持ち込まれた材の可能性もある。

出土した木杭のうち、護岸施設に使用された1275、1278、1279、1281、1282の5点について放射性炭素年代測定を実施した（第4章第7節参照）。分析の結果、1275は14世紀前葉～中葉、その他の4点は概ね14世紀末～15世紀前～中葉の年代値が示された。1275については判断を保留するが、後者の分析値は、上述した土器資料の年代とも整合するものと考えられる。

溝

SD034（第226図）

1区1面中央部付近で検出した東西溝である。東西両端は攪乱等により切られ、攪乱等より東ないし



第226図 SD034・SD187 平・断面・出土遺物実測図

西で延長溝は確認されなかった。東西長約 7.0 m を調査した。緩やかに蛇行しつつ北に浅く弧を描いて、東西に配される。西端付近で上面より SD054 が穿たれる。検出面幅 0.31 ~ 0.68 m、残存深 0.1 m 前後、断面形は概ね逆台形状を呈する。埋土に関する記録は残されていない。底面の標高は、10.9 m 前後で一定する。

遺物は、図示した以外に器種不詳の弥生土器や須恵器、土師質土器皿、和泉型瓦器碗等の小片が 10 点程度出土した。**1298** は土師質土器皿である。底部は回転ヘラ切りとみられる。**1299** は同足釜もしくは把手付鍋の口縁部小片。体部外面には使用時の煤が付着する。出土遺物より本遺構は、15 世紀前半代を中心とした時期に位置付けられよう。

SD187 (第 226 図)

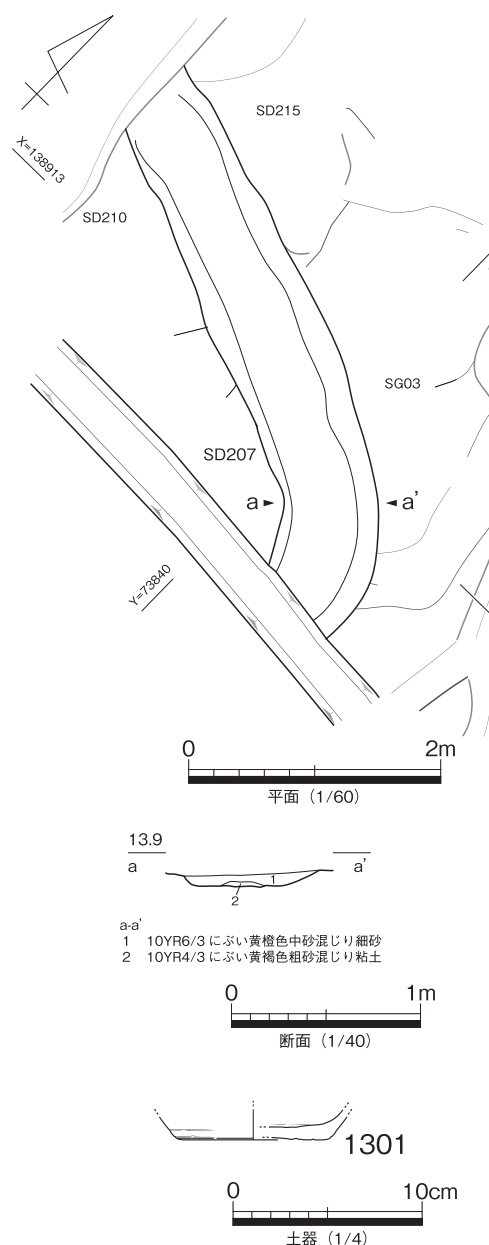
5 区東半部で検出した南北溝である。重複関係より、SD093 より後出する。南北両端は調査区内で途切れ、延長約 8.8 m を調査した。流路方向は、中位で僅かにクランクするが、概ね N 16.22° E に配される。検出面幅 0.42 ~ 0.52 m、残存深 0.26 m 前後、断面形は U 字状を呈する。埋土は 2 層に細分され、上位に黒褐色粘質土、下位に黄灰色細砂がレンズ状に堆積していた。下位層は、本溝機能時の堆積層と考える。溝底面の標高は、南端部で 12.78 m 前後、北端部で 12.55 m 前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していた可能性が考えられる。

遺物は図示した以外に、器種不詳の弥生土器や土師質土器皿や杯等の土器小片が 20 点程度出土した。**1300** は、土師質土器足釜である。脚部は接合部より剥落しており、接合痕のみが残る。口縁部は鋳部と一体に成形され、鋳部の突出度は低い。体部外面には使用時の煤が付着する。

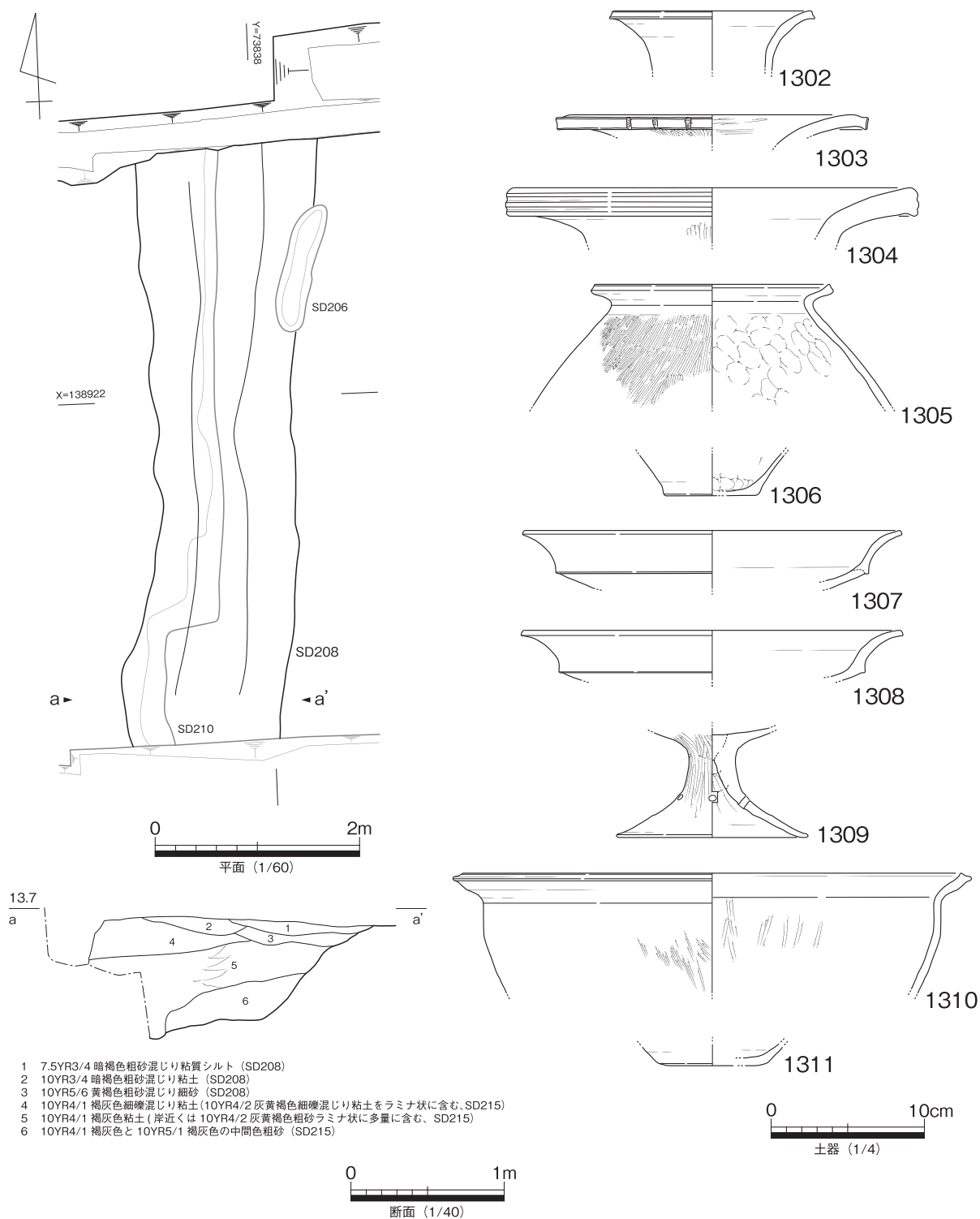
出土遺物より本溝は、14 世紀末 ~ 15 世紀前葉に位置付けられる。

SD207 (第 227 図)

6 区 1 面南西隅部付近で検出した東西溝である。SD215 や SG03、SG04 の上面より開削される。東端は調査区外へ延長し、西端は SD210 に切られ、SD210 の西側で延長溝は確認していない。また、里道を挟んで南に隣接する 9 区においても、本遺構と一連の可能性のある遺構は確認していない。東西長約 4.3 m を調査した。調査区南壁より北西方向へ約 0.7 m 延び、緩やかに屈曲して西へさらに約 3.6 m 延長する。屈曲部以西の流路方向 N 68° W に配される。検出面幅 0.74 ~ 0.85 m、残存深 0.09 m、底面は平坦で断面形は浅い箱形ないし逆台形状を呈する。埋土は 2 層に細分され、主ににぶい黄橙色細砂が堆積



第 227 図 SD207 平・断面・出土遺物実測図



第 228 図 SD208 平・断面・出土遺物実測図

していた。溝底面の標高は、13.7 m前後で明瞭な高低差は認められず、流下方向を特定することは困難であった。

遺物は図示した以外に、器種不詳の弥生土器や須恵器、土師器甕等の小片 15 点程度が出土した。1301 は土師質土器杯の底部片。底面は回転ヘラ切り。出土遺物には、SG03 等よりの混入と考えられる資料が多く認められる。SD215 や SD210 との重複関係より、15 世紀後葉を中心とした時期に位置付け

られるものと考ええる。

SD208 (第 228 図)

6区1面西端部付近で検出した南北溝である。北端は調査区外へ延長し、南端は調査区内で途切れる。南北長約5.80mを調査した。SD215より後出し、SD210が上面より開削される。流路方向N 3.58° Eと、ほぼ正方位に配される。検出面幅1.29～1.75m、残存深0.17m、断面形はやや起伏のある皿状を呈する。埋土は3層に細分され、褐色系のシルトや粘土、細砂がレンズ状に堆積していた。最下層の細砂は、溝機能時の堆積層の可能性がある。流路底面の標高は、南端部で13.36m前後を、北端部で13.29m前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していた可能性が考えられる。

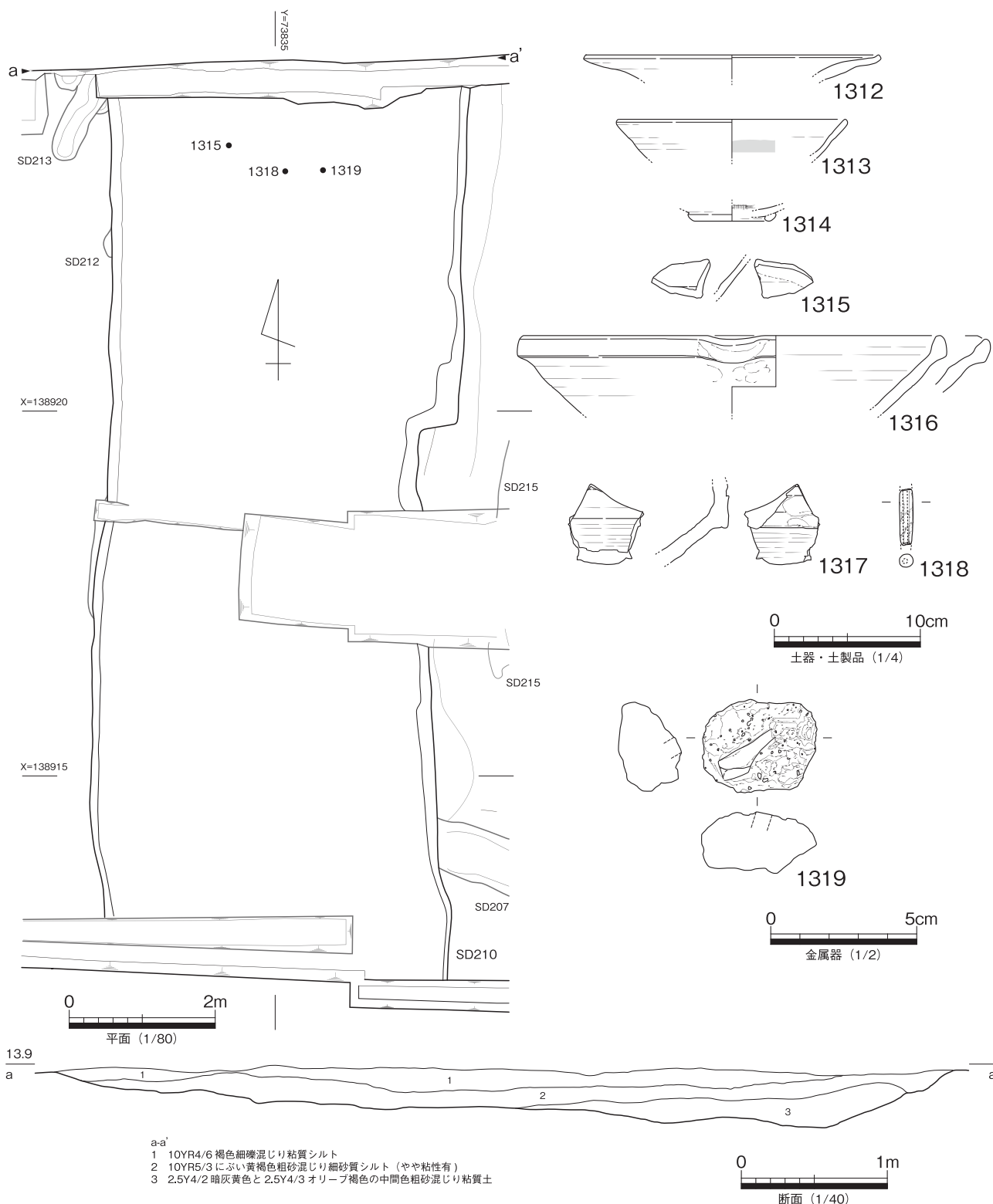
遺物は図示した以外に、弥生土器壺・甕・高杯、器種不詳の須恵器、土師質土器杯等の破片がコンテナ半箱程度出土した。出土遺物の大半は弥生土器が占め、須恵器は器種不詳の小片1点、土師質土器は図示した杯を含む小片3点が確認された。**1302**は弥生土器広口壺。頸部より緩やかに外反して開き、口縁端部は小さく下方へ拡張して、内傾する端面をなす。**1303**も広口壺口頸部の小片。口縁部は水平に近く開き、端部は小さく上下に拡張して端面をなし、ハケ原体の刺突文を施す。**1304**は、大型広口壺の口頸部の小片。口縁部は強く屈曲して開き、端面は下方に小さく拡張して、2条の凹線を施す。**1305**は、香東川下流域産土器の甕である。口縁部は強く屈曲して開き、端部を上方へ摘まみ上げて内傾する端面をなす。頸部内面は、ナデにより丸く仕上げられる。弥生時代終末期に位置付けられる。**1306**も、香東川下流域産土器の甕の底部片である。やや突出した平底を呈する。SD6031出土とされる資料と接合しているが、平面記録に該当する遺構名の記録はない。後期中葉～後葉に位置付けられる。**1307・1308**は、高杯の杯部小片。マメツが顕著なため、調整等は不明である。**1309**は高杯脚部である。円盤充填法により杯部と脚部は接合され、脚部内面には螺旋状に粘土紐を巻き上げて成形した痕跡を認める。また、脚部中位に現状で2孔の径約3mmの円形透孔が穿たれ装飾される。計算上は6孔の透孔が配されるが、欠損部分が多く正確な孔数は不明である。なお、図左側の透孔は貫通していない。**1310**は同大型鉢。口縁端部は上下へ拡張し、端面は内傾して凹線状に窪む。**1311**は土師質土器杯の底部片。全体にマメツが顕著で、調整等は不明瞭である。共伴する弥生土器と比して、器表面の状態が大きく異なる。

出土遺物の大半は混入と考えられる弥生土器等が占め、出土遺物より詳細な時期を特定することは困難である。遺構の重複関係より本遺構は、15世紀後半代を中心とした時期に位置付けられると考える。

SD210 (第 229 図)

6区1面西端部付近で検出した南北に延びる溝状の浅い落ち込みである。南北両端は調査区外へ延長し、南に里道を挟んで隣接する9・10区で延長溝は確認していない。重複関係より、SD207、SD215等より後出する。流路方向N 1.27° E前後と、ほぼ正方位に配される。検出面幅6.14m前後、残存深0.48m前後、断面形は皿状を呈する。埋土は3層に細分され、主に褐色系のシルトや粘質土がレンズ状ないし水平堆積していた。遺構底面の標高は13.53m前後で、若干の起伏を認めるものの概ね一定していた。埋土に明確な流水下の堆積物が認められない点や、上述した遺構の形状より、後述するSD215上面に生じた窪地を整地し、耕地として利用した可能性が考えられる。

1312は、弥生土器広口壺の口縁部小片である。端部は内傾し、小さく上方へ摘まみ上げる。**1313**は



第 229 図 SD210 平・断面・出土遺物実測図

土師質土器杯。内面下半部に炭化物が付着する。**1314**は十瓶山周辺窯産の須恵器碗の底部片である。**1315**は白磁碗の体部片。体部外面下半に釉は施されず、内面下端には段もしくは沈線が認められることから、太宰府分類白磁碗ⅡまたはⅣ類の可能性を考える。**1316**は東播系須恵器片口鉢。口縁部は上方へ拡張し、端面は丸みを有する。Ⅲ-2ないしⅢ-3類であろう。**1317**は備前焼播鉢の口縁部片で、片

口部の小片とみられ、口縁部外面に指オサエ痕を認める。口縁部形状より、乗岡中世6に位置付けられる。**1318**は、土師質焼成の管状土錘である。上下端部を欠損し、器表面はマメツが顕著だが、幅7mm程度の粘土紐を軸に螺旋状に巻き付けて製作した痕跡が明瞭に残る。**1319**は鍛冶滓の小片。

出土遺物の主体は12世紀後半代のものが占めるが、上述したようにSD215等より後出する点と**1317**より、本遺構は16世紀前半代を中心とした時期に位置付けられると考える。

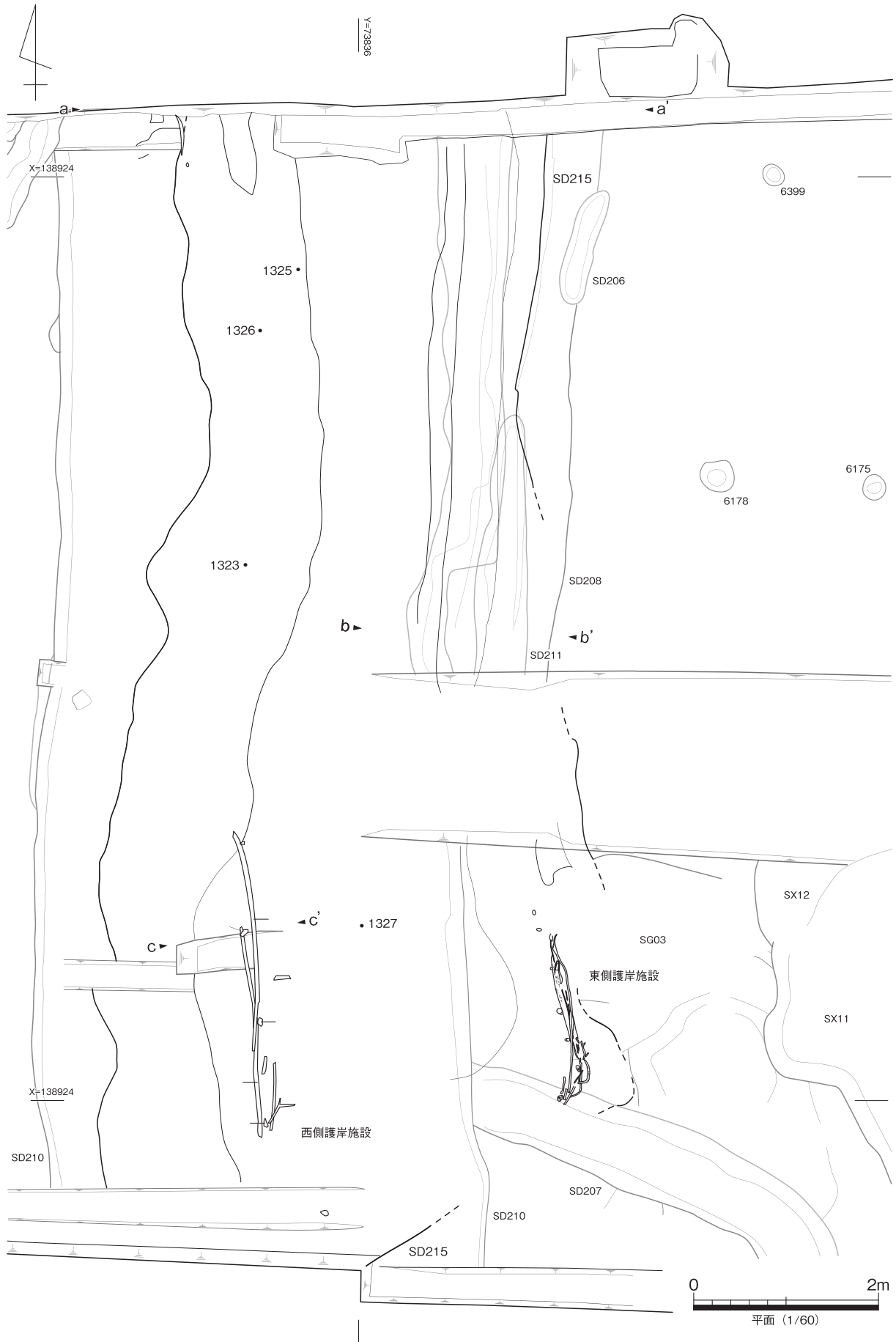
SD215（第230～236図）

6区1面西端付近で検出した、南北に溝状を呈して検出した遺構である。上面を上述したSD210等が南北走し、重複関係よりSG03より後出する。南端は調査区内で途切れる（第21図下）ことから、調査時には溜井の可能性を想定した。本遺構の東から南にかけて、既述したSG03が開削されているが、第21図の断面図では、本遺構とSG03底面の標高値はほぼ合致し、両遺構の堆積物は細かく分層されてはいるものの、一連の堆積物である可能性も否定できない。また本遺構は、後述するように下層は洪水堆積の可能性が想像され、中層についても弱流水下で徐々に埋没が進行したことが想像され、止水域での埋没の可能性は低いと考える。さらに平面図では、本遺構の南東部の掘り方平面プランは、断続的に描かれ歪な形状を呈し、東側護岸施設との位置関係は、西側施設での両者の位置関係と大きく相違し、やや不自然な観は拭えない。以上の点から、本遺構はほぼ直線状に開削された南北溝として報告する。南端は調査区外へ延長し、南に位置する9区西端に近現代溝（平面図には攪乱として記載）が開削されて大きく攪乱を被り、延長溝は確認されない。

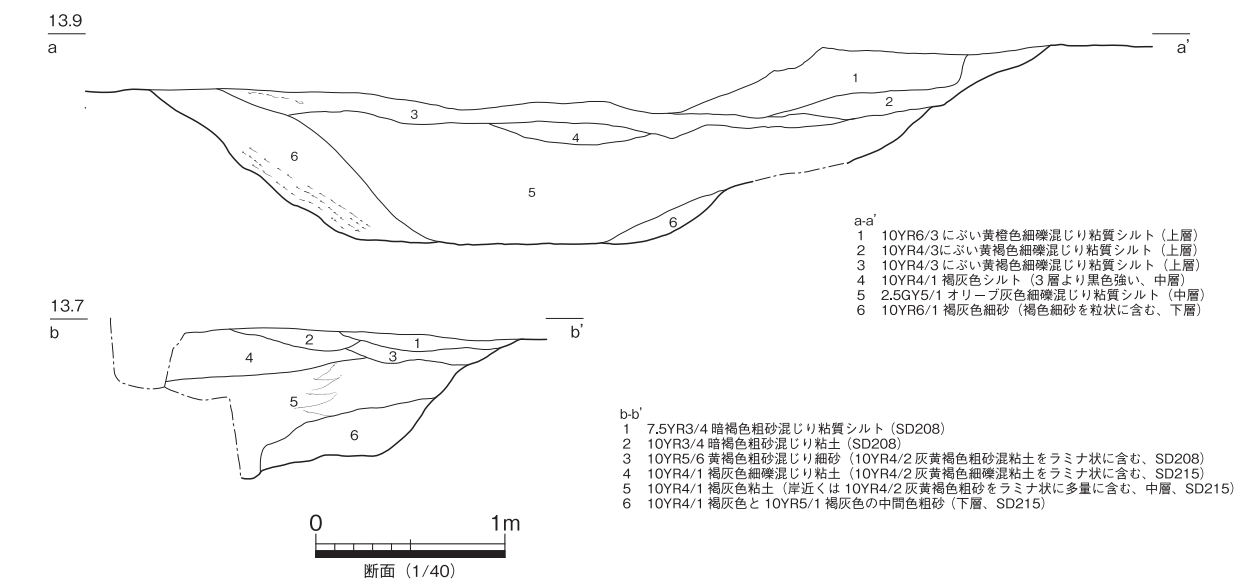
検出面幅3.3～5.4m、残存深0.8～1.1m、断面形は逆台形状を呈する。埋土は、調査区北壁の土層図（第21図上・第219図）で、6層に細分される堆積物が確認され、3層に大別されている。上層は、黄褐色粘質シルトで3層に細分され水平堆積していた。各層は、下位層上面を削奪した後に堆積していることから、人為的な堆積物と考えられ、整地土ないし耕作土の可能性が想定される。中層は灰色系のシルトで、後述する下層を大きく掘り込み堆積しており、改修後の堆積物と考えられる。下層は褐灰色細砂で、溝開削時の堆積物と考えられ、中層上面近くまで堆積が及んでいることから、洪水等により開削後短期間で溝が埋没した可能性も想像される。溝底面の標高は12.4～12.5m前後を測り、若干の起伏がみられるものの一定する。

さて、上述したように溝南端付近で、東西両岸に護岸施設が設けられていた。西側護岸施設の断面図（c-c'）を参照すると、護岸施設は黒褐色粘土層堆積後に、同層上面の一部を削奪して木杭を打設し、その前後に横木を設置したことが記録されている。この黒褐色粘土層は2層に細分され、下位層には細砂のラミナ堆積が認められることから、色調はやや相違するものの、b-b'断面の5層（中層）に相当するとみられる。中層の堆積により、溝としての機能は喪失しており、護岸施設を設置した要因については不詳とせざるを得ない。しかし、護岸施設が設置された周辺は、SG03やSD093等の水利に係る複数の遺構が重複し、東西の溝壁面が軟弱であった可能性は容易に想像され、壁面の保護を目的とした可能性は高い。

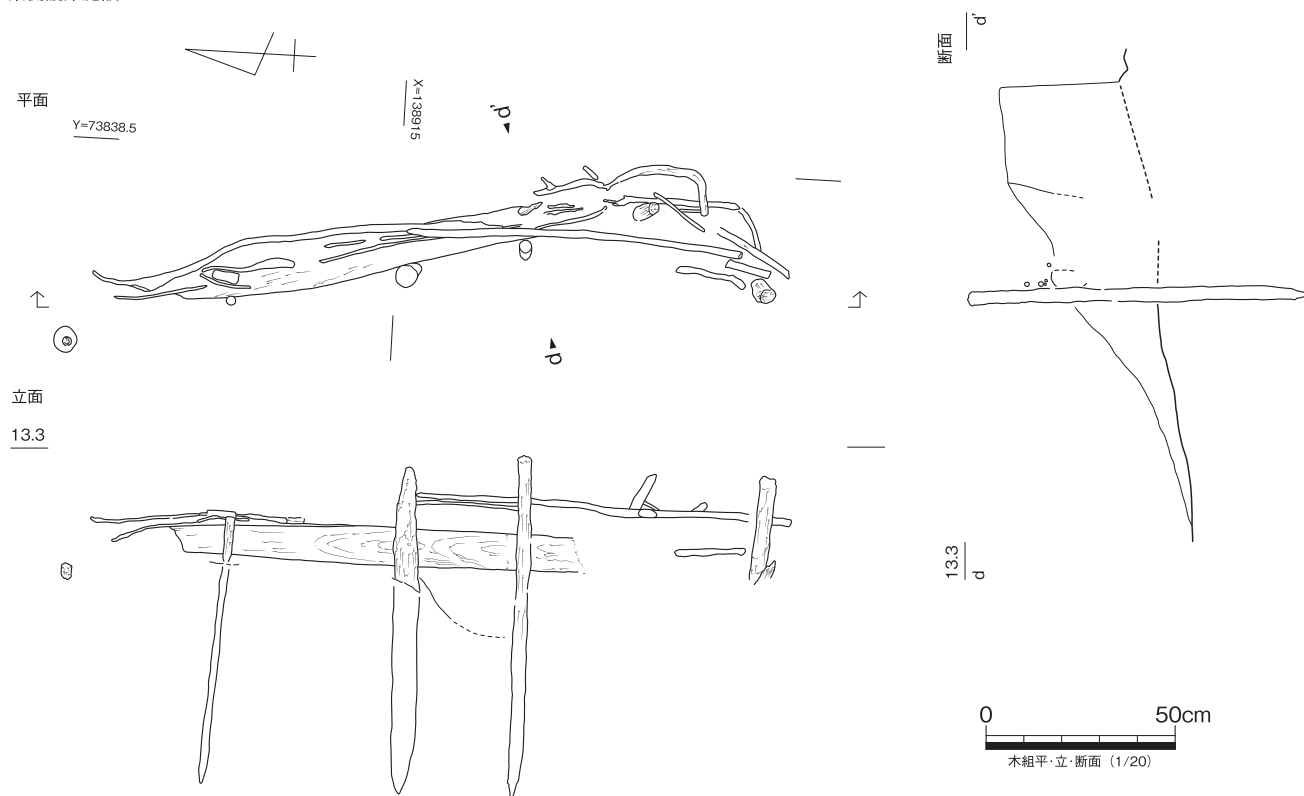
東側護岸施設は、木杭7本を25～55cmの間隔でランダムに打設し、その背後にまず、長さ約1.1m、幅約10cm、厚さ約4cmの板材を木杭に沿って立て置き、その上位に長さ0.1～1.6mの自然木や杭材とみられる材を、一部重ね置いたもので、南北長約2m、主軸方向N13.47°W、自然木等の材上面から板材下端までの深さ約0.2mを測る。木杭の長さは最も長いもので約86cmあり、上述した板材より下を根



第 230 図 SD215 平面図



東側護岸施設

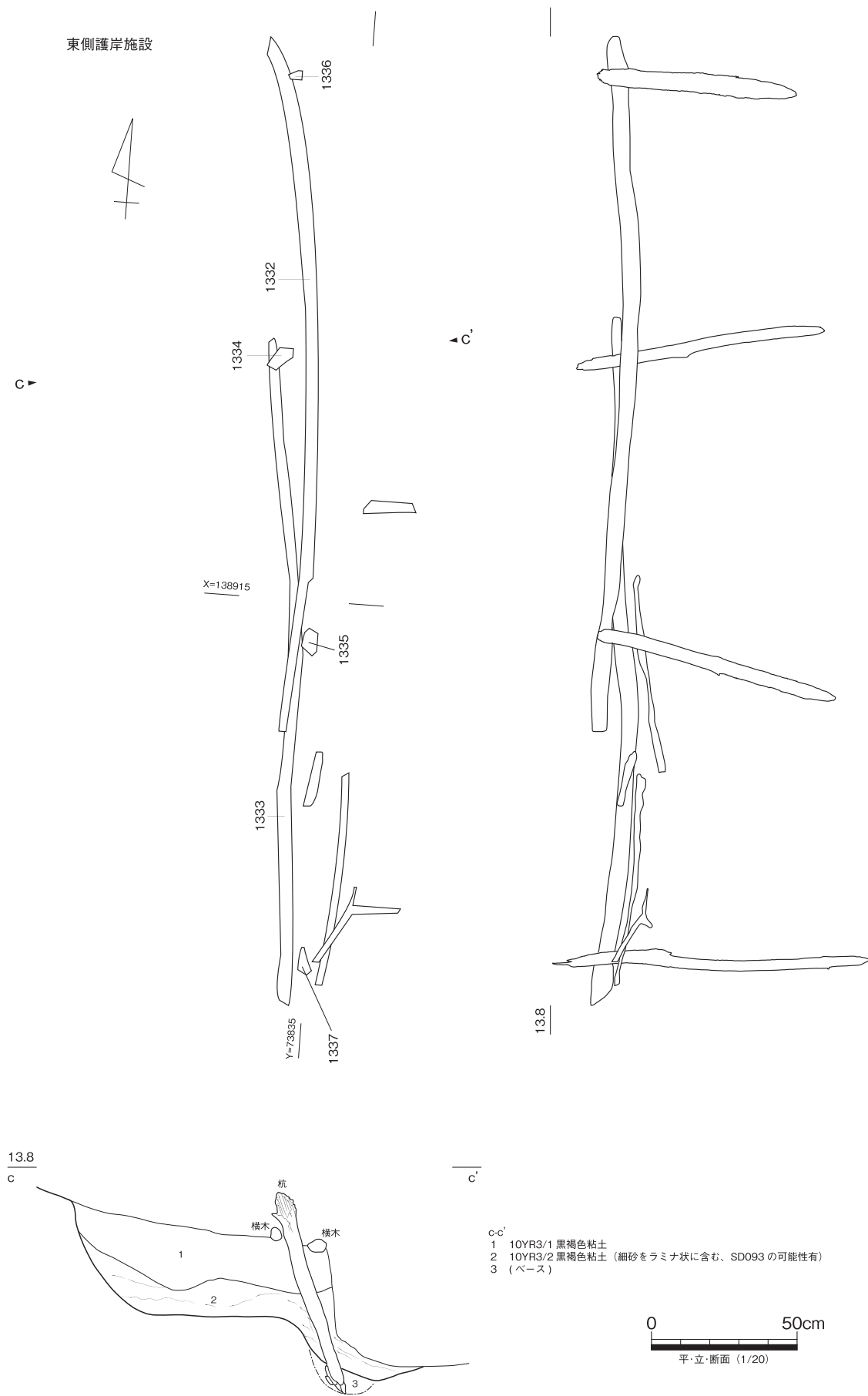


第 231 図 SD215 断面・東側護岸施設平・立・断面図

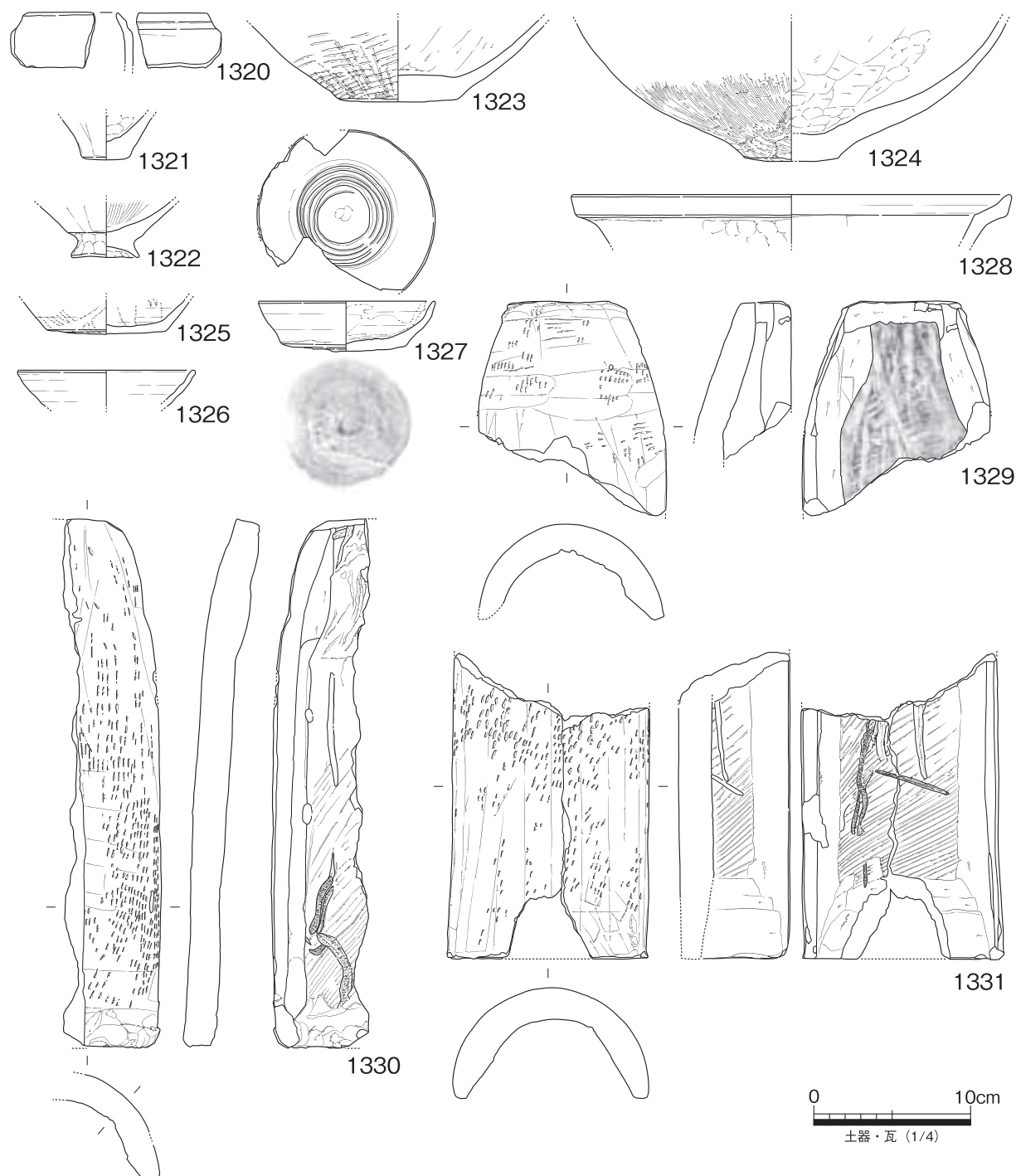
入れとすると、その長さは約 50cm であった。

西側護岸施設の平・立面図は、模式図に一部修正を加えたものである。記録では、4 本の木杭を約 1.0 m 間隔に打設し、その前後に長さ 0.7 ~ 2.3 m 前後の横木 5 本を配しており、南北長約 3.3 m、主軸方向 N 5.21° W であった。

1327・1329 ~ 1331 は上層より出土、以外は出土層位不詳である。1320 は縄文土器浅鉢の口縁部小片。1321 ~ 1324 は弥生土器壺や鉢等の底部片である。1325 は須恵器杯の底部片。内外面に火襷痕が



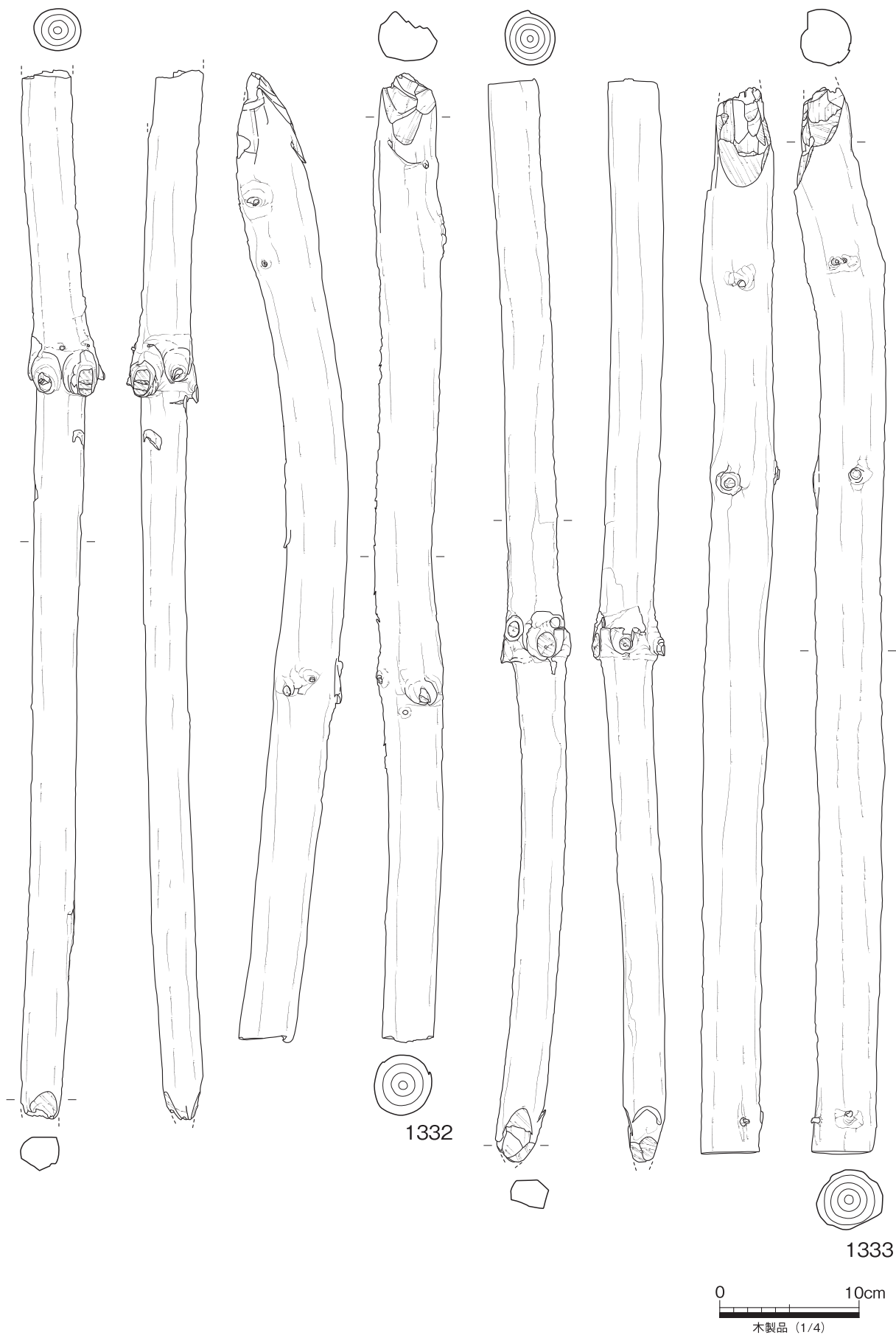
第 232 図 SD215 西側護岸施設平・立・断面図



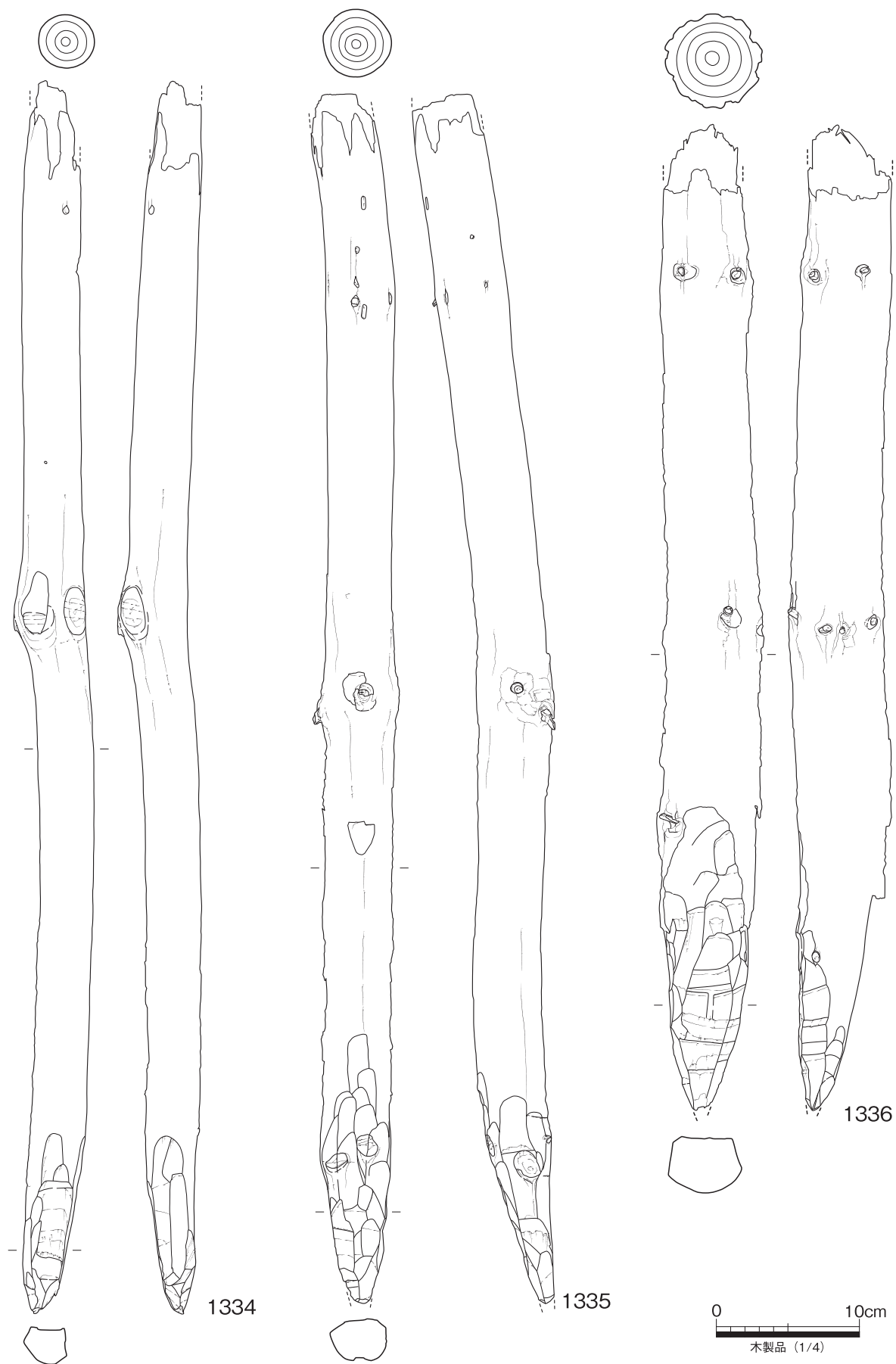
第 233 図 SD215 出土遺物実測図 1

見られる。以上の資料は重複するSD093からの混入の可能性が考えられる。1326・1327は土師質土器杯。1327は、底部回転ヘラ切りでナデ調整を施す。1328は、土師質土器鍋の口縁部片か。内外面マメツが顕著。1329～1331は丸瓦の小片である。

1332～1337は、西側護岸施設に使用された木杭や横木、1338は詳細な出土位置不詳の木杭小片である。東側護岸施設の杭材や横木については、遺物として取り上げていない。1332と1333は横木で、数点に破片化して取り上げられていた。掲載の都合上、各々加工痕の残る両端部の破片のみ図化した。1332は、長さ1.45m、最大径8.0cm、1333は長さ1.53m、最大径5.2cmの枝を払ったのみの芯持丸木で、



第 234 図 SD215 出土遺物実測図 2



第 235 図 SD215 出土遺物実測図 3



両端部を各々2方向より削り尖らせている。1334～1337は木杭で、最大径3.5～7.0cm、いずれも上端を折損しており、最も長い1337の長さ108.5cm以上である。下端は、いずれも周囲3方向以上から削り尖らせている。樹種(第4章第3節参照、以下同)は、全てマツ属複雑維管束亜属であった。**1338**は、木杭の先端部の小片。樹種はヒイラギ。

上述した西側護岸施設の構築材6点について、放射性炭素年代測定を実施した(第4章第7節参照)。分析の結果、**1332**は15世紀中葉～後葉、その他は15世紀前葉～中葉の年代値が得られた。出土遺物や年代測定の結果、周辺遺構との関係を踏まえ、本遺構は15世紀前葉～中葉に開削され、護岸施設は15世紀中葉を中心とした時期に設置、以後16世紀前葉までに埋没した可能性を想定する。

性格不明遺構

SX15 (第237図)

13区南東隅で検出した大型の落ち込み。東端は調査区外へ延長し、西端は試掘トレンチの攪乱を被るため、全形は不明。SD272、SD278の上面より掘り込まれる。平面形は、長軸4.0m以上、短軸1.7～2.8m、主軸方向N 58.65°Wに配された、不整隅丸台形状を呈するとみられる。残存深は0.06m前後と浅く皿状を呈し、底面には若干の起伏が認められた。埋土は黒褐色粘質土の単層であった。

遺物は、図示した以外に、器種不詳の須恵器小片のほか、土師質土器皿・杯・播鉢、瓦器碗、備前焼等の中世の遺物のほか、近世陶器片が少量出土したとの記録が残されており、埋没時期は近世以降と考えられる。**1340**は和泉型瓦器碗の底部小片。見込みは格子状暗文が施されるとみられる。上述した理由より、混入資料であろう。**1339**は土師質土器皿。13世紀代。**1341**は龍泉窯系青磁碗と考える。15～16世紀代の細線蓮弁文の碗で、二次的な被熱のため、釉が再融解して文様が不鮮明となっている。

図示した遺物以外に近世陶器片の出土が記録されているが、中世段階の所産が支配的であることから、

第236図 SD215出土遺物実測図4



第237図 SX15平・断面・出土遺物実測図

前者を混入品と理解して、中世後半（15～16世紀）の遺構と考える。

